
なんでやねん！

B G L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでやねん！

【Nコード】

N9105X

【作者名】

BGL

【あらすじ】

平穏な日常を愛する高校二年生の天堂陸。

だが穏やかな陸の日常は、陸への恋心を燃やす幼馴染みの少女——綾崎紫苑と五年ぶりに再会したことで、愛と情欲と陰謀が渦巻く日常に激変する。

財閥の令嬢である紫苑は、その可憐な容貌で綾崎グループのCMや雑誌で活躍中。その洪い若武者口調と男らしい性格で大ブレイク。

紫苑曰く乙女ザムライ。

紫苑は陸の恋人になるため、次々に愛 作戦（ラヴ オペレーション）を実行！

夜這い、甘言、無理矢理、監禁、虚言、色気、脅迫など。

そこへ、紫苑の婚約者にして世界有数の財閥の息子のアレックが参上。

三つ巴の恋戦が始まる！

この物語は、恋に狂った二人の富豪と、平穏を愛する庶民が激動の三角関係を繰り広げる疾風怒濤の恋愛ギャグである。

*小説＆投稿屋に投稿した作品を加筆修正しています。

プロローグ

てんどうりく
天堂 陸

夢を見ているのが不思議とわかった。
微妙に思い通りにならない体や意思。そして、ふわふわと捕らえ
どころのない曖昧な感覚からわかる。

今回の夢は忘れもしない……小学校六年生の頃のある別れの記憶。

それは晴れた昼下がりの午後だった。

近所で有名なほど大きい家……というより屋敷に住んでいる幼馴染みの少女が、両親の仕事の都合でアメリカに引越しする事になった。

家の周りには少女の両親が呼んだ引越しの業者の人達が、忙しく荷物をトラックに運び入れている。

そして——視線の先には恐ろしく整った容貌をした少女がいた。

流れるように艶を帯びた天然の茶髪は背中まであり、一度視線が合えば吸い込まれそうな黒瞳が印象的だ。鼻筋のラインは綺麗の一言に尽きるし、形の良い唇は視線を逸らせなくらい可憐さに満ちている。

まだ幼さを残すものの、もう数年もすれば、きっと誰もが褒め称える美人になることは間違いないと思う。

ブラブの恋人同士になろうという私の計画があああああっ！しかも、アメリカ！？ そんな意思の疎通とかはかれないじゃないかあああっ！　しいていうなら作文書こうと思って本の題名書いて、自分の名前書いて、さあ、書くぞ、と思ったら何にも書かないうちに、物理的法則を無視して、一行目の二マス目にいきなり句点うたれて、終わりって感じじゃないかツツツ！」

紫苑の全音量をもってして告げた恐るべし愛の告白に嬉しいと感じつつも、どこか素直に喜べない自分がいることに気が付く。

「というか無理矢理押し倒して、なぜラヴラヴになるんだ！？」

「な、何言ってるのか俺よくわからないよ！？　それに、ちよっと声のトーンを落として冷静にだな……」

「なんで、陸はそんなに落着いていてるでござるか！？」

尋ね返す紫苑の声は、雲を裂く稲妻よりも鋭い。切れ味抜群だ。

こんなんで髭剃りをしたら、きつと両頬は血塗れになるだろう。

紫苑の心は不可解の三文字に縛られているのか、先程よりも酷く暴れます。

ウサギのぬいぐるみの耳に歯をたてながら、壁にウサギのぬいぐるみを押し付け、そのボディに連続で拳を打ち込み、捻り込み、鋭くえぐるようにダメージを与える様子は目を反らしたくなるほど「む、むごい」と戦慄と共に絶句するしかない。

ウサギのぬいぐるみに命があるなら、悲鳴を上げていることは間違いがなかった。

そして——突然、紫苑はウサギのぬいぐるみをいたぶる手を止めると能面のように無表情な顔つきでひっそりと呟く。

「縛り付けて、無理矢理車のトランクに入れて、アメリカに連れて行こうかな……空港に着いたら、そうだな……あのポストンバックの大きさなら入ることができるだろう」

誰をとば聞かない。わかりきっているからだ！

「お、おおお、おおお落着けよ紫苑ツツ！　一生会えない訳じゃない

いだろ？ な？ な！？ なぁッ！？」

小学生の俺は必死の形相で、危険な笑みを浮かべている紫苑の肩を揺さぶって説得する。

小学生にして、俺は生か死かの究極の状態に追い詰められていた。
「むっ……そうか？」

疑わしそうな視線だッ。全然信じていない目だ！ 狂気が宿った瞳だ！！

「そうだよ、そう！ そうに決まってるじゃないか！」

悩む素振りを見せる紫苑に一気に畳み掛ける。じゃないと、俺は死ぬ。死んでしまう。

「そうだな……」

「そうだよ！」

紫苑が納得した顔で頷くのを確認して、俺は安堵の笑みを……

「アメリカはキスを挨拶代わりに頻繁に行うらしいし、恋愛のほうも進んでいると聞くからな……ラヴの勉強にはちょうど良いかもしれない、なっ！」

——凍りつかせる！？

確かにこの紫苑という幼馴染、転んでもただでは起きない所がある。

全身の血液が凍るような錯覚を覚えてしまう。

「フフフ……！ 待っている陸ッ！ 私はアメリカで恋の武者修業をすることに決定多数で、大決定だッ！」

ビシリと右手の親指を、俺の鼻先に突きつけて紫苑はのたまう。

その瞳には、燃え盛る恋の野望が見えた。それはもう天下布武を唱えた織田信長はこんな眼をしていたのかと思うくらい。

「そう、再び陸に相見るその時は、私は天下無敵の乙女ザムライとなつて、陸を何て言うか、いただきますだ！ 押し倒すだ！ 無理矢理だ！ 陥落で愛の奴隷だ！」

ご近所の人々に響き渡るくらい声高に宣言する紫苑に、俺は乾いた力の無い笑いをするしかなかったわけで……

第一章 穏やかな日常よ、さよなら

堂家

天

堂陸

《天

「んっ……んーん………」
瞳を開けると、見慣れた自分の部屋が瞳の中へと、飛び込んでくる。

暫く呆けたように、視線の先にある部屋の白い壁を見ていた。

「ゆ、夢……か……？」

呟いて、ようやく思考が鮮明になってくる。

手に抱えていたクッションを布団に置き、ベッドから抜け出した。俺には妙な癖がある。

それは、寝ていると無意識に近くにあるものを抱きしめてしまうというものだ。

「ん~~~~~……っ」

二、三度大きく伸びをすると、ついさっきまで見ていた映像を脳裏に思い浮かべようと、頭を働かせる。

大きく息を吐いた。頻繁と言うほどではないけど、数週間に二、三度くらいの頻度でよく見る夢。

詳しい内容まで覚えていないけど、懐かしい中にも衝撃的要素が

かなり伴う幼い頃の記憶……。

少し気だるげに前髪をかき上げる。

「……暑いな」

時計を見る。そこに表示されてる時刻と温度を見た。

クーラーの冷気が消えた室内の温度は、28 を表示している。

窓を閉め切っていることと暑さを増してきた日差しのせいで、室内は蒸し風呂になりつつある。

窓辺に立ち寄り、勢いよくカーテンを開いて窓を開け放つ。

季節は夏。

網戸越しの外の世界は、朝からギラギラと暴力的に太陽が輝いている。

窓越しに聞こえる蝉の大合唱が、夏独特の雰囲気を選んでくる。

夏の太陽を直視してしまい、思わず目を細める。今日も暑くなりそうだ。

学校は夏休みに入り、部活もバイトもしていない俺はのんびりとした夏を過ごせそうだった。

自然と唇が笑みの形を作るのを感じる。

透き通った青い空。鮮やかな白い雲。蝉の鳴き声。唐突に初夏の涼風が駆け抜け、窓に吊るした風鈴が軽やかな音色を響かせた。

何といっても身体中に降り注ぐ、太陽の暑い日差し。

これらを素直にいいなと感じられる穏やかな日常。

それを俺は大事にしていた。

「……午後から図書館に夏休みの宿題でもやりに行くかな」

自分の部屋にある出窓の棧に腰掛けて、青空を見上げる。

夏の雰囲気を一時楽しむと、洗顔を済ませてリビングへと向う。

その途中で共通廊下の壁に掛けてある伝言板を見る。

「母さんは買い物で、海は、本屋……か」

海とは俺の双子の弟のことだ。現在同じ高校に通っている。

クラスは別だけど、隣のクラスなので体育とか一緒だし、休憩時間も一緒にいることが多い。

リビングにある壁時計は自室で見た時刻から十分ほど時を進めており、午前十時半に差し掛かっていた。

食卓に置かれていた食パンに、いちごジャムをつけて食べると、何気なしに食卓の上にあったテレビのリモコンを手に取り、テレビの電源のスイッチを押す。

アナログ放送が終わり、地デジの開始と共にブラウン管のテレビから液晶TVへと買い換えた。

分厚さがなくなり、薄型のテレビは綺麗ではあるが、なんとなく頼りない気がするの俺だけだろうか。時代の流れと共に何もかもが変わっていく。

変な物悲しさに囚われていた俺だったが、浮かび上がった映像を見て口を止めた。

テレビにはさっき夢の中で出てきた少女——紫苑がCMに出ていた。

正確には夢の頃の小学生の外見とは違い、俺と同じく十六歳の姿でだ。

昔と違い、少しシャギーの入った大人っぽい印象のショートカットのヘアースタイル。

小さい頃よりもずっと綺麗に女性らしくなった美しい容貌は、多くの者を魅了して止まない。

だが、まあ……

『恋する女子にお勧め！ 愛しきあの者の心を手にせよ！ いつもおぬしの唇を私に独り占めさせてくれぬか！？』

桃色の口紅の宣伝をする紫苑の性格は、どうも昔と変わっていないみたいだ。

ところが、この紫苑の普通の女の子と違う独特の性格……つまり

見た目は清純派美少女なのに、性格は竹を割ったようなさっぱりとした気質に若武者口調というアンバランスな魅力が、大衆に人気がでている。

今では綾崎紫苑と言えば、芸能人並みの知名度の高さを獲得していた。

CMに出ているわけは、紫苑の祖父——綾崎秀士氏にある。

彼は巨大複合企業経営者の社長で、様々な経営に着手している。

そのため彼の事業のイメージアップの一環として、孫娘である紫苑がCMや雑誌などに出ているという訳だ。

日本人とは違う垢ぬけたファッションセンスが女子高生に受けていて、女性用のファッション雑誌やクラスの女子の間で紫苑の名をたびたび耳にすることがあった。

少し寂しげな笑みを口の端に刻む。

昔は幼馴染みと言う関係だったけど、今は元幼馴染み。仲の良かったとは言え、おそらく小学校の幼馴染みなんて紫苑はとうの昔に忘れてしまっているだろう……。

それこそブラウン管のテレビが徐々に各家庭から消えていくように、彼女の思い出の中の俺も消えてしまっているに違いない……
事実、引越してから紫苑から手紙や電話の類いはなかった。
怒りはない。

あるのは何か胸の奥が寂しいような悲しさだ。

テレビの電源を消すと、食欲を失っているものの、食べかけの食パンをほうっておく訳にもいかなないので、強引に残りの食パンを口の中に入れる。

いつもの甘さをどこかに置き忘れてしまったような……空虚な味がした。

食べ終わると、図書館に行く準備をする。

藍色のジーンズを穿くと、肩から袖の部分がミリタリーの柄がプリントされた黒のTシャツに着替える。

それから洗面所に向くと、寝癖のついた髪を水で軽く整える。当

然の如く正面の鏡に映る己の顔。

父さんに似れば男らしい容姿になったのに……そう思う中性的な顔立ちをしている。

しかも、声変わりがすんでもあまり低い声にならない。

パツと見て一瞬、男か女か判断がつかないと友達は言う。

言動や服装、雰囲気からで男と判るらしいが……それはつまり、少し女の子っぽい服装をすれば、ボーイッシュな女の子と思われるということだ。

だから女々しいと言わないまでも、男らしくない自分の容姿があまり好きではない。逆に父さんのように男っぽい容姿に憧れてしまふ。

ため息を一つつく。容姿のことなんて考えたって仕方がないことだ。

「行くか……」

それから勉強道具をバッグに入れて、外に出ようと玄関まで来た瞬間のことだった。

プルルルルル……。

「あ、電話か……」

慌てて履いていた靴を脱ぐと、共通廊下に置いてある電話を取るために、来た廊下に戻る。

プルルルルル……。

急いで電話機に向かうと、受話器をとった。

「はい、天堂ですが」

「……………」

返事をする、相手は沈黙を保ってくる。

絶え間なく、何かのアナウンスとかが聞こえてくる。駅だろうか？

『……陸か？』

受話器から俺と同年齢くらいの少女の声が俺の名前を呼ぶ。綺麗な声だ。けど内心の芯の強さが滲み出た凜々しい口調。

ドクッ！

(この声……！？)

心臓の鼓動が大きくはね上がるのを感じた。

電話の相手は、さっきテレビのCMで聞いた少女の声に……似ている気がした。

「……………ッッ」

にわかに信じられない現実を眼前に突きつけられ、声なく固まってしまう。

『陸じゃ……ないの、か……？』

「あ、はい、そうですが……」

不安な思いを感じさせる声に反応して、戸惑いいつも慌てて返事をする。

けど俺の戸惑いは、少女の怒声にかき消された。

『遅い、遅い、遅い、遅いぞ、陸！』

「す、すまん……？」

謎の少女の剣幕に反射的に謝罪してしまう。い、一体何なんだ？
『全く、どうしてすぐに返事してくれないんだ！？ 凄く怖かった
ではないか！ だが、まあなかなか男の色気に溢れる声音になった
な陸！ 私の乙女回路はピュアにドキ ドキと言う感じで……………
?? のわああああああああッ！？』

少女は語気荒く続けたかと思うと、突然、鼓膜を破らんばかりの
驚愕の叫びを上げた。

「ど、どうしたんだ？」

キーンという耳鳴りの音を抑えて尋ねてみる。

『いかん、テレフォンカードの度数がみるみる減ってるでござる！
？ うなぎ下りだ！』

「う、うなぎ??」

『と、とにかく国際空港にある噴水の側で待っているから、早く迎えに来てくれ。以上、通信終わり』

ツー、ツー、ツー……。

電話の音が、虚しく俺の鼓膜を打つ。

虚しく？

いや違う。これから何かが起きるような、そんな合図のような運命の鐘にも似た音で鼓膜を叩く。

まるで夏の夕立のような集中豪雨の如く言葉の前に、俺は一言も言い返すことができなかった。

それはあの小学生の時の、なつかしいやり取りを俺に呼び覚ました。

受話器を元に戻す。

電話をかけてきた少女の正体はだいたい見当がついている。

あの若武者口調。激しい性格。妄想癖の思考回路。意味不明のスラング。

「はは……嘘だろ……」

思わず口元を押さえる。

期待と困惑。喜びと不安。それらが嵐のように胸に去来する。

たった一つわかったことがある。

今をもって穏やかな日常が遠のくという変な確信がある……！

第二章 乙女ザムライ参上！

国際空港

噴水ロビー

あやさきしおん
綾崎紫苑

私の名前は綾崎紫苑だ。気軽に紫苑ちゃんと呼んでくれ。でも紫苑と呼び捨てにできるのは陸と私の血縁者だけだ。そのあたり、気をつけてくれ。

私は恋愛の初期段階である中学校時代を無念にもアメリカで過ごした。

だが、私は転んでもただでは起きない。

私は私を転ばした相手を一緒に引きずり倒してすぐさまマウントポジションを取るくらいのことはする性格だと自負している。

ばっちりとアメリカでできた友とラヴの勉強をこれでもかー、つてなくらいで、ごつつあんですと言っ具合に修業してきた！

「フフフ……抜かりはないぞ」

サングラスを右の人差し指で押し上げて、自信気に笑う。

ちなみにサングラスをしているのは、ずばり格好つけているからだ。私は形から入るタイプだから、何だか企んでる感じがしてイイ感じだと思うからだ。

むしろ、抜かりがあつたのは私の家庭の事情だ。

恋愛の本場である高校時代に意気揚々と帰国する予定だったが、敬愛するお爺様との間に問題が生じてしまった。

「納得できるものか……」

胸中から湧き上がってきた苛立ちを、唇を噛み締めることで抑えつける。

バックの中に収納されたウサぴょんこと、ウサギのぬいぐるみに拳を叩きこみたい気分でござる。

（気分を落ち着けるには……）

陸の成長をリアルタイムで記録してある写真集（小型携帯バージヨン）を、胸の内ポケットから取り出す。

バリエーションは制服、私服、寝巻き、体操服など豊富な上に、陸の様々な嗜好から、交友関係まで網羅した完璧な陸攻略本！

陸の写真集を早速開き、光速で悶絶する！

せ、世界はバラ色に包まれているッ！

「なんと凛々しいのだ、陸は！」

思わず感激と興奮が口から衝いて出てくる。

さらりと女性のように艶やかな黒髪。切れ長の二重瞼。凛々しく整った鼻梁に、男の色気に誘われてつい重ねてみたくなる唇。引き締まった顎のライン！

どちらかといえば、中性的な感じが漂う美人——それが天堂陸だ！

もう、何ていうか悶絶プリティイ百年殺しだ！

「む、胸キュンだ！ 最高でござる！」

思わず流れた《よだれ》という名のラヴのほとばしりを、右手の甲の部分で拭う。乙女たるものいつでも身だしなみは大切だ。

だが、陸の二枚目な容貌だけに私は惚れたわけではないぞ。

惚れた大きな理由は、陸の真面目で優しい性格だ。ひたむきで真摯な態度も私の心に好感触だ。

電車でご老人に席を譲ったり、困った人をほおって置けなかったり、陸は様々な善行をしている。

クラスでは友人も多いし、学校の成績も校内十位に入るほどの優秀さだ。クラス委員も務めているんだぞ！

ちなみに、身長172？。体重60kg。血液型・O型だ。

なにせ綾崎グループの技術の粋を集結して造られたものだから、その内容の満足度は万歳無敵天下統一だ！

そう、ラブのためならここまでやる。その根性こそがアメリカで磨いてきたもの。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラブ魂》！

愛しい者を想う時間こそが、乙女のラブを育てるのだ。

そして、私は陸を想い続けてきた。この想い、そんじょそこの乙女には負けぬと断言できる！

握力60超えの右手をぐつと握り締める！

（そう、私は満身の力をこめて今まさに殴りつけんとする握り拳だ！）

この暑い夏に負けぬ熱さで、私は陸を口説く！ 陥落させる！

完全服従だ！ 調教レベルマックスのCG率100%だ！

もう何て言うかメロメロだッ！ 容赦無用の必殺必中の無理矢理だ！

必ず私を好きだと言わせてみせる！

でないと……私は……綾崎家の運命——お爺様との約束を守らなくてはいけなくなる。

（何としても陸に……ッ！）

瞳をラヴ色に燃焼させる。私の小宇宙は今、無限の高まりを見せている。小宇宙が燃え上がる時、不可能は可能になるのだ。

かの英雄も言ったではないか。

「世の恋愛に不可能と制限はない、と！」

カッと瞳を見開き、私は未来を視る！ 薔薇色と虹色に輝く絶対無敵の未来を！

私を抱きしめて口付けをして熱烈な言葉で私を口説く陸を妄想をしながら、私はラブ必勝の決意を心に刻み込めた。

「マジやばいな……」

期待が現実になり打ちのめされた時、人はこんな絶望を吐きだすのだろう。

少年の幻想が打ち壊された時、少年は大人へとなるのだろうか。

ならば、俺は大人になどなりたくなかった。

後悔に瞳を閉じ、少し前の自分を止めたくなる。

ようやく空港に着いた俺は噴水がある場所を空港の係員に尋ねた。それから噴水のある空港ロビーへと向かい、目的の少女を探して周りを見渡す。

まず、視界に入ったのは、見事な意匠をこらした噴水だった。見ていると、なんとなく涼しげな感覚に捕らえられる。

「……と……やばっ、早く探さないと……」

我に返ると、周辺を見渡す。

あたりには人を待っている人たちがたくさんいた。ビジネスマン、女子大生、子連れの母親、カップルなどなど。

これだけの人の中から電話の相手を探すとなると、少し面倒なことになりそうだった。

「これじゃあ、見つからないかもしれない……」
ため息をつく。

ここで電話の相手を見つけるのは不可能に近い。空港のアナウンスなどを使ったほうがいいかもしれない。

と——アナウンスの音が右の方から聞こえて、何気無く右の方を見た。

世界が切り取られたように停止したかのように錯覚した。

鼓動が高鳴る。血潮が震えた——そこには……そこには俺と同年代くらいの少女がいた。

サンングラスで目元が隠れているが、整った鼻筋や形の良い唇からかなりの美少女と推測できる。

少しシャギーのはいつたショートカットの髪。

テレビや雑誌などでも、滅多に見ることができない美しい少女がそこにいた。

薄いピンクのミニのシャツの裾は短く、そのせいで白いお腹が見えているのが眩しい。

豊かにシャツを盛り上げる胸の辺りにはLOVE & CRAZYのロゴ。大胆に白い太股を露出させて膝上でワイルドにカットされたジーンズ。

カジュアルなスタイルでボーイッシュな雰囲気なんだけど、それとは逆にスタイルはかなり……そのなんだ……思わず目がいつてしまふ胸の膨らみといい、くびれた腰といい均整のとれた女性らしい体つきをしている。

思わずその少女に見惚れてしまっただろう。

そう、だろう、だ。

少女が普通に佇んでいるなら、俺は見惚れていたかもしれない。

本当に鼓動が高鳴る。血潮が震えた——ドン引きで。

「マジやばいな……」

少女はその可憐の容姿にまるで似合わないオーラを周辺に醸し出していた。

短的に言おう。

少女は、身悶えしていた。

少女は完全に妄想世界に——あたかも初めて覚醒剤を使用した麻薬患者のようにのめり込んでいた！

口の端に少し涎をたらして虚空を見上げながら薄ら笑いをしているかと思えば、突然、恍惚とした表情で自分の体をか抱くようにして身悶える。

少女の体からはドスピングのオーラが陽炎のように噴出していた。そのせいで、少女の容姿の良さに惹かれた男性たちも、その異様なオーラに「うおおおっ!？」みたいな感じで躊躇して、ナンパと言う行為に移せないようだった。

(今なら逃げれるッ)

俺の中の危険回避を司る神経が全力で警鐘を鳴らしていた。それなのに。

そんな気持ちとは裏腹に、不思議と体は少女の方に動いていた。

まるで闇の中に浮かぶ光源を求めるように。

まるで懐かしさに引き寄せられるように。

まるで——この時をずっと待ち望んでいたかのように。

破滅するとわかっていても踏み出してしまう……この感情はなんて説明していいのかわからない。

戦いの前に恋人や家族のこと話す一兵士の気分だ。それ死亡フラグとわかっているのに口にしてしまう。

（だって口にしないと、セリフなしの一兵士として終わってしまうじゃないか！）

そんなわけのわからないことを考えてしまう。

あるいは蛇に唆されて禁断の果実を口にしたアダムとイブはこんな気持ちだったのだろうか？

と、不躰な俺の視線と接近に気が付いたのか、少女が不意に俺の方を物凄い勢いで振り向く。

それはさながら獲物を見つけた肉食獣の如く。

「！？」

失敗の二文字が頭を通り過ぎ、続けて手遅れの文字が赤点滅する。予想が確信に変わった際の衝撃を受け、少女を凝視する。

その少女は俺がよく知っていた幼馴染みに、やはりよく似ていたから……

しかも、俺の目と耳の錯覚かもしれないが、一瞬……少女の口元が、「りく」と俺の名を呟いた気がした。

俺の顔を見ると、少女は喜色と安堵を顔に浮かべる。

その笑顔に既視感を感じた。景色とかで体験したことがあったが、人を感じるのは初めてだった。

「紫、苑……？」

少女を見て呟く。

その声は空港の喧騒の中ではあまりにも小さく、情けないくらいに掠れていた。とても少女の元まで届いたとはとても思えない。

情けないことに彼女を目の前にして、採るべき行動を探しあぐねていた。

行動は少女が先だった。

「陸！」

俺を呼ぶ凜とした声。

いつもそうだった。

迷い惑って立ち止まっている俺と違い、彼女は迷わないしブレない。いつだって真っ直ぐ前を見て走り出すんだ。

一直線に走るその背中が眩しかった。だからいつもその背中を見失いように追いかけていた。

まるで翼が生えているみたいに軽やかに、その可愛い容姿と相まって彼女は天使のようだった。

「もう我慢できないッ！」

そう天使のよう《だった》んだ。

どこぞのモーニングのコーンフレークのゴリラの如く。

発情期のゴリラって危険じゃないの？ そんな疑問がぼんやりと浮かんだ瞬間だった。

「陸！ 陸陸陸——ッ！ 好きだ、ラヴだ、抱き締めたい！」

さあしよう！ すぐにやろう！」

その疑問はすぐにわかれると思った。嫌になるくらい。

（ああ、なのに……！）

危険ってわかっているのに！

俺という生き物は——自分の名前をあの頃と同じ温かさで呼ばれ、懐かしさと嬉しさで心臓が一際大きく刻むのを感じてしまった。

だから逃げ出せなかった。

少女は——紫苑は荷物の薄紫のボストンバックを空港の床に置いたまま、俺だけを一直線に視界に捕らえ、駆け出して来て、そして——その一瞬の郷愁と愛しさと懐かしさが致命的であった。「ごふッ！？」

気が付いた時には紫苑に押し倒されていた。

呆然としていたせいで彼女の勢いを耐えることができずに——いや身構えていたとしても屈強なラグビー選手数人がかりでも止められたかどうか。猛牛ですら押し倒す勢いのタックルだ。プロラグビーの選手にスカウト間違いないしの強烈さは、胃の中の食パンが喉の奥まで出てきたのが物語っている。

ラグビー選手でもない俺が猛牛と化した紫苑を止められるわけもなく、紫苑を抱いたまま空港の床に背中から押し倒される。

「いてて……うッ!?」

現金なもので、痛みは未体験の感触に忘れてしまう。

隙間なく抱きつかれて、その時初めて俺は女の子の身体とは凄く華奢で柔らかいんだなと驚いた。

ひどく軽くて、乱暴に扱ったら壊れてしまうような脆さが手のひらを通じてぬくもりと共に伝わってくる。それと同時に凄く心地の良い感覚と強い存在感が、呆然とする俺の身体にダイレクトに伝わってきた。

「……し、紫苑なんだよな？」

恐る恐ると言う感じで、胸の辺りに頬をぐりぐりと頬ずりし続けている女の子に尋ねる。

「うむ！ 帰って来た紫苑ちゃんだ。……久しいな陸」

顔を上げてサングラスを外すと、鮮烈な双眸と出会う。

ああ、そこには紫苑がいた！

小学生の時に別れ、美しく成長した幼馴染が……洗練され美しさを増した容貌。でも確かに子供の頃の面影を見つけて胸が熱くなる。生き生きと活力に満ちた黒瞳は、至近距離で見れば吸い込まれてしまうほどの輝きを放っている。

花の綻びを思わす可憐な微笑みを紫苑は俺に向け、

「乙女ザムライ参上だ！」

そう言っ て俺に笑いかけた。

第三章 動き始めた乙女の夏

《天堂陸》

胸の中の紫苑の存在が信じられなかった。

まるで真夏の大気が生み出した陽炎のように存在は鮮明なのに、掴むことのできない不確かさ……そんな感覚を目の前の少女に感じていた。

実を言うと紫苑に会って、喜びよりも戸惑いの方を多く覚えていた。

普通は喜ぶだろう。なにせ幼馴染みがアメリカから帰国したのだ。それも自分を——俺を覚えていてくれた。

そのことに對する嬉しさ。それは空港で紫苑を見た瞬間感じた胸一杯に広がる歡喜。

それが裏付けている。

けど、歡喜が過ぎた後に來たのは戸惑いだ。

戸惑いを覚えた理由は紫苑の《今》にある。

朝見たCMが頭を掠める。

そう——紫苑の祖父。

つまり祖父の綾崎秀士は世界的に有名な巨大複合企業経営者の社長だ。色々な事業に幅広く手をつけている相当な資産家——いやそんな一資産家という小さい枠に彼をくくることはできない。

綾崎財閥の総帥である綾崎秀士。紫苑はその孫娘だ。

俺と紫苑は今こんなものにも近いのに、突如見えない巨大な壁が立ちはだかった気がした。

『見上げるような世界』

確かに昔の紫苑の家は俺の家に比べてかなり大きな家だった。俺の家の数倍は軽くあったと思う。屋敷というような豪邸に公園かと思ふうばかりの広い庭があった。

けど、昔はそんなことはどうでもいいことだった。
富豪と庶民の世界の違いなんて全く気にならなかった。

『今、目の前にある巨大な現実』

けれど、今はもう理解してしまった。

事業拡大のせいで生じたアメリカへの引越し。それによる紫苑との別れ。流れていく五年という年月。

紫苑と離れていた五年間の歳月が俺に理解させてしまっていた。

その歳月は分別のない少年を、世の中のことを諦念混じりの理解ができるような青年へと変えていた。

社会に生きていく上で縛られる『常識』と言う名の鎖。年を重ねるにつれて、隠す事を余儀なくされる感情。廃れていく情熱に、蓄積していく虚無。

『知らなかったことを気が付くのは、必ずしも良いと言えない事実』

そして、紫苑と自分との違い。
それはテレビのCMや新聞などで、克明に慈悲なく圧倒的な脱力感を持って俺に伝えてくる。

（『住む世界が違うんじゃないか？』）

叶わぬ夢ほど嫌なものはない。
憧れるだけ憧れ続け、届かず、掴めない夢。求めて膨らんだこの憧憬は一体どうすればいいんだ？

目の前にいる少女は、本当はこんなところにいるはずのない存在だ。

非日常の顕在。それが戸惑いの理由だった。

そんな事を考えながら、俺は五年振りに会う幼馴染みを見上げる。
長い髪は活動的な印象のショートカットになっていた。

（髪、切ったんだな……）

その一言を胸の中で飲み込む。

そんなことはCMを見ていればわかっていたことだ。

紫苑がその長い髪を切った時期だって本当は覚えている。

でも俺はこの時、何を言えればいいかわからなかった。

胸が高鳴る。感動に震えに震えるのは身体なのか心なのかわからない。

この切ないような苦しいような、それでいて暖かいこの気持ちは

「陸、これは肯定の合図と受け取ってよいのか？　つまり寝室のハート型の枕でイエスの選択ということだな？　ふっ、そうと決まればムラムラがもう我慢できんでござる。ほらあそこのトイレでいい。

行くぞ！ さあ行くぞすぐ行くぞ今行くぞ！ 色々な意味でイクぞ！」

—— あ、絶望ですね。（乾いた笑み）

五年振りに再会した幼馴染みは、いい感じに振り切れていた。もう常識とかそういうゲージが。

たぶん存在しないんじゃないかな、そういう単語が。

乙女として守らなければいけない絶対境界線の遥か向こうで魔王笑っていた。

勘弁してくれよ、もう！

「い、一体何をする気なんだよ！」

「何って、それは陸、ナニに決まっているだろう？」

声を荒らげる俺に、にやりと笑う様は下手に容貌が可憐な分、その威力が凄まじい。

（親父ネタかよ！？）

戦慄する。マジで戦慄する。

その可憐な容貌で、その返しはして欲しくなかった！ 思春期の少年の憧憬がハイエナに骨まで貪られていくかのようだ！ 痛い、痛いよ！ 数瞬前までのときめきを俺に返してくれッッ！

紫苑、お前がいりましたことは、国民的アイドルの主要メンバーが鼻くそをほじったに等しい行為だとわかっていいるのか！？

というか紫苑のともでもな問いかけでようやく自分達がどういいう体勢にあったか、嫌なくらい気がつかされる！

白昼堂々空港の床の上に仰向けで、紫苑に押し倒されている。

慌てて視線を走らせて見ると、通行人の多くがこちらに好奇の視線を投げかけている。

「うわっ！？ ちょ、ちょっと！ 取りあえず立とう！ 離してくれ！」

紫苑を離し、急いで起き上がるうと……

「否ッ！ 断じて否ッッ！」

思わぬ返しにたじろぎつつも、突っ込みで応戦する俺だったが、
「気にするな。そんなことよりも……ふふふ、嫌よ嫌よも好きのうちでござる」

「一言で切って捨てられた上に、どこの悪代官だよ!？」

ハマリすぎる紫苑の口調と表情に思わず突っ込む。

「だが、まあ安心しろ、陸」

すると紫苑は慈母のような優しい微笑を見せる。そんな顔で笑えばメディアが清纯派美少女という単語を使うのも納得できるから――

――怖い。

「優しくするから大丈夫だ、フククツクツ、フヒヒツグフフフ
フフフフ！」

「ごめん、最後の笑い声で台無しだから！ 黒い本音だ漏れです
から！」

「ぬっ」

慌てて口元を隠す紫苑。けど遅いから。致命的に遅いから。人身
事故起こした後に無免許だったというくらいに致命的ですから。

「まあ、流石に冗談だ」

「あ、ああ。そうだよな……」

あっさり紫苑は俺を拘束から解放放ち、その態度に勝手だと自覚
しているんだけど……失望を覚えてしまう。

（何を自惚れているんだ、俺は？ さっきの紫苑の言葉は冗談に決
まってるじゃないか……）

知らずうちに紫苑の存在に浮かれていた俺は内心で恥じる。

（俺ってやつは……つくづく単純なんだな）

「私もこんな人の多いところでラヴに持ち込む気は毛頭ない。露出
狂ではないからな」

だが、紫苑の発した次の言葉で俺は硬直する。

「ええッ!？」

驚愕の呻きを上げ、落としていた視線を紫苑に戻す。

「じゃ、じゃあ……人気のないところだったら……どうするんだ？」

恐る恐る探るような目つきで尋ねる俺に、紫苑は惹きこまれるような凄絶な艶笑を浮かべた。

「無論、知れたこと」

それはさながら契約を交わした人間の魂を手にした悪魔の如く。麻雀で言うならロンを宣言する寸前の人間の超ドヤ顔に近いかもしれない？

清純な顔つきがどう転べば、このような恐ろしい笑みになるんだろうか！？

美女と野獣の題名が違ふとこの瞬間わかった。

美女と野獣じゃないんだ。何で気がつかなかったんだ、俺は！

（美女は野獣だッ！）

知りたくなかった真理を悟ってしまい、哲学的電流に身を震わせる。

だが、俺の震えなど紫苑は待つてはくれない。

形のいい唇が、毒電波を高速シャウトする。

「18禁の激甘ラブ ピーチ萌え的美少女ゲームのようなラブに持ち込むに決まっておろうが！

わかりやすく言えば、少年誌ではできないが、青年誌では容赦無用にできることだ！」

「か、勘弁してくれ！？ 最近のトレンドイはR15ですよ！？
って言うか……冗談……だよな？ だよね？」

さすがのように俺は紫苑へと問いかける。

頼むよ。結構ギリギリなんですよ。これ少年誌ならトウ・ブルの如く色々見せすぎて少年誌追放デビューですよ！？

そんな俺に紫苑はきりりとした視線を向けて言い放った。それはもう容赦無用に。

「武士に二言はない！ で、ござる」

その真剣の如く切れ味に満ちた鋭い視線！ マジだ！ 彼女は本気と書いてマジだ！

どこぞの魔球を投げる寸前のピッチャーのようにドス桃色の炎が双眸に燃えているよ。

（このままだと俺は恋の三振打者だ。球場ではブーイング、控えてベンチを温め続け、契約打ち切られる寸前の公園的サラリーマンじゃないか！ とにかく話題を変えないと！）

本能がよこした明確な危険信号。

背筋を絶叫上げて駈け抜けた悪寒に一もなく二もなく飛びついた。「そうだ！ 紫苑お腹減ってないか！？ ほら飛行機に何時間も乗ってたんだろ？ お腹減ってるんじゃないか？」

目を覆いたくなるような不自然な話題のふりかたに引き攣った笑顔を出してしまう。

もうちよつと、まともなことは言えないんだろうか、俺は？

もう相手の術中にハマって、何を切るかわからずに出してしまつた牌が、

「そうだな。腹が減っては戦^{ラサ}ができぬ、と言つしな。ここはたらふく食って力を蓄えるか」

紫苑の上がり牌という……レートが巨額なら「ロンロンロンロオオオオオン！」と脳内分泌が大量に流れるが如くだ。いや、これハネ満跳んで四倍満で役満？ 裏ドラ乗っちゃってます？

お金払えないので採血ですか？

（ぼ、墓穴！？）

それは精神的なものだったけど、まるで身体中がバネのようにたわみねじ曲がつて、深い奈落に落ちて行ったような気がした。

まさに自分で掘った落とし穴に落ちた気分だ。切ないも度を越すと、その……犯罪ですよ？

曲がり角の自動販売機でジュースを買って飲んで、戻ったら原付に駐禁で罰金とか、それ酷いよ！ 惨いよ！ 切ないよッ！

この時代、世紀末救世主を望んでいるよ！

誰か取り締まってください。この世の中の切なさを。罰金は仕方ないですけど、せめて良い行いをしたならポイント還元してくれよ！

七十歳から年金支給の引き上げとか……それマジ犯罪ですよ？

なんてどうでもいいことを考えてしまいうくらいに、要は混乱していたわけで……俺、どうなるんだろう？

取りあえず……周囲の目が……もう本当に痛いんで……お願い助けてください。

第四章 ラヴこっあんです 作戦

《天堂陸》

売られる子牛的感觉で気がつけば、空港にあるとあるレストランに入店させられていた。

あのままさらしものになるのは耐えられないところであつたから、どこか店に入るのは悪い選択肢ではないように思えた。

だがそれは甘い認識だと思い知らされた。

レストランと言う限定された空間であるからこそ、紫苑の容貌は群を抜いて目立っていた。

ウェイトレスやウェイター。食事待ちの人や、中には食べかけの手を止めて、紫苑に見入っている人もいる。

視線を外せないぐらい美しい容貌。それはサングラスをかけていてもわかるのだろう。

ふとそこにいる利用客の思いが届いたのか、紫苑の顔からサングラスが外される。

誰かが息を飲む音が聞こえたような気がした。

巨大な美を目の前にした時に巻き起こる現象。静かな感動混じり

の吐息があちらこちらで上がる。

ただそこにいるだけで人を惹きつけてしまうカリスマが紫苑にはある。

今、レストランにいる人のほとんどが、紫苑に注目していた。

目立つことが嫌いな俺としては、あまり居心地が良くない。事情が許してくれるなら、今すぐにでも背中にも羽を生やしてここから飛び出したい気分だ。

やがて、一人のウェ이터が注文をとりやって来た。

「い、いらっしやいませ、ご注文はなんにいたしますか？」

見るからに緊張しているが、その視線は吸い込まれるように紫苑だけに注視されている。

「……俺はエビピラフを」

「へ？ あ、はい」

そこで初めてウェ이터は俺の存在に気がついたようだ。

おおかた紫苑しか目に入ってなかったんだろう。

（まあ、別にいいけど……）

独白しつつも、おまけのように扱われては怒るほどではないけど、正直へこむ。

「え、えっと。その、お連れの方は？」

紫苑に見惚れてしまうのをなんとか断ち切るように、ウェ이터は対応を続けようとする。

けれど、その声は哀れなくらいに上ずっていた。

しかし、紫苑はそんなウェ이터を筆頭に周囲の注目にまるで頓着しない。

「私はステーキセット。焼き加減はウェルダンで。料金割り増しでもいいから500gにオーダーカット頼めないか？ あとつけあわせにフルーツサラダ。無論、ライスは大盛りだ！」

レストラン中に響くかと思われる紫苑のハラペコ宣言に俺を始めとした周囲の利用客はテーブルに突っ伏す。

「し、紫苑！？」

悲鳴にも似た声を上げる。周囲のざわめきが嫌なくらい押し寄せてきたのを感じる。勘弁してくれ！

今の紫苑の発言は、皆の抱く幻想という名の固定概念を右手で打ち砕くこと120%だ。

というか、ヒロインが堂々と肉って。しかもとどめにご飯大盛りって……

「ふ、陸。私の前世はたぶんティラノサウルスだ。そして陸の前世は草食系の動物だ」

「……………」

それは何だ……俺がお前に食べられる運命だと間接的に伝えたいのか？

しかし、言い返せない俺は目をそつと伏せて紫苑のギラギラした双眸から目を反らす。

見ちゃダメだ。見たら勝負始まる以前に決まってしまう確信がある。

ウェイターが「な、なんとかします」と答えてその場を下がったのを見送ってから、気になっていた話題を振ることにする。

決して、紫苑の視線の圧力に負けたわけではない。

「あ、そう言えば紫苑発音が凄いな」

会話の時に英単語が出てきたとき、紫苑の英語の発音が日本人が口にするような和製英語ではなく、さすが帰国子女というのは伊達ではないと思うくらいに本場っぽいのだ。

「まあ、五年もいれば英語など自然と身につくものだ」

特に自慢するわけでもなく紫苑はさらりと凄いことを言う。

実際、紫苑にとって英語を話すことはそれこそ日常のことで自慢するようなことじゃないんだろう。

「そんなもんかな。中学、高校で英語を五年勉強しているけど、簡単な単語や文法なら何とか聞き取れるくらいで、とてもじゃないけどしゃべれないな」

事実、日本の学校の英語を受けていて英語がしゃべれるような生

徒などほとんどいない。

四年近く英語を習っていないながら、しゃべれないなんて……俺たちは本当に《英語》を習っているのだろうかと初めて疑問に思った。

「ふむ……」

俺の言葉を吟味するように聞いていた紫苑は、ポンと手を叩く。

「外国人の恋人が出来たと思って勉強すればみるみる上達するぞ……まあそんなことは私が許さないけど、なッ」

うまいことを思いついたという楽しげな口調で話していた紫苑は、最後の方で一転——ガラリと瞳を光らせ、語尾の「なッ」ってところを強いアクセントで言った。

それは紛れもない警告……脅しだ。

素早く視線を明後日の方に反らし、お冷を口にする。

結構かなり本気で料理がくるのを待ち望む俺だった……。

暫くして、頼んだ料理——あれはなんだ？

その肉は分厚かった。大きく、重く、ステーキというにはあまりにも大きすぎた。

それはまさに肉塊だった。

鉄板の上で湯気を立て、暴力そのもののように鎮座している様子はキングオブキング。

その肉を切るといふよりは削るように引きちぎると、一口で頬張る。

ムシャムシャならまだ可愛げがなくもない。

だが、年頃の乙女がガツガツという擬音で肉を食るのはどうだろう、と。

以前、テレビで見たマニヤンガ自然保護区の肉食獣が草食動物に襲いかかる情景がなぜか思い浮かぶ。

気にとれるくらいの剛毅な紫苑の食べっぷり。

これではどちらが男かわからない。少なくとも食べる擬音では、俺は女の子のようなものだ。

その可憐な口に似合わない豪快さとスピードでランチを食い漁る

様子は、少年が美少女に抱く幻想を木端微塵に打ち砕く率、実に120%だ。

幻想に抱かれて溺死する気分はこんな感じなのだろうか？

「ぬおッ!？」

唐突に紫苑は奇声を発して、食べる手を止める。

その表情は大切な何かによろしく気がついたような、後悔と自分への憤りに近い表情を刻んでいる。

「どうしたんだ？ 詰まったのか？」

一体どうしたんだろう？

尋常ではない紫苑の態度に俺は首を傾げる。

「重要なラヴテクニクを忘れていたでござる」

ラブ……テクニク？

ダメな予感がした。それはもう凄まじいまでに。

つうーと。

一筋の冷や汗を頬に垂らした俺に、紫苑は続ける。

「あーん、と食べ物を楽しめる者に食させることによって好意度を上げ、恋人の座をゲットでござる！」

紫苑はすでに残り三分の一になったウェルダンのステーキの残り全てを、「ぬん！」一言フオークで突き刺すと、肉の欠片と言うより、肉の塊を俺の目の前に向けて堂々と言った。

「あーん」

その光景はひどくときめかなかった。

おそらく、俺の心臓の活動状態を心電図で見れば、まったく平静通りだっただろう。

いや、もしかすると上昇するどころか、下降していたかもしれない。

だって、肉汁滴るこの光景はとて……ときめかない。

まだ見ぬ未来に向って脱出したいという渴望をひどく感じた夏の

昼であつた……。

第五章 乙女ザムライ ラヴ演技

《綾崎紫苑》

『あーんラヴごっあんです 作戦』も無事に終わり、意気揚々と私は伝票を持って、レジに移動する。

「し、紫苑、俺が払うよ！」

私の行動に陸は慌てて財布を右のポケットから出そうとするが、右手の手のひらを広げることで陸の行為を制止する。

「男に恥をかかせるな」

ニヤリと笑ってみせる。

「紫苑は女の子だろ!？」

「む……男女差別か？」

素早く切り返す。

「さ、差別ってわけじゃないけど……そのやっぱり、何て言うか……」

言いよどむ陸に、天使を彷彿とさせる笑みを意識的に浮かべる。

「気にしないでいいぞ? この紫苑ちゃんにランチを奢られたこと

を一生胸に刻みつけてくれれば、全然構わないぞ。むしろこちらの狙い通りだ。こうして陸に恩を売り、逃げ道を一つ一つ丁寧かつ偏執的に塞いで私の虜にする作戦の一部だからな。全然気にしないでくれ」

「！？」

陸はなぜか顔を蒼白にした。

突然、氷河期に閉じ込められた恐竜のように、激しく体を震わせる。

まるで重大な禁忌を知らずうちに犯してしまった罪人のような悲痛な表情だ。どうしたというのだろうか？

「絶対、払う！」

「駄目だ、認めぬ！」

駆け寄る陸に、刃の鋭さで陸の主張を切り捨てる。

棒立ちになる陸。その隙を逃さずレジへと猛ダッシュする。素早く福沢諭吉殿を一枚、高速でカウンターに叩きつける。

「娘ッ、釣りはいらぬ！」

「あ、ありがとうございます！？」

私の剣幕にレジの娘は震えつつ、料金を受け取る。

「で、ですが、お釣りを……」

「ならばその本当にその元に届くかどうかともわからない募金箱にでも入れるがいい！」

「ま、待ってくれ、俺の分は……！」

呆然とした状態から陸は慌てて財布を取り出しつつレジに近づくが、獲物を狙うムササビの如く手首のスナップを使って、陸の口を後ろから塞ぐ。

「ふむうツツツ！？」

突然の拘束に驚愕の声を上げる陸。

陸の唇の感触は手のひらを通して、私の胸をせつなくムラムラと焦がす。

陸の吐息が私の手のひらをくすぐるのは答えようのない快感だ。

はあはあ、たまらんツ！

私は特にサドというわけではないのだが、こ、こころ、これ私の足の指をな、なな舐めさせたらどうなってしまうのでござろうか！
(むはああああッッッ！)

まずいますい！ 愛しい者に強制する背徳感と征服欲のせめぎ合いが、私の乙女中枢経路にスパークを生み出す。

(取り合えず、あとで手のひらに口づけよう。否、舐めまわそう) そう決意する。

それにしても、ああ、なんと素晴らしい唇なのだ。

いつかこの唇を私だけのものにしてやる。私のもので万歳だ。何と最高なんだ。神様の贈り物に違いないな、うん。

ラヴで緩みきった笑いを口に象りながら、陸を羽交い絞めして、空港のレストランを後にした。

「けどさ、紫苑。これからどうするんだ？」

場所は変わって空港から駅へと向かう改札口周辺。あたりは相変わらずの人込みの密集地帯だ。

「……とりあえず家に行くつもりだが？」

平常心を装って答えながらも、陸の言っている意味は分かっていた。

おそらく、今日どこで宿泊するか聞いているのだろう。

なにせ、以前私の住んでいた家は現在取り壊されて駐車場になっているらしい。

(さて……これからが一勝負というわけだな……)

計画は単純にして絶大。強大にして無比。最強にして完璧。

計画の内容はマル才風に言えば、ズバリ陸の家に転がり込み、こ

の夏の間に陸の心を射止める事にある！

（既成事実さえつくれば、お爺様も納得させる事ができるに違いない！）

つまり、そう言う事だ。

そのためには、駐車場になっっていることは知らなかったということにして、陸の家に厄介になりラブチャンスを掴まなければ……！
「何がって……その……紫苑の家、引越してから駐車場になってるんだぞ？ ……一体どうするんだ？」

「な、何いいいッ！？ 私は家なき子の少女になってしまったって事がッ！？」

証拠がでそろって、にっちもさっちもいかない犯人のような切羽詰まった声で、私は狼狽する。紫苑ちゃん迫真の演技だ！

それは周りの人々が何事かこちらを注目していることから明白だ。

「そういう事になるけど……」

「ああーッ、何てことだ！ 紫苑ちゃんアルマゲトン的大ピンチッ！ 赤信号で飛び出してしまった気分だ！ お子様にも分かりやすく言うならば、ウルトラマンの必殺技のスペシウム光線が怪獣にきかず『これでは地球の平和が……』ってな感じの地球規模級の大ピンチーーンチッ！」

ついでに頭を抱えて、その場で膝を付き、大地に上げられた金魚のように、のたうち回ってみる。第二次成長期の暴走というものだ。七転八倒、かえるぴよこぴよこみぴよこぴよこ！

「分かった！ とにかくこんなところで暴れるんじゃない！」

陸は周辺の視線が気になるのか、落ち着かなく視線をさ迷わせながら、私に注意を送ってくる。

「では……泊めてくれるか？」

ムクリと、起き上がって陸へと尋ねる。

「分かった！ 本気で、分かったから！ 泊めるよ、泊める！ 泊めればいいんだろ！？」

陸の肯定の返事に立ち上がって、私は両手の親指をビシリと立てる。

それを見た陸は半眼で疑わしそうに呟く。

「何か……俺……騙されてないか？」

「気のせいだ。体育たいいくの二つ目の《い》くらいどうでもいい事だ」

「それは確かにどうでもいいが……」

釈然とせずに首を捻る陸。

言質を取った私は強引に陸の手を取って、駅の改札口へと引つ張って行く。

「何かな……気になるんだが……とても気になるんだ……」

「気にするな。少年よ恋心を抱けだ！」

「……大志だつて」

そう訂正つつこみを放たれながらも、私たちは陸の家へと向かった。陸の手を後ろ手で引きながらデスノのライトばりの笑顔で私は笑う。計画通りだ。

時々、私は自分の才能が恐ろしくなるでござる。

そう、愛しきものを攻略するためのテクニク。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ演技》！

愛しいものを手中にするためには、悲しいが……優しい嘘をつかなくてはならないのだっ。

今のところ《陸・陥落大作戦》は完璧無敵でござる。スペインの無敵艦隊だ。

いずれラヴという名の海を、我が艦隊が征服しつくす日も近いだろう。

なっははははは！ 吾輩のラヴに不可能はないッッ！

第六章 乙女ザムライ買い物をする

《天堂陸》

とりあえず紫苑の話聞いてみると、夏休みの間くらいは俺の家で世話になりたいらしい。

それなら、色々日用品などがいるだろうということで、俺たちは地元駅のデパートへと向った。

それが間違いだつたと……言えなくもない。

「買うものが一つある」

紫苑の荷物をデパートの預かりロッカーに預け終わると、彼女が真剣な表情で俺を見る。

端正な容貌の紫苑が真剣な表情をすると、冗談抜きに惹きこまれそうになる。

「重要なものだ。この戦ではなくてはならないもの。これを身に付けているかどうかで、勝敗は決まると言っても過言ではないものだ」拳を握り締め言葉を紡ぐ様は、本気の一字に尽きる。

「一体なんだ？」

緊張して尋ねると、紫苑は重々しい口調で言った。

「勝負下着だ」

二つ確信した。

一つは聞いた俺が馬鹿でした！

もう一つは彼女は恋愛バトルマシーンだということだ。しかも危ない方向にこのマシーンは壊れている。大ピンチだ。お子様は真似しちゃいけない。有害指定だ。助けてくれよッ。俺は逃げた――

グワシッッ！

だがそれは……猛禽の鋭い爪のように掴まれた紫苑の手を振り解かないと無理な話だ。

「陸の協力が必要なのだ。武士に刀がいるように、紫苑ちゃんには勝負下着が必要なのだ。ほら、あれだバカボンのパパにハラマキがなければ、それただのバカだろう？」

否定したかった。ただのパパになるだけだ、と。そんなことはない、と。

けれど鬼すらも斬り捨てそうな紫苑の鬼気の宿った瞳に俺は……

「そ、そうだね……」

ああ、俺を馬鹿にしてくれていい！俺は主体性のない日本人だ。駄目な男さッ！

「その意気や良し！」

ビシリと紫苑は仁王立ちに、右の人差し指を天へと指し示す！

「いざ、女性下着売り場に！」

「お、おー……」

テンション高い紫苑を前に、力なく右拳を振り上げるしかなかった。

ああ、とっても売られていく仔牛の気分……

紫苑は狩人の視線で、色とりどりの多くの下着を鋭く睨みつける。

これだけの下着の量があると、恋愛ヘルマシンの紫苑とも言えずすぐに選ぶのは困難らしい。

一方、俺は他の女性客の視線が物凄く痛い。つか、いたたまれない。

この女性下着売り場にある独特の雰囲気、もの凄い重圧感を覚えていた。

そうさながら獰猛な獣がいる檻の中に閉じこめられた気分だよ。

そして、檻の鍵は紫苑が握っている。

とどめに猛獣の名前は綾崎紫苑だ。

「むっ……陸はどれが好きだ？」

「うえ！？」

思わず呻き声を上げる。勘弁してくれッ。これある意味犯罪じゃないですか！？

まったくもって人が死ねるくらいの衝撃ですよ？

涼しいくらいクーラーがかかっている店の中で、脂汗が額に噴き出すのを感じる。

紫苑は手近にあったピンクの可愛らしきフリル付きパンティと、アダルト満点な黒いランジェリーに、清純なくせして過激な露出の白の紐パンを掴み、眼前に掲げる。

さながら水戸黄門の印籠の如し勢いで。

「う……あ……」

拳銃でも突きつけられたかのように硬直して動けない。

紫苑の持つ下着から視線を床に逸らすと、適当な方向に右の人差し指を向ける。

「あ、あれがいいんじゃないか？」

当面の危機を逃れるための露骨な話題そらし。それくらいしか俺の打つ手はなかったんだッ。

すると、

「……ほう！」

何か感嘆する紫苑の声に、慌てて自分で指差した方向を見て凍り

つく。

そこには、今年の夏の新作の下着が売り出されていた。
目に飛び込んでくるのは《破滅》の二文字。

《これで彼氏のハートをまるごとゲット。セクシーランジェリー最新作！　これで彼もイチ　コロよ♪》

そのランジェリーの形体はズバリハート。

指の第二関節程度の幅のハート型ランジェリー。申し訳程度に胸を覆い、胸谷間、下乳、腹部を大胆に露わにしている。股間の切れ込みは急角度すぎ、おそらく背中はもちろん尻なんかはほとんど丸出しなのではないだろうか？

色はプラチナに水色がかかった光沢のある生地で、ガーダーベルトも同じような生地できているみたいだ。

これを纏った紫苑を想像する。

（や、ヤバイ……ッ！）

鬼に金棒、虎に翼、弁慶に薙刀、そして紫苑にセクシーランジェリーだ！

セクシーランジェリーという神器を身に纏った紫苑は、まさに一騎当千の古強者になるに違いない！

危険だッ！　俺はもっとも渡してはいけない相手に、危険物を渡してしまった！

触れてはいけない運命のスイッチを押してしまった俺は、ただ破壊へと加速。狂加速！

壊れた機械のようにギギギと不協和音を立てながら首を紫苑に向ける。時間が停滞したような感覚が襲い、視界がブラックアウトしたかのように――歪む。

グニ~~~~~！！

そして、紫苑の表情を見た瞬間、絶望で目の前が黒く明滅する。
紫苑の体躯から空間を歪ますオーラが噴出している。

紫苑は本気になった獣の瞳をしていた！ デンジャラスピンクな
エナジーが紫苑の体からプロミネンスのように立ち昇る。

「陸……その言葉の中に漢を見たぞ！」

止めようと伸ばした手は、あぁっ！？ しかし掴めない！

ジェットの加速で紫苑は店員から下着をもぎ取ると、試着室へと
突撃する。

丁寧に磨き上げられた白いフロアに膝をつく。圧倒的な挫折感が
体に押し掛かるのを感じた。

重い……重すぎるよ……なけなしの月給を、飲んだくれのダメな
夫にもっていかれる嫁の気分だ。生きる希望と明日への活力がどこ
も見あたらないよ！

「陸……来てくれぬか？」

抗えない紫苑の声に、生気のない微笑みを唇に刻む。

フラフラと紫苑のいる試着室に近づく俺は、屠殺場に引っ張られ
ていく豚だ。

「し、紫苑……あのさ……」

しかし俺の言葉が終わらぬうちに、勢いよく開く試着室のカーテ
ン。

堂々と、ハート型セクシーランジェリー姿で仁王立ちの、紫苑！
色気など微塵も感じさせないポーズ。けれど、瞳に焼きつくのは、
年のわりにムチムチといいますが、正直これはR15どころか18
禁だろと思うず突っ込みたくなるような……

「は、はふん……」

情けないことに鼻血を溢れさせ、ゆっくりと意識が遠ざかるのを
感じた……

薄れゆく意識の中、最後に思ったことは、下着の宣伝文句は見事
に的中だなということだった。

第七章 《ときめき 恋愛度》を獲得せよ！

綾崎紫苑

《

（どんぶらこ、どんぶらこ……という感じかな？）

電車の心地良い揺れに身を委ねながらそんなことを思う。

人は列車のようだと思う。

列車（人）の車窓（視線）からの景色が、一定のスピードで過ぎ去って行く。

それはまるで……人間の人生のように錯覚してしまう。

敷かれたレール（生き方）の到達点に向かって、列車（人）は走って行く。

いや半ば強制的に走らされているのだ。それは生きていく上で仕方がないことなのかもしれない。

そして、私のレール（生き方）は普通の人よりも厳しく敷かれていた。

だが、そんなことは許容できない。

私の人生は私の——私だけのものだ。

私は好きな所で停車みちくさしたり、時には途中下車したり……フッフ……逆走するのもいいな。

そんなことをしながら、自由に——自分の思い描いた到達点

へと行きたいのだ。

（それが漢と言うものだ。……私は女だがな）

まあなんにせよ……

（これからが始まりということか！）

またもや私を抱きしめ口付けをしつつ、熱烈な言葉で私を口説く陸の妄想をしながら、ラヴ必勝の決意を新たに心に刻み込めた。もう微塵切りにするくらいに。

電車から降りると、駅のホームに漂っていた熱風の歓迎をその身に受ける。身体に叩きつけられる暑さとなんと表現していいかわからないが、この独特の匂い。ああ日本に帰ってきたのだなと思えた。日本も充分に都会なのだが、住んでいるのが日本人だけのせいかどうか柔らかな雰囲気があるように思う。

アメリカは多民族国家の国だ。雑多な雰囲気と雄雄しいまでの世界の広がりを感じられる。

日本はどこか優しい佇まいを感じる。

（やはり日本は良いな）

帰ってきて、やはり自分は日本人なのだと改めて思う。

そして何よりもここには陸がいる。

私にとってはそれが何よりも重要で大切なのだ。

どれくらい大切かと言えば、私が教師ならばテストに絶対出すくらいだ。要チェックと関西弁で叫びながら、無意味にボールペンのノックをプッシュしまくるくらい重要なのだ。

実は……私こと紫苑ちゃんとは半ば家出をしてきたのだ。

理由は祖父であるお爺様に、かなり強引な形でとある男性と婚約させられたからだ。

婚約者の名前はアレックス・バグネットという。

世界でも五本の指に数えられるくらいの資産家の息子だ。こやつと婚約し、結婚するとなると我が綾崎グループの事業は大きな躍進を意味することとなる。

だが、はつきり言って私はアレックスのことは全く興味がない。

アウトオブ眼中だ。

どうでもいい感じた。

そう——まるではずれのアイスの棒くらいどうでもいい。

そんなどうでもいい相手に私は自らの処女を捧げる気は毛頭ないッ！

私が好きな相手にこそ、私は自らを捧げたい。それは陸において他にいないのだ。

だからこそ——右拳を握り締める。

（既成事実を手に入れる！）

そう……織田信長が今川義元の大軍を前にした時、乾坤一擲の奇襲攻撃をしたように紫苑ちゃんは陸との間に既成事実を手にするのだ！

出来れば、今、流行りの出来ちゃった婚なんて望ましい！

私は攻める女だ。今時、待っているだけの女など意味などなし！

乙女として存在価値なし！

押して押して押して押し倒す！ それこそ我が恋愛道！ 倒す、

脱がす、頂くだ！

お爺様に産まれてきた初孫を、水戸黄門の印籠のように見せてやればこの戦は貰ったも同然なのだ。

入念な準備をしてきたといえ、残された時間は少ない。

そう……何としても私は陸に告白されねばならない！

この夏に私は全力を尽くすのみだ！

私は横目で陸を見やる。

問題はどう陸をゲットするかだ。やはり、ここはこの紫苑ちゃんの色気で骨抜きに陥落するのが手っ取り早いだろうか？ というか今すぐ押し倒したらいいんじゃないだろうか？

（む……何だ？）

《陸・陥落大作戦》を思案中だった私は、陸の差し出された右手を見て、困惑に眉を寄せる。

しかし次の瞬間、紫苑ちゃんの明晰な頭脳は解答を弾き出す。フ

フフ、たまに自身の頭脳の冴えに恐ろしくなる今日この頃でござる。
「ワン！」

自信満々の笑みを浮かべながら、陸の右手の掌の上に自分の掌を重ねるように乗せる。

「お手じゃないッ！」

「ち、違うのか!？」

確実だと思っていただけに私の動揺は大きい。なんという不覚だ。

「全然、違う！」

「むう……では何だ？」

陸をジツと見つめて尋ねる。

陸はそんなにこつちを見ないでくれよと呟く。そんなこと言われ
たらもつと見つめたくなる。だって紫苑ちゃんは好きな相手の困っ
た顔を見るのがちよつと好きなのだ。しかしなんて、ういやつなん
だろうか。

「そ、その……」

言葉に詰まり、私から視線を逸らしながら続けようとする陸の姿
は本当に何と言うか………ラヴ？

恥らう陸の表情は草原を懸命な仕草で駆ける子ウサギを彷彿とさ
せる。

私の胸に内蔵された乙女回路が、ぎゅんぎゅんと駆け巡る。それ
はもつぎゅんぎゅんと。ピンク色のラヴが心臓をきゅんきゅんと甘
く締め上げる。

これはもう押し倒してもいいのだろうか？　というか許されるよ
な？

「り、陸がいけぬのだぞう？　そ、そんな表情で、はあはあッ、私
を昂らせよって！」

「な、何か勘違いしてないか!？　や、やめろよ紫苑！　何だよ、
その危ないピンク色に染まりきっているおかしな笑みは!？　やめ
ろ！　手をわきわきと蠢かして、下から火傷しそうな視線で俺を見
ないでくれッ！」

陸はうろたえる。だが、それは私の熱を高めるだけの行為だ。
ああ。襲いかかりたいなあ。

人目のない場所に引きずり込んでちよめちよめしたいでござるなあ。服を縦横無尽に引き裂き、体をまさぐりたいなあ。甘い悲鳴で鳴かせてみたいなあ。

私は溢れてきたよだれを手の甲で拭う。というか、もう辛抱堪らぬ！

「そうじゃないって！ 違うんだって！」
「む？」

今まさに雄々しく大地を蹴り、襲いかからんとしていた私は、きつい陸の叫びに制止を余儀なくされる。チツ、私としたことが襲いかかるタイミングを逃してしまった。

「ようするにだ！ アメリカの長旅や、その……時差ボケとかで疲れているだろ？」

こっちまで恥ずかしくなるくらい顔を赤らめて陸がそう尋ねてくる。

フッフ……相変わらずウブな男だ。そんなお主に私は胸キュンなんだぞ？

「だからバック持ってやるよ」

そう言って陸が、私の肩からバックを取り自分の肩へと担ごうと手を伸ばす。

それを見てボケることにする。人生メリハリが大切だからな。バックに触れるや否や私は叫ぶ。

「む、強盗！」

このボケに陸は一瞬棒立ちになる。

「なんでやねん！？」

それは……まあつつこむのも最もだと思うが。こればかりはやめられない。むふ。

「ここは普通、ありがとうって感じになるシーンだろ!? なんて強盗なんだ!？」

本当は《ときめき 恋愛度》が三ポイントアップしてたりするが、それは陸には内緒だ。

しかし、このまま陸にゴネられるのも面倒なので、話題を変えることにする。

「しかし、吸い込まれそうな青空だな……」

陸のつつこみを軽くスルーして、蒼穹鮮やかな空を見上げ、サングラスの僅かな隙間から飛び込んできた日差し of 眩しさに目を細める。

「え!? まさかのスルー? ま、まあ……そうかな……」

なおもつつこもうとしていた陸は、突然の話題の変化に困惑しながらも答えを返す。

答えを返した陸は、私と同じように空を見上げる。

爽快で鮮烈なこの空気。この夏だけの大気の海が頭上に広がっている。

空は青く、高く、澄んでいる。そして大きかった。青いパノラマは何処までも飛んで行けそうな高揚感を私の胸に爽快と共に運んできてくれる。

「俺、夏は暑くて嫌いだけど……この青い空だけは好きだな」

「ああ。確かにそうだな」

陸の言葉にさも共感を覚えたように頷いてやり、一言とどめをさす。

「地球の終わりを感じさす青さだな」

「ああ、そうだ……って、何でだああああああッ!？」

陸は大きくつつこむと、急に虚しさを覚えたのか、自分の額を押

さえてため息を吐く。

「全くやれやれだな……」

その台詞を私は何となく真似てみる。深い意味はない。

「うむ。やれやれだな。全く先が思いやられる」

私の台詞に陸は口元を引きつらせる。いい感じに暖まってきた。
っ。

「だ、誰のせいだと……お、思っているのかなあ？」

所々言葉を破綻させながら、妙に優しい声で陸が尋ねてくる。

（ニヤリッ）

心の中でほくそえむ。

「おのれええええええ、あやつめえええええ！」

サングラスを取ると、右の拳を握り締めて、仇敵にしてやられたかの如く悔しそうな表情を見せる。

演技はバツチリだ！

「あやつって誰だよ！？ 紫苑のことだろおーッ！」

陸がすかさずつつこんでくる。私は不意にドキリとした。

何か本当に胸がいっぱいになって苦しくなる。

陸が私の名前を大きな声で呼んだ……ただそれだけのことだが、私はこんなにも嬉しくて、だが同時に気恥ずかしいような捉えどころのない想いが溢れて頬を赤く染めた。

「ったく、何だか紫苑のペースに振り回されまくりだよ……」

不意に突風が吹いて目を細める。

そして、細めた目に映る光景。それは――

強烈な夏の日差しを背中に、陸は微笑を漏らしていた。

だが、それは不快な感情を表しているわけでない。

懐かしげな……再会の、おかえりの笑顔だ。

ふわりと陸の手が私の頭におかれる。

「でも……凄く紫苑が帰ってきた気がするよ」

そうふんわりと柔らかく微笑んで、私の頭を優しく撫でてくれたのだ。

全身の血がカーッと頭にかかるのがわかった。心臓がどくどくと脈打つ。

触れられた頭が……髪が甘く痺れて、胸が苦しい。その笑顔は反則すぎるじゃないか！　というか顔が近いッ、近すぎるッ！

（な、なんだなんだなんだ！　この馬鹿ものがッ！）

陸は私のバックを担ぎ直して改札口へと歩き始める。その後姿は、私を惹きつけてやまない。

さっきまで撫でてもらった髪に手を触れ、陸に聞こえないように私は呟く。

「なにが私のペースに振り回されまくりだ……おぬしなど笑顔一つで私を振り回しているじゃないか……」

「紫苑？」

陸が振り返る。

小走りで陸の左側へと移動すると、陸の横顔を見ながら一緒に歩き始める。

きつと、こういうさりげない時間が至福なのだと思いながら……

ああ……熱い夏が始まる。

日本よ、私は帰ってきたぞおおおおッ！

第八章 頼むから俺の話を聞いてください……

天堂陸

《

天堂家

「ぷはっ!」

男らしさ爆裂と言えるくらい粹な仕草で、紫苑は俺が出した麦茶を飲み干す。

「陸、もう一杯欲しいでござる」

「何だよ、ござるって?」

帰国後、何度か聞いたその語尾。

ちようどいい機会なので聞いてみることにする。

「魂の発露だ」

顎に手を添えて意味なく紫苑は笑う。

その仕草に笑みが零れてしまう。

待たせるのもなんなので、すぐに紫苑に麦茶をいれてやることにする。

麦茶をいれてやろうとコップを持ったところで紫苑に話しかけられた。

「陸、頼みがある」

真剣な表情でそう切りだしてくる。

「ん？」

「執事っぽく淹れてくれないか？ あ、なんならメイドさんっぽくでも……」

「執事さんっぽくね、了解！」

危うい要求をみなまで言わず封じる。危ないところだ。というか紫苑の右手がバッグに延びており、見間違いないとしたら……なぜかメイド服っぽい切れ端が見えたのは気のせいにしておきたい。

「ん……」

とはいえ、どのように執事っぽくするかと悩んでいたら、紫苑が立ち上がる。

視線を向けると、任せろとでもいうように大きく頷く紫苑。

（不安だ……）

そしてそれは――

「じょおおおッ！」

両眼を光らせてどこぞの宇宙刑事のような雄叫びを上げ、椅子から飛び立つ紫苑のその姿は、荒鷲の如し。

どこから取り出したのか。その右手には執事服。

「いくぞ萌殺^{みっくさつ}――」

執事服が空を舞う。

「――ぬううりゃああああああッ！」

「うわっ!？」

目にもとまらぬほどの勢いで紫苑の両腕が動く。それはさながら千手観音のようで、背中からいくつもの腕があるように錯覚するほどの凄まじさ。

「見るがいい！ これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴコンセプション》――」

――不安は的中する。

気がつけば、俺は一分の隙もなく執事服を身に纏っていた。
黒を基調とした執事服。

燕尾服の後ろは堅い生地で型崩れがなくピンと整っていて否応なしに背筋が正される。シルクの黒ネクタイ。清潔な白いシャツ。黒いラインの入ったズボンと黒艶が眩しい革靴にまっ白い手袋。

まさにバトラーと呼ぶに相応しい装いだ。

ボケもここまで徹底されたら、大阪生まれの大阪人としてはノルしかない。

「どうぞ、紫苑お嬢様」

バトラー姿で透明なグラスに麦茶を淹れる。はたから見たら遊んでいるしか見えないような失笑もののシーンなのではないだろうか？
「むふ、ごつつあんです」

しかし、紫苑はどこまでもマイペースである。

お嬢様とはほど遠い素敵なワードをのたまう。というか勝った力士がご祝儀受け取るみたいな感じた。

（ほんーと、外見と中身とのギャップが激しいやつだよな……）

けど、それが紫苑の魅力なんだろう。

「陸、そう言えば……ご家族の方はどうしたんだ？ 誰もいないよ
うだが……」

考えにふけっていると、紫苑が話しかけてきた。

「ん？ ああ、母さんは買い物で、海は本屋に行ってる」

出かける前に見た伝言板の内容を思い出して答える。

「まあ、そのうち帰ってくると——」

そう言いかけた直後、

「ただいま」

ほのぼのとした少し間延びした声が玄関のほうから聞こえてきた。とても二児の母親とは思えない若々しい声だ。やがて外見も二十歳半ばくらいの持ち主がリビングに姿を表す。

若づくりというか、極端に童顔なのだ。思えば、俺の容姿は母さんの血を強くひいているように思う。

目の前の童顔女性が、俺の母さんで、名前を天堂てんどう 空音そらねと言つ。
「ただいまの反対はこんばんはー」

さらに母さんに続いてこっちのわけのわからないのが、俺の双子の弟である天堂てんどう 海うみだ。

「おかえり」

帰ってきた母さんと海へと声をかけ、ついではかりに麦茶を淹れてやる。

「うむ。では、《陸・陥落大作戦》を実行するか……」

紫苑は小声で何か不吉なことを呟くとすくつと立ち上がり、リビングの床に正座する。

え〜と、紫苑さん何を……？

当然の如く母さんは「あらあら」と頬に手をあてて困ったような顔で紫苑を注目しているし、海は――

「陸その格好何？ 執事？ バトラー？」

「……」

海の質問を笑顔で取りあえずスルーする。

「陸は普段は真面目だけど、なんか急にボケるよなー。しかもそれギャップ凄すぎていつもスベるからなー。同じ顔してるんだから俺の迷惑も考えてね？」

いやいや、それ海に言われたくない。

いつも奇行に走るのは海のほうだ。

なまじ顔がそっくりなのであんまり奇行に走らないで欲しい……その願いは今まで生きてきて一度も届いたことがない。

だが、今は兄弟間の瑣末なことにこだわっている場合じゃない。

（……何をやる気だ？）

小さな戦慄が背中に流れる。流れるどころか走り始めてる。それはもうウサイン・ボルトくらいのフライング気味ですよ！？

「お久しぶりです、ママ上殿」

「あら〜。え〜とどちら様〜？」

母さんの間延びした声が誰何するや否や！

紫苑の瞳がカツと効果音の聞こえてきそうな勢いで見開き、正座の姿勢から床に頭を下げるという――ジャンピング土下座！そしてとんでもない内容を叫ぶ！

「お義母さん、陸を下さい！」

「ぐはああああああッ！」

内容の凄まじさに思わず、執事服のまま床にずっこける。な、なな何を書いて出すんだ紫苑は！？

「ひゅー、爆弾発言ってゆうやつか。やるな陸」

海のやつがなにやらぼざいていやがるがこの際無視だ。

なによりも先に紫苑の暴走を止めないと！

「あらあら。まあまあ。陸の恋人の方ですか？　こちらこそ陸をよろしく願います」

へへーっと母さんも紫苑に倣うように土下座して挨拶を返す。

やばい、ボケが二人に増えた！？

「ちょ、ちよつと待てッ！」

何の疑いもなく信じる母さんの素直すぎる性格に、本気で焦りを覚えて口を開く。

「うっ！？」

いつの間にか後ろに回った紫苑に、背中越しに複雑な関節技で固められ、あまつさえ紫苑は右手の掌で俺の口を塞ごうとしてくるッ！？

（こいつ！　俺の発言権を奪う気だ！）

その執拗さは日本の常任理事入りを拒む中国の如く。

大蛇の如く悪意を持って動く手のひらを必死にかわしつつ打開策を練る。

「いえいえ、こちらこそ。《初孫》を楽しみにして下さい」

「何をいつてるんだあああーッ！？　ふ、不潔だぞ！」

絶叫してしまう。

一部をあまりにも強調した倫理規定を外れる発言に俺は泣きそうになる。というか泣いていい？

「陸、やるな。もつと陸はウブかと思つたよ。俺も見習わないとな」

爽やかなスポーツマンのような笑顔を浮かべて右手の親指を立てて笑う海。

ちよつと無駄に歯を白く光らせてないでフオローしてくれ！？

「ば、馬鹿！ 母さんこれは違うよ！？」

「初孫楽しみね」

「ちよつと母さんッ！？ なに夢見る瞳で斜め上四十五度を見上げてるのさ！？ もつと現実をちゃんと見ようよ、俺らの年齢はきつと年金貰えないんだよ？ 貢ぐだけ貢いでホストに捨てられる田舎から上京してきた娘さんの如しだよ！？」

「子供は四人。男が二人に女が二人。程よい大きさの白い家に住み、白くて大きな犬を飼うことにしよう！ 犬の名前は武蔵丸だ！ 彼には小次郎というライバルがだなあ……」

「紫苑も妄想度一〇〇%の野望を、俺の耳元であたかも洗脳するが如く呟かないッ！ しかも何その犬のライバル設定！？ 無駄に細かいんですけど！？」

俺の叫びは虚しくリビングに響き渡る。ちよつと誰か話を聞いてよ！？ 俺はここにいるよ！？

「俺も彼女見つけて、高校ライフを満喫しよう」

「お、俺の……ッ」

俺は今、張り裂けんばかりの風船だ。

「陸ちゃん、新婚生活を楽しみたいのはわかるけどいきなり別居しないで、暫くお母さんたちと一緒に暮らしましょうね」

「俺の話を……」

ある感情をとき放ちたくてしかたがない。

「結婚旅行は熱海がいいな！ ちなみに浮気は許さないぞ？ もし浮気したら紫苑ちゃんヤンデレ開 眼だぞ？ それから、老後は私が老人ボケになっても見捨てずつつこみを返してくれよ？」

俺はにつこりと青筋つきの顔面神経症のような笑みを三人にプレ

「俺の話を聞けええええええええええーッ！」

ほんとお願いですから……

「そう言うことだったの」

「なんだ、つまんねえ」の

「むう……不意だが……仕方あるまい」

「でも紫苑ちゃん可愛くなつたわね♪」

しめて頬擦りをする。

「むづ、どづいたしまして……でづゆる。」

意味不明のコメントを口にして紫苑は母さんにされるがままだ。無表情の中にもどこか紫苑が恥じらっているを見つけて微笑する。

そんなことより、母さんさー、紫苑さんの部屋どうするのさ?」「珍しくまともな意見を海がだす。

しかし、それは同時に俺にピンチを呼ぶ。

「そうね、紫苑ちゃんはどうくらい日本に滞在するつもりなの？」

海の提案に、母さんは考えるそぶりを見せて、紫苑に尋ねる。

「この夏が勝負なので、できればこの夏いっぱい置いて欲しいので

すが……」

瞬間、俺の背中に電流走る。

な、何だろっ勝負って？ 湧き上がる不安に苛まされる。

「余裕よ」

俺の疑問が置き去りに、母さんは親指を立てて紫苑に笑いかける。

「大感謝ッ！」

紫苑はガシッと母さんに抱きつく。

何やらかなり二人は打ち解けた様子だ。

叫びすぎたせいか喉の渴きを覚え、冷蔵庫に向かい麦茶をコップに注ぐ。

「でもね、客間がちょっと散らかってるのよね」

視線を紫苑たちの方に向けながら、何の気なしにコップの麦茶を飲もうと傾ける。

次の瞬間！

少女チックに首を傾けながら、母さんが爆弾宣言を放つ！

「だから、今日は陸の部屋で一緒に寝てくれない？」

「是非ともツツツ！」

「ゲハアッ！？」

紫苑の返事は音速を越えていた。

「げげげッ！」

飲んでいた麦茶を喉に詰まらせ、気管の変なところにはいったせいで咳き込む。

海がさすさす背中をさすってくれた。

一切の間を置かず、紫苑は両手の親指を立てて即答してしまい即決。

ま、本気なの！？ これ悪い夢じゃないの！？

しかも紫苑の瞳は獲物狙う鷹のように。

もしくは夜這いを決心し野望に燃える青年のように、熱を――帯

びていた。

というか紫苑の目が語っていた。

『いただきますッ！』と。

（や、ヤバイ！？）

聞こえてきた幻聴に悲しく鼓膜が震え、背骨が悲鳴を上げる。

予感を超えて、確信のレベルまで上がった危機に身を震わせるしかなかった。執事服で。

第九章 アレックス・バグネット

ス・バグネット』

《アレック

バグネット邸宅

ボクの名前はアレックス・バグネット。
世界的に有名な複合大企業にてバグネット財閥の長男にして後継者であり、美貌と知性を兼ね備えた究極生命体だ。

（ああ……ボクは美しい！）

絨毯の上でスピンを舞う。そう、美しい白鳥キグナスのように。

星々も割れんばかりの拍手でボクを称えてくれるだろう。それアンコールアンコール！

（ああ、ボクは完璧だ！）

ボクのハートはウキウキのしゃかりき。

このハートの熱さは意識しなくても高まり、狂ったようにボクはタップを踏み鳴らす。

それは某国の農民のケチャと言う踊りを思わす激しさだ。オウ、イエエーッ、ケチャ！ モンキイーダアンスッ！

（ああ、ボクは素晴らしい！）

パーフェクトなボクには、愛しい婚約者がいる。

名前はシオン・アヤサキ。

その美しさは女神だ。天使だ。小悪魔的プリティーだ。抑えきれない下半身の衝動に狂いそうだ！

下半身が好きだと自己主張、もう止められないッ！

「ハッハ〜ン！」

胸元から取り出したクシで優雅な金髪のマイヘアーをアグレッシブかつ繊細に整える。

神が奏でる奇跡は、やがてボクの髪に降りるだろう。

カリスマ美容師などボクの前では一セントの値打ちもない。

そうゴッド美容師のボクの目の前では、な！

（ああっ、ボクは何て素敵なんだ！）

純白のスーツを身に纏い、情熱の紅のネクタイを締めて、バラを口にすれば……………ほら完璧。

——ボクは美の集結体となる！

輝かしいオーラに、全てを兼ね備え、美男子で、紳士で、資産家で、高貴で、万能で、マーベラスかつエクセレントでエリートなこのボクにもなかなか手に入らない存在が、たった一つだけある。

それが、シオンだ。

「わかってるさ子猫ちゃん。照れて、そしてボクの素晴らしさに、ためらいを覚えてるんだね？ 心配しないでいいよ。ベッドでは優

しく闘争行為がボクのモットーだからね。愛の聖騎士と呼ばれたこのボクが、燃え上がるラヴでメロメロさ、ウヒ」

愛しい婚約者に熱いラヴを加速させる。

マシンガンの如くラヴの弾丸をキミに全弾命中させてあげる所存さ。

そしてゆくゆくはキミをボクの愛の奴隷にしてあげる

「おっと、そういえばシオンから手紙がきていたな」

ボクは机の上に置いた手紙を開けてみる。

きつと溢れんばかりのラヴが詰まっているに違いない。

まったくもうプリーティーなのだから！ 切ない想いでボクが欲しくて、体が夜鳴きしているに違いない。全く、ビバ十八禁行為だ。

ウホ！

「えーと、何々……」

『婚約破棄内容』

どこぞの資産家アレックス・バグネット。

単刀直入に言うが、婚約破棄だ。そもそもアレ公、私はあまりお前が好きでない。

婚約も私のお爺様とお前の父上が決めた問題だ。そんな婚約承諾することはできん。

もう一度言う。婚約破棄だ。

私は日本に住む天堂陸と言う幼馴染のことが好きなのだ。

故に、お主とは婚約はおろか結婚などしたくはないと言うことだ。まあ、そんなわけだからさらばだ！

お前のことなどまったく愛していない 綾崎

紫苑より

P S ・ むし

る地獄に堕ちる』

「オウ、ジイイイイイザアアアアアアアアアアースツツ
!？」

自室のベッドのような柔らかさを持つ高級絨毯の上に両膝を付いて叫び声を上げる。

い、一体何！？ 何コレ！？ 夢？ 幻覚！？ 嘘か真は夢うつつか！？

その驚きたるやノブナガ・オダがミツヒデ・アケチに謀反を起こされた時の如し。ランマルはどこですか！？

高潔にして気高く、美しい。おおよそ完璧を兼ね備えたボクには、この醜態あつてはならないことだ。

だが、今回ばかりは仕方が無い。例外的措置。不可抗力というものだ。

「Why my angel!？」

この文面から察するにボクの許から婚約者であるシオン・アヤサキが日本へと行方を絶ってしまったということになる！

当然、彼女の親族の方はもちろん、婚約者であるボクにも今の今までシークレットでだ！

何とガッデムなのだ！ ガッデムフォーエバーだ！

こんなことが許されていいのか！？ いや許されない。

「エドワード！」

我がバグネット家に代々仕えてくれるこの道四十年のベテランの執事を呼び出す。

「はい、坊ちやま」

「このジャップのリクと言うこのワールドで最も劣ったイエローモンキーのことを調べてくれ！ あと写真も欲しい！」

「すでに用意しております」

優秀なエドワードはすでにリクとやらの写真を用意しており、ボクに手渡してくる。

書類には、ボクから愛しい恋人を奪った憎々しい少年の写真がある。

こいつがリク・テンドウ！

「ふう……む……」

庶民にしては美男かもしれないが、男らしさの見えない顔つきだ。パツと見て女の子と間違うような女々しいベビーフェイス。

所詮このボクの美貌と比べれば、王と奴隷。天と地。ダイヤモンドと石程の差がある。

「オウ、シイイット！ イエロージャアップツ！」

書類を空中に投げ出すと、ボクは胸元の拳銃を抜き様、絨毯に落ちる前に書類の写真へと乱射する。

ズキューン、ズキューン、ズキューン！

主のボクに代わって鋼の怒号を上げ、突き刺さる弾丸が写真のリクを撃ち抜く！

穴だらけになって足元に落ちてきた写真をさらに踏みつけ、踏みにじり、踏み潰してやる！ フハハハッハ！ こうだ！ こうしてこうやってこうしてくれるわッ！

「オウ、サノバビッチッ、ファッキン、メン！」

一体、この男はななな、な何のつもりだ！？ たかが庶民の分際

で、このボクの婚約者に手を出すとは……！

神をも恐れぬ大胆不敵で厚顔無恥！ ハレンチ満開、サムライ、フジヤマ、スシ、ゲイシャ！

「おのれええええええッ！ しよ、庶民の分際でっ、このリッチ・プリンス・アレックス様に盾突くとは！」

おそろくリクは言葉巧みにシオンをそそのかしたに違いない！

いやもしかするとシオンはリクにエッチな弱みを握られていて無理矢理従わされているに違いない！

なんて狡猾で陰湿でうらやましいやつなんだ！ ある意味尊敬する！

しかし、さすがボク！ 灰色の脳細胞は今日も冴えまくっていて、最高にいハイってやつだ！

乱れた髪を胸元から取り出したクシで丁寧に整える。

紳士たるもの常に身だしなみには注意を払わなければならない。

そもそもボクとシオンとの出会いは運命的なものだった。思えばボクたちの幸せはあそこから始まったのだ……。

とあるパーティー会場で、ボクはシオンと出逢った。

我がアメリカの白人女性に無い繊細で可憐な容姿は、一目でボクを釘付けにしてイチコロにした。

そう……さながらゴキブリホイホイのゴキブリのように……。

ダイヤモンドにも負けない輝きを放つ神秘的な黒瞳に見つめられた瞬間、ボクの背筋にビリビリと1・2ジゴワットの電流が走った。一目で確信したね、これは神がボクに遣わしてくださった女神だと。

美しさを塗り込めた鼻筋のラインに、少女の清楚さと女性のセクシーさを兼ね備えた形の良い唇……毎日毎晩あの唇が夢に出る。ああ……っ。

ボクにあの唇を独り占めさせてくれないだろうか？

そして明るいオレンジのカラーの、それこそ無意識に手を伸ばしてしまふサラサラのショートカットの髪は同じ量の黄金の価値がある。いや、それ以上だ！

さらに、目を奪うような深紅のドレスに身を包んだシオンは、十六歳とは思えない均整のとれたモデル並のスタイルをしていた。ムラムラバディにハラショーロシアだ！

あの胸を驚掴みたい！ 収穫祭だ！ サンバのリズムでドンドコドン！

まさにボクの生涯の伴侶とするのに相応しい女性だ！ 夜のパートナーだ！

そう！ 彼女には美しいボクこそが相応しいッ！

決つて――

「――あのどうしようもない程の庶民で下賤の生まれの極貧家庭で、ろくな情操教育を受けておらず、無教養の非常識な最下級の者にはシオンは全く似合わない！」

そう！！ この高貴で気高いボクこそが、シオンを幸福絶頂に導けるのであり、間違つてもあの少年ではない。

絶対、ない。断じて、ない！ マジありえない！

そう！！！！ この神が設計し、神すらをも越えてしまった無敵完璧超人アレックスの前に立ち塞がっていいものは何人たりとも存在しない。

いや、してはいけないのだ！

「きた！ きたあつ、きたきたきたああああああッ！」

ボクのインスピレーションが囁く。

すばらしいイックがボクの口から奏でる寸前のこの昂奮が全身に

駆け巡る！

「カッコイイ ああ超絶美形が 滴り落ちる。五・七・五」

ボクは全季節いつでも美しいから、それが即ち季語！

「さすがでございます、坊ちやま」

「ふふふ、よせエドワード。照れるじゃないか」

よおーしみなぎってきた！

こうしてはいられない！ 彼女にとって誰が相応しいか……リクに教えてやらねばならないだろう！

「エドワード！」

近くに控えていたエドワードに鋭い視線を向ける。

「はい、坊ちやま」

ずいとはずいエドワードは前に出て、慇懃な態度で一礼する。

「エドワード、ボクはシオンに会いにすぐさま日本に行く。出国の準備と自家用のジェット機の用意を頼む」

「かしこまりました」

エドワードはもう一度慇懃に礼をして、静かに退室する。

広い部屋にはボクがただ独り……

「待っていておくれ……愛しのスイート・エンジェル・シオン！ボクの花嫁。すぐに超カッコイイボクが迎えに行くからね……」

夜に輝く月を見上げながら呟いた。

第十章 乙女ザムライ ラヴ駆け引き！

堂家 陸の部屋

天

《天堂陸》

切迫感に襲われながらも、何気無さを装いながらクーラーのタイマーのセットをする俺こと天堂陸は危機に瀕していた。

どのような危機かというと、母さんの提案で紫苑が俺の部屋で一緒に寝ることになってしまったというものだ。

しかも紫苑はパジャマを持っていないというので、下着の上に俺のYシャツを着ているだけという色っぽい格好。

健全な高校生ならば、小躍りしそうな状況だ。

けれど、女性とのこういった状況に慣れていない俺にとっては、負担のかかる切迫感に悩まされるだけだ。

(……………いや、それは嘘かな)

少して否定する。

俺だって男だ。やはりこういった状況に嬉しさを感じることは否

めない事実だ。

それも——もう会えないと思っていた初恋の相手で、大がつかほどの金持ちのお嬢様。

そのお嬢様は、顔良し、スタイル良し、家柄良し。

性格は………多少変わっているが良し。

そんなお嬢様とこんなにも近くにいるのだから、俺はかなり幸せ者なのかもしれない。

（なんだか二人っきりの雰囲気酔ってしまいそうだ……）

そう思う。

紫苑の下着——空港で買った勝負下着——コードネーム・ハートラヴ（紫苑命名）の上はYシャツだけという色っぽすぎる格好。この二人つきりだという状況。そして、このなんともいえない雰囲気。

興奮で身体がふわふわして落ち着かない。

ところが、その時、

「海いいいを〜」　こうえええたあああ、サムライがああ〜」
宿敵い〜と出会って、ござる・ござる・ござる〜」

床に布団を敷きながら紫苑が歌い出したのだから、色々な意味で堪らない。

この二人っきりのドキドキした状況を、甘い雰囲気を、何と言うか……一瞬で壊滅的な状態にした。

デンプシーロールを全段直撃した後の腰砕けのボクサーとでも言った方が判りやすいかもしれない。もう正直、立てる気がしない。

いやこの場合、マタビに引き寄せられて捕まり、保健所に強制収容させられたネコの気分の方が正しいと言えるだろう。正直、希望を抱くことができない。

とにかく、俺は思った。

顔に縦線を引きながら思った。

公衆トイレに入って用を足した後、紙がない事に気が付いたような表情で思った。

（色気が無いっ！！！）

あげく！

「ぐさっ！ バシュッ！ ドバドバ、グシャア！ …… フッフ、拙者の刀は血に飢えているでござる」

（殺伐しすぎて、ロマンスも無いっ！）

そうだな……ッ。

紫苑があらゆる意味で普通と違うなんて判りきった事だったよな！？ なに期待していたんだろう、俺…… orz

「……紫苑、寝る準備できたか？」

ため息混じりに、少し虚ろな視線を紫苑に向ける。

すると紫苑は俺と違い、打って変って明るい口調で返事をする。

「うむ！ 準備万端！ 一〇年は寝られそうだなぞ」

「……それは単純に寝すぎだろ」

軽くつつこむと、部屋の電気を消す。

途端に暗闇と静寂がひっそりと輪郭をもって部屋に訪れた。外の夜の気配が、部屋の中にすっと忍び寄ってきたかのようにだった。

しばしの沈黙が部屋に横たわる。

緩慢な睡眠の欲求が、クーラーが送り出す風のように密やかに押し寄せてくる……今日は色々あってなんだか疲れたな……

「陸……」

「……ん？」

ある意味油断していた事もあった。

そんな台詞が、もう紫苑の口から出ることが無いと決めつけていたせいもあった。

だから次の台詞を聞いた時、俺は焦った。

「二人つきりだな」

「……ッッ！？」

いきなり心臓の体温が融点を超え、沸点に送り込まれた気分だった。

「な、な、な、な、な、な何、いいい言ってるんだよ！？」

声は悲しいくらいに動揺していた。

と、暗闇の中……紫苑が布団から体を起こして、俺の方に顔を向ける。

暗闇と言っても、外からの月明かりがあるので、完全な闇と言っ
わけではない。

だから、紫苑の表情がうつすらと見えていた。

月明かりの下で、紫苑は真剣な表情で俺を見ていた。

それを認識した俺は……！

顔が火照り、喉の渴きを感じる。唾を飲み込むゴクリという音が
ひどく大きく聞こえたような気がした。聴覚が異常なくらいに鋭く
なっている。

「今夜は………寝かさぬぞ………」

ゆらりと立ち上がった紫苑が、俺の寝ているベッドへとゆっくり
と近づいて——くるッ！

彼氏に迫られる女の子の気持ちだが、今、非常に良く判ったような
気がした。

（何と言うか……おいしいけど、怖いな！？ うんッ！）

などと思っている間に、紫苑は目の前にいた。

（あ……っ）

と言っ間もなく。

グワッシイッ！

そんな効果音が聞こえてきそうな勢いで、紫苑に両肩を捕まれる。

あ、あのちよつと痛いんです、けど……

瞳に涙みを潜ませた紫苑は、漢字四文字で言うならズバリ、天下
無双。

生死を悟りきった瞳で宣告された気がした。

『ぬしはもう………終わりじゃ。観念せい』

（本気スかああああああああッ！？）

そんな、幻覚アンド幻聴を見聞きしている中、気が付けば紫苑は俺と鼻の先が触れ合うような距離にまで接近していた！ い、いけないこのままじゃ色々な何かがぶつかってしまっ！

「今宵は楽しもうぞ…ふふふ」

「ななな、何を楽しむんだよーっ！？」

もはや凄みどころか、狂気まで潜ませた紫苑の瞳に、俺は半泣きどころか全泣きして叫ぶ。内心の思いは『頼むから堪忍や』という具合だ。これ一応、R15ですよ！？

と、そこで紫苑は俺の叫びにピッタリと動きを止めると、ちょこんと首を傾げる。

「本当だ……何を楽しむのだろう？」

そのコメントに俺の脳は一瞬動きを止め、その次に脳から送られた指令を実行する。

「なんでやねん！ 分かんのかーッ！？」

お、おおお、お前それは反則やろ。こここっここ、ここまで引っ張っておいて、さ、さささすがのワイもそれは許されへんわー（何とも言えない感情のあまり関西弁）

紫苑に全力でつつこみを入れる。

「む……では陸には分かるのか？」

「ッ！？」

ニコニコと満面の笑みの紫苑の質問に動きを止めてしまっ。

や、野郎……そうきやがりましたかッ。

ぬかった。これは紫苑の策略！

さながら紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ駆け引き》に違いない！

わざと無邪気にふるまうことにより、相手の本音の感情を引き出そうとする巧みな人心掌握だ！

紫苑、なんて恐ろしい子。どうでもいいけど、紫苑の名前は呪怨に似てるな。

いやいやそれどころじゃない。

そりゃ俺だつて清浄無垢の赤ちゃんじゃないんだから、分からないわけじゃないけれども、だからって！

（い、言えるわけがないだろーっ！）

心の中で絶叫する。

こうなつたら紫苑を丸め込むしかない！　じゃないと俺の立場がヤバイ！

捕食者にいつでも食べられる草食動物だと思うなよ！？（涙）

「と、当然分かるに決まっているじゃないか」

「ほほう。では何なのだ？」

「それは、その……なんだ……（もう手詰まり）」

早いッ！　早いよ、俺。三秒とすら持たなかったよ。

目まぐるしく頭脳を回転させる。ちょうど、テスト五分前の最後の足掻きの如く。

あまり適当なことを言うわけにはいかなかった。もしあまりにも軟弱な回答をしようものならば、ピンクに狂った獣が襲いかかってくることは間違いがない！

確信があるね！

だって彼女、ピンクの吐息をコフウーコホウーとダークスペイダーのように吐いていらっしやるんですもの！

少し考え方が人よりずれているが、紫苑は無能というわけじゃない。

むしろピンクに狂えば、これほど恐ろしい野獣はいない。

手負いのトラより獰猛だ。

ここは本当半分嘘半分でいくしかない。そう、最も巧みな嘘というのは真実が半分入った嘘なのだと何かの本で読んだ気がする。

「一緒に寝る……とか？」

「ふむ……なるほど。よかろう！　では……いざッ！」

紫苑が。とんでもなくいい匂いが、柔らかな肢体が布団の中に滑りこんでくる。

（何言つてんだ俺はーッ！？）

心の中でまたしても絶叫する。

なにか俺はわざわざ自分から両手を上げてアホのように叫びながら、崖っぷちに向かって全力疾走している気がする。

先は落ちるしかないとかっているのに！

そんな俺の心情を置き去りに、紫苑という超絶的な女の子的存在が、俺の横に数センチ先に確かにいる。

（う、うわあああああああッ！？）

背中を向ける。

壁にへばりつく。俺はトカゲイモリスパイダーマン！ 可能であるならば、壁の先へと逃げたい。へたれと呼んでくれていいさ！

ああ呼ぶがいいさ！

神様に祈りたくなってきた。

俺だって男だ。初恋の相手がこんな近くに寄ってきたら、何も感じないわけがない。

だけど、いつも最後にぶつかる壁がある。

それはやっぱり紫苑を取り巻く状況だ。差別しているわけじゃない。

どちらかと言うと強大な遠慮だ。

だってそうだろう。たとえるなら、農民の俺は今……一国のお姫様と同じベッドで寝ているもんなんだ。

く、くそ釣り合わない。身分違いにも程がある。

紫苑のことを想えば想うほど。考えれば考えるほどに紫苑と俺との距離を感じる。

痛いくらいに……

恋慕の想いはただ空回りして、紫苑に伝える前に常識や状況に潰される。

好きだってことすら口にできない。

（やっぱり一緒に寝るなんてだめだよな……）
冷静になってみてそう結論をだす。

「紫苑……やっぱりさ……」

と、そこで気が付く。

あまりにも隣が静かすぎることに。

おかしいぞこれは。紫苑ならば布団に入るや否や俺を組みしいてもおかしくないのに……

たとえるなら蜘蛛の巣にひっかかった虫のように食われてもおかしくないのに。

「し、紫……苑……さん？」

恐る恐る後ろにいるであろう紫苑を振り返る。

「スー……スー……」

納得した。

いつのまにか……紫苑は眠っていた。

なんつー寝つきの良さだ……。

「まったく……人の気も知らないでさ……」

苦笑を漏らして、つい出来心で紫苑のほっぺたをつんつん右手の人差し指で突く。

それが間違いだと言えなくもない。

混ぜるな。危険？

いや、この場合エサをあげないでくださいか。

なぜなら――

つんつん、と柔らかい頬を突いた瞬間、俺の指は、

――噛みつかれます、から。

そうばかりと。

パクリと紫苑の唇に食いつかれた！？

やわらかい唇の上と下が俺の指を挟み、優しい甘噛み。暖かい口内の気配――

(うひゃあああああああああああッ!?)

背中を海老反りにして悶絶する。

あぐくの果てに紫苑の、し、ししし、舌が!!

腕を細心の注意を払いながら引き抜く! ちゅぽんとまるでタコの吸盤のような音を立てて、なんとか指を引き抜くことに、はあはあ、ぜいぜい、せ、成功する。

「うゝん、むにゃむにゃ……紫苑ちゃんベロチューは得意だぞう……」

(聞いてないから!? そしてその実力はよくわかりましたからッ!)

人が混乱の極みにある中、紫苑と言えば幸せそうな寝顔を無防備にさらしている。

その寝顔に視線がはずせない自分がいた。

紫苑の吐息に、半開きの唇に、閉じられた瞳に、魅了されずにいられない。

隣で寝る紫苑の髪を、俺の出来るかぎりで優しく撫でる。

紫苑の髪は手に心地良く、凄く感動的なくらいサラサラしていた。

女性の髪に手を触れ

たのはこれが初めてのせいだろうか。

顔が熱くなり、脈拍が速くなるのを止められなかった。

この瞬間をひどく幸福に思う。

繊細な波のような幸福感に包まれ目を閉じる。

先程までの気持ちが嘘のように安らぎ、いい夢が見れるような予感がした。

第十一章 朝のラヴ チャンス到来

綾崎紫苑》

《

「む……う……う……朝か？」

鳥殿のさえずりを耳に目覚めた私は、おそらく三国一の幸せ者だ。思わず右手の親指を立てたくなる。いや、むしろ立てる。

と！

瞳を開けると目の前には陸のアップがあつた！

「！？」

私は驚く。

ちなみに陸のアップに驚いているわけではない。いや、それはそれで驚いているのだが、それ以上に驚くべき事実があるのだ。

なんといつの間にか、私がっ、陸にッ、抱き締められていたからだ！

思わぬ幸福的展開に私の頬は弛みそうになる。いや、弛む。

今ほどクラッカーを鳴らしたいと思ったことはない。今日はハン

バーグを食べよう。

「据え膳食わぬは漢の恥でござるな」

このありがたい展開に感謝すべく両手を合わせる。

こちらからも遠慮なく抱き締めさせて貰うことにしよう。

ギョウと抱き締め、顔を陸の胸辺りにグリグリと押し付ける。

「グリーン、グリーン」

陸の身体は私よりも一回りほど大きくて、私の身体はすっぽりと陸の腕の中に収まってしまう。

鼻孔に陸の匂いを感じる。

私はハイエナのように鼻を膨らませた。

（あああああッ、た、たまらん……ッ！）

私はマタタビを手にした猫殿と化した。

恍惚とした溜息を吐き出す。これだけでご飯三杯はいけそうだ。

人間誰しもその人自身の匂いを纏っているものだと思う。

陸の匂いは何と表現したらいいのだろうか……？

ハンバーグの匂いでもないし、猫殿や犬殿の匂いでもない。

ただ一つ言えること。

それは私が一番安心できで、心地良い匂いということだ。

私専用の麻薬のようなものだ。ふふ……胸キュンだな。

（さあーて……）

陸の顔をまじまじと見つめる。整った鼻筋に、ひき締まった口元は……

「いかん、よだれが……じゅるり」

口からこぼれ落ちるよだれを右の甲で拭き取る。

「ん……？ んん……」

慌てて身じろいだせいか、陸が目を覚ます気配を見せる。

「いかん！ まだ夢の中で、どんぶらこしている！」

陸の頭に手刀をビシリと落とす。

「うー!? 痛ッ……ああ? 朝か……?」

だがどうも逆効果だったらしく、非常に遺憾なのだが……陸は目を覚ましてしまった。

「……………へ?」

陸は自分の腕にいる私を見て思考を止める。

数十秒間、私と陸は至近距離で見詰め合うことになる。

「……………」

「……………!」

(ラヴ チャンス到来ッ!)

明晰な私の頭脳は答えを導き出す!

さすが私だ! 愛しいものとの機会を確実にものにする、そこそが恋する乙女の必須条件!

これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴチャンス奪取》! 恋する乙女は、機会に敏感なのだ!

機会到来、即奪うように行動! 先手を打つ。それこそが乙女の恋の成就に繋がるのでござる。

陸の唇を奪うべく、顔を前に……前に、前にッ、前にイッ!

「どわくああああああアアアあっ!?!」

陸は奇怪な叫び声を上げて慌てて飛びのき、私の唇の射程から逃れるッ。

おのれ、後一步のところで……。

「な、ななななん……なんで!?!」

陸は震える指先を彷徨わせ、私を指差す。

「いや、陸が抱き締めてきたのだぞ」

「あ……。あああっ!?!」

私の主張に何か気が付いたのか、陸は大声を上げる。

「すまん! 俺、寝てると無意識に側にあるもの抱き締めてしまうんだよ。ほ、ホントにゴメン、悪かった!」

陸は両手を合わせて平謝りに謝ってくる。

（これは良いことを聞いた。……今度から利用させてもらおう）
心の親指をビシッと立てて、会心の笑みを唇の端に刻む。

（さて、ここでさらに陸に貸しを作っておくか……）

まあ、恋する乙女はいつでもしたたか。駆け引きが巧みでないと、な」

「ふん……抱き締めてしまつか……」

口調にさり気なく悪意と毒を込めて、陸を半眼でチラリと見やる。
ちなみに演技だ。

「え、え、え？」

私の様子に、陸は言いようのない不安を覚えたのか、激しく動揺の言葉をもらす。

いい感じだ、むふ。

「……………」

黙して陸を半眼で見つめ続ける。

こういう時は、下手に罪を暴き立てたずせずに、ジッと待つのが得策というものだ。

「お、俺何かしたのか……？」

私の沈黙の視線プラス自分自身の言いようのない不安に耐えかねず、陸が尋ねてくる。

（フッフ……もはや紫苑ちゃんワールドの虜だな）

内心でほくそ笑むと、仰々しくため息をついてみる。

「……覚えてないのか？」

陸に鋭い一瞥を投げかける。

「な、何……が？」

陸は緊張した面で、私を見る。

瞳は不安に揺れに揺れまくっているという具合だ。

やれやれというのをたっぷりと込めた溜め息をつき、一気に淡々と嘘の説明を陸にしてやる。

「お前は未来の妻を愛するという証明のように私をきつく抱擁し、

さらにその後、陸は、自分の顔を躊躇なく私の87センチの胸に、グリグリと発情期の野獣のように押し付けて蹂躪し、あぐく私の匂いを嗅ぎ、よだれをたらす始末だ」

陸は嘘の説明に顔を真っ青にする。

眼は恐ろしいものを見たかのように見開き、麻薬患者の薬切れのように歯をカチカチと打ち鳴らす。

（むう……そこまで真に受けられると罪悪感が……）

そもそも陸は私を抱き締めていただけだ。

しかも、それから後のことは私がやっていたことをさも陸がやったことのように捏造した……というのが実情だ。罪悪感を抱かないわけでもないが、まあ政治家も国民ないがしろにしたい放題であるし、構うまい！

「お、おおお、おおお俺がそんなことをツ！？」

陸は戦慄に身を震わせる。

ああ……つ。だがしかし！……フッフ、この戦……もらったな！「すみません！ すみません！ ごめんなさい！ う、生まれてきてごめんなさい！」

「まあ……反省しているようだしい……」

必死の形相で土下座を繰り返す陸へと鷹揚に頷いてやり、そのくせ要求する。

「その代わり……私をどこかに連れて行ってもらおう！」巧みにデートの約束へとこぎつける。

ふう、たまに自分の頭脳の冴えに戦慄を感じるでござる。

「………う、海で………どう？」

暫し黙考していた陸がおそろおそろという感じで尋ねてくる。

（海か………）

天井に視線を彷徨わせ、シミュレーションを開始する。

海 ↓ 水着 ↓ 露出度少ない ↓ 紫苑ちゃんの色気 ↓

陸クラクラ

「ラヴ チュヤンス」(ω) b

「よし海だ！ 海で万歳！ 海はサムライ！ 一芝居ひとつはし打った甲斐があるというものよ！ 作戦成功でござる！」

瞳を輝かせ、右拳を天に届けとばかりに振り上げる。

そしてグツと右の親指を立てる。

「ちょ、ちよつと待て……一芝居と作戦成功っていうのは……どういうことだ？」

「う……」

背中に嫌な感じの汗を浮かべる。

調子に乗って内心の考えを暴露してしまったようだ。

「それになんか、俺の胸元がよだれのようなもので濡れてるし、なんか胸のあたりがすりつかれたように赤くなってるんだが……何か俺……また騙されてないか？」

陸は半眼で呟く。

ぬ、ぬう！ ここは押しの一手で行くしかあるまい。

「いや、気のせいだ。使用後のつまようじくらいどうでもいいことだ」

「それは確かにどうでもいいけどさ……」

釈然とせずに首を捻る陸。

そんな陸の内心の疑念を払うように、大声で叩きつける。

「ならば海に行くのだ！ 絶ええっつ対いに海に行くのだ！ 必ず

海に行くのだ！ 何が何でも海に行くのだ！ チャンスなのだ！
ラヴなのだ！」

陸の胸倉を掴み、鬼気迫る表情で陸に詰め寄る。

「何が何だか良く分かったんだが……」

「ええい！ とにかく海に行くことに決定多数だ！ 記憶にござい
ませんだ！ その案件は担当のものに一任しているので私には関係
がございませんだ！」

駄目押しの一言を放った瞬間、ガチャリと、音をたてて海殿が部
屋に入ってきた。

「俺のこと呼んだと思って、来たんだけど……」

そこでいつの間にか陸を押し倒している私を見て、陸の顔を見る
と、表情を変えずに海殿が尋ねてきた。

「もしかして……取り込み中？」

「うむ。その通りだ」

とりあえず、海殿には肯定の返事をしておく。

と、陸は自分の今の体勢に気が付いたらしく、慌てて弁解しだす。
「ち、違うツ！？ 違うぞ海！ これは、これは罠だ！ 策略だ！
そもそもおかしいじゃないか！ そういうみだらな行為を朝にや
るわけがない！ 紫苑が俺をハメようとしているんだー！ 言うな
らば、これはテロだ！ どうか海と連呼して第三者を呼んだのが
その証拠ッ！」

某死殺ノートの真犯人の形相で、陸は叫び、海殿は首を傾げる。

「俺、誤解した？」

「いや、全然誤解していないぞ」

今度は私が海殿の質問にきっぱりと冷静に否定しておく。

「紫苑！？ 何をい……フムウ！？ フゲフゲ、ンムウ！？」

「海殿の見たもの……それが全て真実だ。某人気探偵ものアニメの
コ●ンも言っているだろう？ 『真実はいつも一つだ！』とな」

暴れる陸を組み敷き、口を押えてしゃべらさない。ええいしゃべ
らすものか。

「ん、そうだな。つまり陸は紫苑ちゃんと朝の《ラヴラヴ色気つけ
 》ってことだな」

「んん！？」
んんんーッ、
んんんッ！」

「その通りだ、海殿。なかなかのご賢察。紫苑ちゃんむふふのふだ。これで事件は解決！……花丸をあげよう」

「んんぐッ！ ちがつ……ふんぐうつん！？」

やれやれ、陸が何と言っているのか、全く分からないな……フツ。
まったくやれやれでござる。

「んじゃ、もうすぐ朝飯だから。まあ……ごゆっくり♪」
手をヒラヒラと振りながら、海殿は退室する。

海殿が退室して暫くしてから陸を自由にしてやる。

「ご、誤解だ……お、俺は……ラヴ……ラヴしてない……それに色気つけて何だよ?」

何やら虚ろな表情で呟く陸は置いておいて、カーテンを開け、差し込む朝日に目を細める。

「ふ、いい朝だな……」

「な、
なんでやねん……！？」

陸は絶望を表情にはりつかせ、つつこみを放つとがっくりと力尽きたように布団へと倒れこむ。

それは糸の切れたマリオネットを彷彿とさせた。

まあ何はともあれ、海行き決定でござる♪

なっ ははははははははは！

《天堂陸》

デパートで紫苑の水着や何やらを買い込んで、渋滞に巻き込まれる事なく数時間。

そろそろ海に近づきつつあった。

風の匂いが変わったのは、いつからだろうか？

助手席の窓から入り込む爽快感を含んだ透明な風の匂いを感じ、そんなことをふと考えてみる。

俺たちが乗っているのは日産のエルグランドの七人乗りで、フロントムブラックが堂々とした存在感と風格を感じさせるミニバンだ。なかなか立派な車なんだが……車内は母さんが取ってきたぬいぐるみで埋まっている。

犬、猫、オコジョ。ゴマアザラシ、イルカ、ライオン、コアラ、親子カンガルー。となりの大トトロ、中トトロ、小トトロ。ウルトラマン、ドラえもん……などなど。

それこそすれ違う車が目を見張るくらいの数だ。

あ……またすれ違った車に乗っていた人に指さして笑われ……た

……。

羞恥心はもうとうの昔に品切れだ。

今じゃもう、車の中で一人で待たされたりしてもへっちゃらです。
三。

や……マジでへっちゃらですから……うつうつ。(恥)

瞳から零れ落ちてきたトラウマを誰にも見つからないように拭う。
このぬいぐるみ達は母さん曰く――

『ラヴで世界を救うの』

――らしい。

意味なんて分かんないし、その時のウツトリとした何処を見ているのか判断のつかない母さんの瞳も意味不明だ。不明不明！ 全然分からない！

もうラザフォードの散乱公式や正準運動方程式くらい分からない！
きっと俺には想像も及ばない深遠な意味があるのだろ。そう思う。そう思わせてくれ！

(でも……ぬいぐるみ買うお金でユニセフやらに募金したほうがいいと思うんだがな)

それはそう思うだけで、母さんには指摘しないでおく。
指摘して絶叫されながら、泣き出されても怖いから……。

母さんは普段見られない真面目な表情でピツと背筋を伸ばし、車の運転をしている。

どこことなく微笑を刻んでしまう光景だが、

「も、前の車邪魔ね、体当たりして崖に突き落しちゃうかしら
ねえ、どう思う陸ちゃん？」

五分に一回の頻度で黒い台詞を吐くから堪らない。

「ダメだと思えます！ お願いですからそんな残虐行動しないで、
安全運転して下さい。後生ですから。流れ星に祈ってます」

シートベルトを、長年離れて暮らしていた恋人のようにしっかり

と抱き締めて懇願する。

「ふふふゝもう陸ちゃんたらヤダなあ……冗談よゝ」

「ならいいんデスけど……」

安堵のため息を――

「でも……これがワゴンじゃなくて、トラックなら……殺ってたかもゝ」

――凍りつかせる！

「……………嘘だよね（滝汗）」

「うふふふふふ」

「……………」

忘れましょう。忘れましょ。

嫌な事はぜーんぶ、青い空が吸い込んでくれるさ！……………きつと。

それよりも……チラリと尾行する探偵のようにさりげなくフロントミラーを見上げる。

最後尾席は紫苑と海が座っていて、何やらぼそぼそと声を下げて話をしている。

（…………）

何だろう？ 気になるな……。

べ、別に紫苑が海と仲良くしてるから気になるとか、そう言うんじゃないぞ！

これは……その……何だ……そう！ 純然たる好奇心が青年の主張をだな……

（…………誰に言いわけしてるんだよ、俺は？）

わきあがってきたツンデレ感情を脇に置いておく。

けれど、気になるのは事実なので、耳をすませてみることにする。「だからあ、この露出度の高い白のビキニで陸の理性をクリアとさせてだな」

「うむ、うむ」

（ちよ、ちよっと待ってくれ。いきなり何の話をしているんだ？）

耳を澄ませた瞬間、飛び込んで来たいきなりの内容にギョツとしてしまい、思わず後ろを振り向きそうになる。

「デパートで買ったこのサンオイルを、恥じらいながら……恥じらいながらだぞ？ 塗って」と頼むんだ！ あんまり露骨に媚びすぎてもダメだよ、紫苑ちゃん。露骨に媚びられるとだいたいのヤツは冷めちゃうから。特に陸は真面目だからな、それが顕著なんだよ」

「うむ、うむ！ しかと心得た」

（心得るなよ！？ 頼むからッ！）

「うまくサンオイルを塗らせたら、さり気なく陸の股間に注目だ！
ここで、●×ていたら勝負はもらったね！ 陸は紫苑ちゃんにぞっこんだね！」

「な、なるほど……（ゴクリ）」

あ、あまりの内容に泣きそうになる。

「しかし、ここで陸の股間が●×ていない。もしくはあまり反応を示さなかったら……」

「示さなかったら！？ ど、どうするのだ、海殿！？」

焦りを含んだ紫苑の声。

頼む。何に頼むかどうか分からないけど、とにかく頼む。ホント頼む！

「ふ・ふ・ふ。この平成のラヴ救世主^{メシア}海に任せなッ！」

（誰だよ！？）

振り向きそうになるのを堪え、心の中で海の胸倉を掴んで恫喝する。

「作戦名その名も——《海でドッキリ急接近》——！」

「う……《海でドッキリ急接近》！？」

も、もはや言葉もでねえ。心の中で地面に膝をつく。

「そう。これはね……一緒に泳ごうって陸を誘ってたね」

「うむ、うむ！ で？」

「そこでだね、波の動きに転じて、陸の身体にあくまで波のせいと言っことにして……」

「して!？」

「紫苑ちゃんのナイスな胸をだな………密着させるのだ!」

何か……俺目の前暗くなってるんですけど………何で? お迎え?

お迎えですか?

いや、分かってさ。分かっていると。

ただ逃避したくなる時ってあるよね? たえば今とか。そう今とか。

「密着……!」

紫苑の上擦った声が遠くで聞こえます。

「サンオイルの段階で陸の理性は破綻寸前! その状態に密着攻撃!」

「お、おお……高等テクニク……ッ!」

(か、勘弁してくれ)

力なく頭をたれる。

何で今朝、俺は海なんていう選択したんだろうか?

少なくとも背後で話すような展開になるとわかっていれば、山にしたものを……

いやいや、それならば水族館やら、色々あったというのに、どうしてよりによってこんな危険地帯に?

「そうだ! その後、わざと……」

何かを思いついた紫苑の声だが、さらに声を潜められて、聞こえない。

(な、何なんだ?)

「バ、バツチリだよ、紫苑ちゃん!」

感極まったという海の声に、さらに疑問と好奇心を強く感じる。

「それで、この日の夜に、陸の部屋に訪ねたら」

「む、訪ねたら?」

(とりあえず鍵をかけておこう。それも、強力な南京錠だ。指紋と

網膜認証機能もつけよう)

そう決意する俺。

「陸のハートはゲットだぜ!」

「陸のハートをゲットチュー……!!」

「そう、ゲットチューだ」

(俺はポケモンじゃない!!)

くそ、二人の思い通りになるもんか! 絶対に捕まらないぞ!

俺は出現確率が低いんだ!

今夜は必死の抵抗を決意する。

そう——男とは抵抗することとみつけたり!

「それは……いいな」

怪しい二人の笑い声。

それがホラーの亡霊の哄笑のように鼓膜にへばりついてくる。思わず耳を塞ぐ。

「ふ〜ふふふふ」

「ふ〜ふふふふ」

体と心が震える。

原始の感情——恐怖に囚われた体が悲鳴を上げてるかのよう
に震える。

それは決して、車内のクーラーのせいではない。

海が……近づいてきた。

欲望、策略、そして恐怖を孕み、青い海原が俺を迎えてくれる。

紫苑と海の話聞いて、良かったのか悪かったのか……おそらく
後者だろう……。

第十三章 〈海でドッキリ急接近〉 始動編

天堂陸

《

俺と海は海水浴場の着替え場を利用するのはめんどくさいので、下に水着を穿いてきた。

したがって、紫苑と母さんの女性陣は着替えに、俺たち男性陣は場所取りに砂浜へと急いだ。

俺はウォータークーラーと食物などが入ったバッグを持ち、海はパラソルや浮き輪、そして海お気に入り《コバンザメ君G P O 1》と命名された浮き袋の一種を担いでいる。

すでに砂浜は、先に海水浴に来た人々のパラソルで埋まっている。なんとかちやうど良い場所を確保すると、他の人に取られないうちにさつさとパラソルを砂場に打ち込む作業を開始する。

クーラーのきいた車内とは違い、砂浜は焼けるようなという表現がふさわしい暑さだ。流れ落ちる汗がTシャツに吸い取られてゆく。

「ふー、暑いな……」

青く輝く海へと視線を移す。

刹那、海の匂いを含んだ風が頬をかすめて吹き抜けていく。

「フフフ……」

目を細めて視線を海に向けていた俺は、海の不気味な笑い声に動きを止める。

「……何だよ？ その闇の属性にこれでもかーってくらいに入り込んだ笑いは？」

「フ、紫苑ちゃんの水着は凄いぞ。なにせこの俺が選んだんだからな！」

踏ん反り返る海。

両腕を組み、瞳は自信満々の光を放っている。

「それなんだが……白いビキ二つてのは——どう言うことだ？」

「ん？ なんだ陸、聞こえてたのか？」

そりゃ、あれだけでかい声を出せばな。

咎めるような俺の視線などどこふく風という具合に、海は高笑いをして肩をバシバシ叩いてくる。……関西のオバさんか、おのれは？

「大丈夫、大丈夫！ 悩殺悩殺！ 股間が暴れん坊將軍さ！ 今日こそ陸は男子から漢だな！」

何でこんなに不安になる台詞をはくんだ、コイツは？

そもそもなんつー下品なことを平気で言えるんだらうか？

本当に俺の血族か？

なまじ一卵性双生児で顔はもちろん海と似ている。雰囲気や声までそっくりなので、まるで海が言っていることが、自分が喋っているような気になる。

「やれやれだな……」

これからおそらく絶対確実に待ち受けるであろう展開に頭を抱えた……。

《綾崎紫苑》

「全く、やれやれだな」

先程のナンパの嵐にため息を吐く。

「まあ、仕方ないさ。紫苑ちゃん可愛いし、スタイルもいいから、男たちはここぞとばかりにナンパしてくるさ」

海殿はそう言うが、陸以外の男たちに言い寄られても全然意味がない。

というかうざいだけだ。

「まあ、ナンパの件はさて置き……頑張れよ、紫苑ちゃん！」

「うむ。全力で陸を落とすッ！」

右拳を握り締め、雄大な青空を仰ぎ見る！

「この青空に私は宣言する。陸は私のモノだッ！」

「勝手に人を私物化するんじゃありません」

ナンパ男達に手を振っている空音殿を引きずって、陸は半眼で呟く。

「む、陸」

ちなみに私に群がっていたナンパ男たちを追い払ったのは陸だ。
「おつかれ」

陸のほうを振り向くと、ほぼ同時に海殿が、陸にねぎらいをかけに行く。

「しかし、母さんもやるな。何人からナンパされたの？」

「テヘ♪ 六人よ」

「おお、六人切りか……」

海殿は感嘆のため息を吐き出す。

陸は何かに耐えるかのような、そんな表情をしていた。

しかし顔はそっくりだが、どこまでも対照的な二人でござるなあ

……

「もちろん、ケータイの番号もゲットよ」

「おお、抜かりなし」

海殿と空音殿は、そろって右の親指をビシッと立てる。

次の瞬間！

「あんた人妻やろー！ーッ！？」

陸のパパ殿に代わって、陸は空音殿につっこみを入れる。

「あ……ああ、うん。うんうん。そうだったわね」

「そ、そうだったわね？ な、何や、それは！？ 忘れてたってことか！？」

今ようやく己が人妻だということに気が付いた素振りを見せる空音殿に、陸は半泣きつつこみを入れる。

「大丈夫、大丈夫。私、啓太さんの事ラヴだから」

右の親指を再度ビシッと立てる空音殿に、陸は絶叫する。

「父さんの名は、大地だー！ーッ！！ そもそも啓太って、母さんがナンパされた時に貰ったケータイの持ち主の名前やんけーッ！？」

「……テヘ」

「……何でかな？ 俺、涙が出てくるよ……」

陸は諦めたかのように——いや、諦めてパラソルの方に空音殿達と一緒に戻って来る。

つまり、私のいる所へやってくるとのことだ。

うまくやりなよと、海殿が陸に分らないようにサインを送ってくる。

（よし！ 女は度胸でござる！）

私は腹を決めると、過去グラビア雑誌とやらで見たモデルのポーズを脳裏に思い浮かべる。水着姿の女性モデルのポーズ——通称女豹のポーズを真似て、陸に聞いてみる。

「どうだ陸？ ……この水着……似合うか？」

《天堂陸》

正直、ピンチだった。いや大ピンチ。

巨大隕石が地球に落ちると分かった時に浮かべる天文学者の如しだ。

だいたいにしても、俺の想像よりも遥かに露出度が——凄まじい。反則だ。イエローカードどころの話ではない。真っ赤だ。血

まみれだ。ブラッディカードだ。

紫苑の着ている白のビキニはほとんど胸と股間の重要な部分しか隠していない。

動くだけで、これヤバすぎないか？

何と言うか、ウルトラマンで言うなら胸のカラータイマーが激しくピコンピコン鳴っている状態だ。

「どうなのだ？ ムラムラくるか？」

紫苑の問い掛けるような視線に、俺は追い詰められたかのように口を開く。

「ああ、その………ちょ、ちょっと露出度高いけど………」

「終わったああああ………ツッ！」

いいんじゃないかと言おうとするよりも早く、紫苑の絶望的な嘆きに遮られる。

まるで紫苑は敗戦した事実を、天皇陛下から聞かされた日本国民のようにガツクリと砂浜に膝をつく。

あまりの紫苑の憔悴ぶりにかなり動揺してしまう。

「いや、違っつて！ 似合ってるよ！ ホント、マジだっつて！」

慌ててそう紫苑に言うものの、

「……でも陸はこの水着、露出度高くて気に入らないんだろう？」

紫苑は自虐的な笑みを浮かべる。

「フ……こんな薄布を纏う淫乱女など、糞尿まみれの公衆便所に落ちたトイレットパーパー並みに、どうでもいいと言うことか。フフ

……涙が零れてきやがる」

「そ、それは確かにどうでもいいが」

（なんでやねえええええん！？）

俺は俺で心で絶叫している。ホント、俺の胸が張り裂けそうだ！！

「陸………」

「陸ちゃん………」

海と母さんが、罪悪感を煽る口調と声音で俺の名を呼ぶ。

「な、なんですか……！」

そもそも、俺はそんな紫苑を傷つけるようなことをしたのか！？

（だが、とりあえずフオローだ！）

即実行ーッ！

「違うんだ、紫苑！」

「……何がだ？」

虚ろな視線を向ける紫苑に必死で説得する。

「さつきは、そのちよつと恥ずかっただけなんだ。その露出度高いからさ……」

そこで、俺は言葉を切ると……

「だから……その水着、似合ってる。……可愛いと思うよ」

おそらく赤くなっている頬を気がつかないふりをする。頭の上にまで湧き上がってくる羞恥をなんとか抑え込むことに成功した。

「……本当か？」

「ああ……」

視線を落しながらも、しっかりと答える。

「では……キスしたいくらい可愛いかな？」

「ハアッ!？」

強烈で突然な紫苑の問いに俺の声は裏返る。

紫苑は俺のリアクションに半眼を持って応じると、ため息を吐き出す。

「やっぱり口からでまかせということか……。あーあ、私は今とても三角座りをしながら、ドナドナを歌いたい気分でごさる」

（俺もだよー!）

「陸……」

「陸ちゃん……」

海と母さんが、罪悪感を煽る口調と声音で、再度俺の名を呼ぶ。ちくしょー、てやんでい、バーローッ！（泣）

その時紫苑の方から何か、カチリと音がして、俺は紫苑を見る。

「ドナドナ、ドナ、ドナ」

人でも呪えそうな紫苑の歌声に俺は、あえなく撃沈。

「キスしたいくらい、可愛いよッ！」

チラリと紫苑は探るような視線を俺に向ける。

こ、これでやっと俺は自由だ！ 大空を飛び回る鳥なんだ！

「では——押し倒したいくらい……可愛いということだな？」
思考が止められる。心臓すらも……

「陸……」

「陸ちゃん……」

海と母さんが、羞恥心を破壊する口調と声音で、俺を脅迫する。
今ここで、引けばさらに状態は悪化することまちがいなした。
かといって、進んでも目の前には破滅しかない。

悲しいが、それが現実さ……

「押し倒したいよーッ！」

「誰をだ？」

「うぐっ……！」

冷静な紫苑の問いかけに歯噛みする。

もう売り言葉に買い言葉だ。とことんやったら——！
両目を閉じながら、自身の最大音量で叫ぶ。

「紫苑のこと、押し倒したいくらいに可愛いよッ！——！」

カチリ。

さつきも聞こえた何かスイッチ音に目を開けると——そこに
はiPhoneで俺のシャウトを録音している紫苑の姿があった。

その光景を見て、俺は慄然を顔面に走らせる。

悪魔と契約しちゃった時ってこんな気分？

「よし！ 既成事実二つゲットでござるッ！」

iPhoneを頬に寄せ、大切そうに抱える紫苑を見てかすれ声
で呟く。

「何か……俺、またまた騙されてないか？」

「いや、気のせいだ。どうでもいいことを考えている時くらいどうでもいいぞ」

「それは確かにどうでもいいが……」

釈然とせずに首を捻る。

(うつ……仕方ないか……)

ここで変につつこんでも、無駄にダルくなるだけだからな……
そう自分を納得させる。

そうでもないと生きていけない。こんな嘘と裏切りと偽りで塗り固められた世界で生きていくにはさ……

「そんなことよりも……」

紫苑は手元のバックをゴソゴソとあさる。

つか、《そんなこと》で片付けられてしまうことで、俺はあんなに慌てていたのか！？

疲労感が両肩にのしかかってきた。

「さあ陸、サンオイルを塗りたくってくれ！」

デパートで買ったらしいサンオイルを突き出して、紫苑は脅迫に近い懇願してくる。

だが海が言っていた色気とやはらは、どうも紫苑は忘れていらいな。

「紫苑ちゃん、色気は！？」

怒り半分悲しさ半分の海の声に、紫苑はビクリと雷にうたれた時の如く、体を硬直させる。表情は『抜かったーッ！？』と叫んでる時にそっくりだ。

(つか、年頃の娘が目を見開きながら、大口を空けたまま硬直するなよ……)

けど、このまま放っておくわけにもいかないの、紫苑の名を呼んでみる。

「紫苑？」

「あ、う……ぬっ？」

うめき声を上げて、なんとかしようと思死に考えている紫苑を見ていると、つい笑みを

こぼしてしまう。

強引で直情的。決めたら迷わないその行動力。そんな彼女だから、こういう時に放っておけない。

紫苑の持つているサンオイルを手取る。

「俺でよかったら、塗ってやるよ」

驚いた顔をする紫苑に、照れくさいけどそう言った。

第一四章 《海でドッキリ急接近》 乱入編

海上のクルーザー

《アレ

ックス・バグネット》

「イ〜〜ツ……イイイイエロオオオーモンキイイイイイイイ
イーーーーーツツ!?」

サマーなブルースカイに、ボクの怒美声が吸い込まれてゆく。

完全欠落生物リクは、あるうことかシオンにあんなハレンチでセ
クシーの上に、羞恥心煽りまくりのとんでもない薄布のようなナイ
スを着せよってええええ〜!??

「おのれ、あの庶民が……！！！」

次に下等生物のリクは、ボクのフィアンセ・シオンの身体にこと
もあるうか、サンオイルを塗っている！？ 塗りしだしている！

おそらく嫌がるシオンの身体を無理矢理に、無能な庶民どもに見
せつけるかのように、蹂躪しているに違いない！ クソツ、三流の
AV男優が！

なんという下劣で羨ましい男だ！ なんという卑劣で最高な男だ
！ なんという破廉恥でナイスな男だ！

あまりの驚きに南斗水鳥拳だツ！
そもそも、そもそもだ！

「このボクでさえ、シオンの体に触れたことないのに……ッ！
？」

何というヤツだ！

ボクですらキスは愚かハグもまだ。シオンの手すら握ったことな
いどころか、半径五m以内に入らせてもらったことがないというの
にッ！

それなのに、あのイエローモンキー・ボツキー・ポンキッキーと
きたら！

ゆ、許さん。許せるわけがない！

バラバラに刻んで豚のエサだ！

（いやいや！ そんなんじゃ手ぬるいッ！）

凄絶な感情を美しいこの美貌に浮き上がらせる。

「お尻ペンペンだツ！ ペンペンしてやるツ！」

これはボクのお父様が、お父様の大切にしていた万年筆を壊して
しまった時に、ボクにした最も重いお仕置きの一つだ。

あの時の痛かったこと……！ 今でも思い出せば、涙が出てくる。

ああッ、お尻が……ッ、お尻が痛いよ、パパ！

おっと、懐かしい幻痛にお尻を震わせている場合じゃない。

今は何よりも早くシオンの元に駆けつけねば！

「エドワード、西の砂浜に全速前進だ！」

「かしこまりました、坊ちやま」

《天堂陸》

サンオイルを塗り終わった俺は、早まったことをしたなと、今更ながら疲労に濡れたため息を零す。

（なにせ紫苑のやつ……人の股間を凝視するんだもんな）

今、紫苑はかなり不満と不安の表情で股間を見続けてる……凝視していると言っても差し支えはない。勘弁してくれ……。

「おのれ……やはりここは《海でドッキリ急接近》しかないか……ッ」

ただならぬ熱情に支えられた紫苑の独白には剣呑すぎる眩きを、決つて聞き逃さない。

「陸、海に入るぞ！ 押し付けてやるぞ！」

内心の感情ただ漏れに紫苑は叫ぶと、今にも海に引き摺りこむ勢いで俺の身体を束縛する！？

（あああー！？ ヤバい、浮気現場を見つけられた夫の如くヤバい！？）

「さあ……ゆこう？」

「ちよ、ちよつと待て！ じゅ、準備運動をしてからだ！」

瞳に狂おしいものを潜ませる紫苑に本気で怯え、何とか時間稼ぎをしようと虚しい努力する。

たとえ無駄とわかっていても、俺は生きる努力を放棄しないッ！

「む、確かに準備運動は大切だな。仕方ないさっさと終わらせるか

……」

紫苑は激情をなんとか自制してくれると、手早く準備運動を始めた。

紫苑が準備運動をし始めて、俺はすぐに後悔した。

なぜかというと――

紫苑はかなり真面目に準備運動をしている。

それこそ汗をうつすらとかくくらいだ。

その……真面目にやることはいいことなんだが、いかんせん紫苑の露出度の多い水着と、そのスタイルの良さが原因だ！

野郎ども、想像してくれ。

半端じゃない美少女が露出度の高い水着で準備運動する様子は、紫苑自身が望もうと望ままいかわらず、艶めかしい媚態を演じるようなものだ。グラビアアイドルのイメージ画像が目の前で展開中なのだ。

しかも、砂浜にいる男たちのほとんどが、紫苑の身体を感嘆の声を上げながら食い入るように見入っている！？

揺れる胸の動きの顔が上下してますよ、皆様方ッ！

それもオジサンやら大学生、俺と一緒に高校生やら……が、我慢できるかッ！

「馬鹿！ 紫苑、真面目にやりすぎだ！」

「む……フン！ ふっ……フン！ ん？ ……何がだ？」

無防備に胸筋の運動をしている紫苑に我慢できず、

「乳イ揺れとんじゃああああああー、アホーッ！？」

真っ赤になりながらつつこみを入れる！

そこで紫苑は周りの男たちの劣情溢れた視姦に気がつき、ふと何事か考える素振りを見せる。

「つか恥ずかしいんかいッ!？」

むしろ俺のほうが恥ずかしいわッ! 羞恥で身悶えするわッ! と、紫苑は俺の顔を下から覗き込むように見ると……

「……悩殺されたか?」

そう——訊いてきた。

俺の視界には、ため息が漏れるほど整った紫苑のアップの顔と……

……む、胸の谷間が……

「……ッッ!？ うわああああああああッ!」

即行で紫苑に背を向けて、海へと疾走する!

股間がどうなってるなんて、知りたくもない!

知らない! 知らないよッ! 俺はいつまでも純粹無垢な子供でいたいんだ!

ピーターパンシンドロームに駆られた俺は海に向って、やや前屈みに全力疾走する!

「むう!？ 待つのだッ! 陸どこへ行く!」

追って来る紫苑の気配を背中を感じつつ、俺は海に飛び込む!

「逃すか!」

すぐさま獲物を追うヒョウが如く、海に飛び込んでくる紫苑の気配と波音。

「フフフ! 陸、逃げられると思うなよ! この両生類式緑生物泳法で紫苑ちゃんの虜にしてくれるわ!」

「のわああああああああッ!？」

すぐそこまで迫り来る紫苑に悲鳴を上げる。

こ、この状態で紫苑にワケのわからん作戦で抱きつかれたら!？ 俺は!？

顔を引き攣らせる俺!

確信の笑みを浮かべる紫苑!

（捕まる！？）

と、その瞬間、紫苑がゆつくりと海に沈んでゆく……

「は？」

戸惑いに振りかえる俺とは違い、紫苑は悲鳴だ。

「ぐああああああーッ！？」　ゲバゲボゴバガボ、あ、足がつたでござるうううッ！　お、おぼれるうううッ！？」

どうやら紫苑は、俺を捕まえるその寸前で足が吊ったらしい。ま、マジかよッ！

「な、なんでやねん！？　お前ちゃんと準備運動したやろーッ！」
気が付けば、安堵を覚えるより先につっこんでいた。

い、嫌すぎる。こんな時でも反応する自身のつっこみの本能……
これが関西人の血に流れる業というものか？

けれどそんなつっこみをしてる場合ではないと気が付いた俺は、
すぐさま紫苑に泳ぎ寄り、紫苑を抱えて砂浜まで上がる。

「ぐ……ゴホッゴホッ……」

俺も泳げるが、人並みに泳げる程度なので、紫苑を助ける際になりの海水を飲んでしまった。

（まあ……紫苑よりはマシだけども……）

「ううう……げ、ゲロゲロでござるう……」

気分悪そうな表情の紫苑を、お姫様抱っこをして、海と母さんのいるパラソルへ戻る。

「……陸う」

しんどそうな口調で、息も絶え絶えに語りかけてきた紫苑に注意を向ける。

「どうした？」

苦しいのかな？　と不安になる。
が、

「これで……陸の貸し一つだな……」

……

……

「………は？」

「そ、それは俺のセリフだ！」

想像していることは全く違うことを言われ、今更だが、頭が痛くなってくる。

「ふふふ、な、ないすうつつ、こみだあ………うぐふつ！？」

しんどい思いまでしてボケるところか！？

なんていうか恩を仇で返された時は、こんな気分なのだろうか？
というかまさに、今それが！

（まあ、ようやく一難去ったかな……）

そう安堵のため息を吐き出した瞬間！

「キアアアアアアアアアアアアアア、な、何！？」

「うををををををおお！？」

「突っ込んでくるぞ！？」

人々の悲鳴が轟き、驚いて後ろを振り向く。

そして顎が外れそうなほど口を開ける。

クルーザーが突っ込んできていた！

海を真つ二つに割るが如く凄まじいスピード。跳ね飛ぶ水飛沫はまるで弾丸。呆けてる場合じゃないぞ！ 真つ直ぐに俺たちのほうにに向かってきやがるではありませんか！？

「な、何だあああッ！？」

俺の疑問に答えるかのように、クルーザーの甲板の上にいる金髪の青年が拡張器越しに答えてくる。

「私のゴージャス・ハイパー・スイート・ハニー・シオンからその汚らしい手を離れたまえ！ その無品性の下々の一般ピープル以下のイエローモンキー・蛆虫太郎・豚のエサがッ！ すぐさま離さないと貴様ら下種で下衆な下郎どものファミリーは、そろいもそろって、ファツキンだ！ ジャーッブめ！ 判りやすく言うなら、

お尻ペンペンだーッ！」

ハンサムな容貌を、妻を取られた嫉妬深い夫のように歪めに歪めまくって、金髪の青年は怨嗟の咆哮をあげる。

……半径二〇〇メートル以内の者なら誰でも聞こえそうな大音量。

あまつさえクーラーは砂浜に突っこんできて、優に一〇メートルくらい砂浜に暴虐の跡を残す！

「し、知り合いか紫苑？」

できれば人違いで会って欲しいと痛切に思ったが、

「……いや。あいつは私の……その………婚約者だ」

素晴らしき、お約束。あ、やっぱり知り合いなのデスね。

俺は眩暈を感じ………停止する。

無然としながらも、紫苑の台詞にある一つの単語に心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われる。

スー……と。

真夏なのに暑さを感じず、心が酷く無感動になる。

いや———心は焼け付くくらい熱いの、頭は冷水でも浴びたかのように冷静だ。

嫌なくらい………冷静だ………

紫苑は言った………

『……いや。あいつは私の……その………《婚約者》だ』

と。

そしてなにかが………俺の中で悲鳴を上げた………

第十五章 変態光臨——夜会への誘い

綾崎紫苑

《

（何と言うことだ……！！）

今の気分を例えるなら、折れたつまようじ片手にフランスの外人部隊と戦うようなものだ。とんでもない話だ。邪気暴虐大不況だ。失われた十年、就職氷河期だ！ 自宅待機に内定取り消しは酷すぎるでござろう！？

そもそもアメリカにいるこやつが何故この日本に来たのだ？

「アッハハハハハ！ グレート・サンダー・ミラクル・ハニー・シオン元気だったかい？ もうキミのダイヤに匹敵する涙で枕をぬらす必要はないよ。このアレエックスが来たからには、ボクの高貴で……デエン！ ジャラスな、舌でナメナメナメしてあげるからね！」
（いかん。吐き気がしてきそうだ……）

一言で言うなら、あの金髪白スーツ男、アレックス・バグネットは——変態だ！

言動はキモい、キショい、デンジャラスの腐敗しきって悪臭を放

つ三本柱に支えられ、聴いていれば様々な身体障害を惹き起こすほどだ。

そもそもセリフの下になぜあれほど意味のない単語をつけるのだ？
まあ、あのアレ公にも良いところはある。

(……………)

いや、ないな。(断言)

しいていうなら……………うーん、そうだな金持ちだな。それから……まあ、そんなもんな。

(と言うか…………その程度だ)

それよりもプラスがあってもマイナス面の方が地球規模的に大きいので、異性の一人として、アレ公にはあまりと言うか全然魅力を感じない。

十点満点でマイナス十点だ。

そもそも私はアレ公にアーンなことやコーンことをされるくらいなら、武士として潔く死を選ぶ。

「フ…………久しぶりに見るキミの顔は、思わずコサックダンスを踊ってしまくらいキューティフルだよ！ コサックコサック、コサアアーック！ そして、その美貌は美の女神をひれ伏せさせ、天空の城を羽ばたく天使の如く優美で繊細で小悪魔的で、その上！ ダイナミックでセクシーなその水着はボクの気高く尊い欲望にガソリンを流し込む如くさ！ 大丈夫、ドント、ウォーリィーを探せ！ エンジン^アは燃え燃えバーニングファイアーさ！ 全く困った子猫ちゃんだ」このアレエックスをこゝんなにも、燃え上がらせるなんて……………」

放っておけば一日中やってそうなクサイを通り越して、アブナイ台詞を一度切ると、

「だ・か・ら…………そのクソツタレのビチ糞野郎プラスアルファふんバエ野郎から離れて、このアレエックスの胸に勇氣と愛を込めて飛び込んでおいで」

「嫌だ。単純に陸のほうが良い」

私は陸の胸にグリグリと顔を押し付ける。

すると、アレ公の顔が般若の如く歪む。

「お、おい……いいのか？　か、彼……青筋顔面に走ってるぞ！？」

「陸……そんなのはな、どうでもいいんだぞ。どれくらいかと言えば今の日本の総理大臣くらいどうでもいいんだ」

心配そうな表情の陸に、諭すように真実を教えてやる。

「それは肯定しちやいけないところだけど……確かにどうでもいいけどさ……」

「何だとその愚民！？　そういう政治的無関心がジャップの悪いところだろう！」

陸の納得の声にアレ公は、怒声を砂浜に響かせる。

が、思い直したようにアレ公は尊大な笑みを浮かべる。

「まあよかろう！　無知なキミに、ボクとキミとの差について説くと語ってやろう」

アレ公は胸元から宝石のはめ込まれたクシを取り出すと、その金髪にクシをキザったらしくあてる。成金かつナルシストめ。

「その品格ゼロ。腐ったどてカボチャ少年リクを雑種の汚らしい犬コロと言っならば、ボクは血統書つきの高貴で、ミラクルなゴオオオールデエエン・レトリバーさ！」

アレ公は大空に両腕を広げて、イカれた演説を続ける。

しかし、そんなゴールデン・レトリバー、私なら秒決で保健所行き決定だ。

「その教養クソでダメの五乗の少年リクをばっちい雑草とするなら、ボクは光が溢れんばかりのゴージャスでアグレッシブな紅いバラさ！」

アレ公は胸元から紅いバラを取り出すと、それを口元に咥え、私にウインクを送ってくるアレ公の顔ときたら……何というアホ面だ。創世記始まって以来の気狂いなのかもしれん。

「だいたい、バラと言うよりもヘドロまみれの毒の花だろうに……」
「その腰抜けの敵前逃亡は当たり前、の●太くんにも劣るだらし

ない計100%少年リクを、敵の地雷原でウロウロしている非武装の三等兵とするなら、ボクは帝国陸軍士官学校をトップで合格し、トップで卒業した超エリート士官ナンバワーン軍人さ！　いうならサ・ヤ人の王子だ」

そう言つとアレ公はクルーザーの甲板で、クルクルと身体をスピンさせる。

全くアレ公のような軍人がいて、その軍人の上官が私なら、世の中の平和と秩序、そして、私の個人的恋愛野望のために即、銃殺だな。あと私がフリーザなら惑星ベジータをベジータごと消す。

だいたい、このアレ公のせいで、《海でドッキリ急接近》が台無しではないか！

そうわざと溺れて――実際に溺れたが――人工呼吸を迫ると言う乙女の必恋技が、野望のときめきが、何よりもラブがおじやんではないか！？

（ぬううう、だんだんムカついてきたでござるな）

アレ公を呪う目つきで睨む。

「ハッハッハッ、そんな熱視線を送るなんて……たまらなくなつたのかい、シオゥン？」

気ツ色悪い嬌声を放ち、とんでもない、それこそ超電磁的・誤解をするアレ公。

「やかましい！　貴様は紫苑ちゃんの《心の内心点》マイナス千だツ！」

「サ、サウザント！？　Ohッ、why!？」

名画《ムンクの叫び》そっくりの表情のアレ公に、私はさらにコンボを叩き込む！　乙女とは躊躇しないものなのだ。

「ええい、オマケだ！　マイナス万だツ！　持ってけ、泥棒ー！」

「アウチッ！？　NOね、マイナスNO　thank　youね！」

アレ公は散弾銃を至近距離でくらったかのような衝撃を心に受け、激しく首を横に振る。

（今こそ、勝機！）

「だいたいお主は駄目だ！ 嫌がる女子に無理矢理迫る時点で、漢として最低最悪最嫌！」

ジジジジジ……………！！

（むわぁ！？　へ、変態でござる〜！　本物の、正真正銘の、生粋の、ナマの変態だ！？）

「その扉開けてどないするねん！」

怯える私にかしずく騎士のように、陸はつつこみソードで、アレ公を切る！

しかしアレ公は余裕の笑みを見せ、

「フ……………早合点するな愚民Boy……………これを見る！」

アレ公はズボンのチャックの中から一枚のカードを取り出す。指先でそれを掴むと、ピンと弾くように投げてきた。

「な、何だ？」

手の中へと落ちてきたカードへと視線を落とす陸。

おのれ、後でちゃんと陸に手を洗わせないと……

そして、私は陸の手元にあるカードに視線を走らせる。

「む……………これは……………」

それは招待状。

アレ公の所有する日本の別荘で開く宴の招待状だ。

なぜに変態が主役の宴に出席しないといけないのか、理解に苦しむ。

当然断ろうと口を開くが……

「キミのご家族の方も当然大出席さ！」

口から言葉を紡ごうとした瞬間、それは止まる。

「ご家族……………だと？」

「フ、その通さ。キミのご両親も当然、大出席さ！」

バラを胸元から幾本も取り出し、アレ公はそれを四方八方に散らす。

「……………お爺様はいらっしゃるのか？」

探るような私の問いかけに、アレ公はペラペラと喋り始める。

「ん？　もちろんさ。シオンのことが気になるとおっしゃっていた

からね。きつと、ボクたちの関係がどこまでいつているか、気にな
っておられるんだと思うよ。フフーン！」

それは違う。

そもそもアレ公と私の関係は無関係だ。

決して、私と陸のような《未来は必ず》恋人関係ではない。

（私のことが気になるとおっしゃっていただと……）

すでに私のことがバレている。

しかし、それならばなぜすぐに連れ戻さない？

お爺様ならそれが可能なはずだ。

どうする？ お婆様もいらっしやるとなると……いや、これはチ
ヤンスかもしれない。

キツと鋭い視線で陸の顔を見上げる。

ちなみに、今もまだ私は陸にお姫様抱っこをしてもらっている。

……至福でござる。

とと。顔を緩めている場合ではない。きりつとした表情を作る。

「きりつ」

「な、何だ紫苑？」

私の視線に戸惑う陸。

フ、なんと胸が締めつけられるような仕種だ、ジュルリ。

変態アレ公の宴には、私の家族が出席する。その場にはおそらく
私の親族も出席するに違いない。とすれば必然、お爺様も……。

お爺様からアレ公の婚約を言い渡された時の言葉が思い出される。

『紫苑、バグネット家の嫡男であるアレックス・バグネットと婚約
を結べ』

『な、そんな突然すぎます！ 私には……！』

『これは綾崎グループの総帥としての言葉だ。異論は認めん』
『くっ……』

こんな決定。突然押しつけられた運命——納得できぬ！

ピンチはチャンス！

そう、これは願ってもないチャンスだ。

アレ公の披く宴の場で、陸と私が恋人という関係を見せれば、きっとお爺様も考え直してくれるに違いない。

「よし！ その宴に出席しよう」

「ヒヤッホー……！」

アレ公はアホのように、クーラーの甲板の上で、足を激しく踏み鳴らし、踊り狂う。

「ハアッハハハハハ！ ざまあみやがれ、ジャップ！ これぞラヴの成せる技！ そう、シオンはこのアレエックス主催のナイトパーティーに出席するのさ！ 庶民であるキミには想像もできないほど、豪華で、高貴で、スペシャルなパーティーにね！ 出席したかい？ ダメダメ、絶対ダメ！ 出席なんてさせてあげないよ！ せいぜいキミは近所のケーキショップで、卑しい庶民の財布の中身と相談でもしながらケーキでも買い、年の数だけロウソクを立て、独り寂しく、侘しく、悲しく、切なく、やりきれなくロウソクの火を吹き消してるがいいさ、ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

加虐的で歪んだ黒い笑みを顔に刻みながらアレ公は哄笑する。

そんな歪んだ幸福絶頂にあるアレ公に気が進まないが話しかける。

「ただし、条件がある」

「ん、何だいシオン？ 何でも言うてごらん」

「陸をその宴へ出席させてくれ」

ビシリッ！

破滅的な異音をたてて、アレ公の顔が破綻するが知ったことではない。

目は極限まで見開き、鼻から出る息は酷く荒い。口はギリギリと歯ぎしりをしていて、髪は逆立っている。両肩は怒りのためかブルブルと寒さに震えるかのように、戦慄いていた。

その様子を見てはてなと首を傾げる。

「ん??……駄目か?」

「ダメ! 嫌よ嫌よは、嫌って意味だ! must notツ!!
そんな愚民はボクのパーティーに相応しくないを、ぶつちぎりで
一番さ! しいて言うなら、金の中に一つだけ汚らしい銅が入って
いるようなもんさ!」

唾を飛ばす勢いで、アレ公は私の条件を却下する。

むう……なんたることだ! どんな手を使っても、陸を宴に出席
させねば!

何かアレ公を説得できるものがないかどうか、周りを見回し、そ
れを見つける!

「空音殿ツ、そのウサギ殿のぬいぐるみをかしてくれぬかツ!」
海殿と一緒に砂の城を作っている空音殿の手の中にあるウサギ殿
のぬいぐるみを指差して、尋ねる。

「え、ウサぴよんを? いいわよ」

空音殿は笑顔で快く了承してくれると、幼児くらいの頭の大きさが
あるウサぴよん殿の首をガシツとワイルドな仕種で掴むと、ブー
メランよろしく放り投げてくる。

ウサぴよん殿はきりもみしながら大空を舞い、私はオオワシが獲
物を獲得する仕草で、ウサぴよん殿の首をジャキューンと掴む。

「お、おい紫苑。別に俺は……」

「ふ。この紫苑ちゃんとウサぴよん殿に任せておけ」

何か言いつのる陸の言葉を遮り、アレ公の方を向く。

「ノン、ノン。そんなラビット如きに、ボクを説得できると……」
構わずウサぴよん殿の首を掴み、地面に引きずるようにライオン
の如く雄々しく砂場を闊歩。アレ公に近づく。

ある程度近づくと足を止め、ウサぴよん殿を胸の辺りで《乙女チ
ック》に抱き締め、《乙女チック》に首を右に四十五度傾けると、
《乙女チック》に上目使いで、《乙女チック》に尋ねる。

「ねえ、アレックスう……………ダメえ?」

これぞ《乙女チックチェーンコンボ》！

紫苑ちゃんの乙女度を最大限に高め、その大輪の花が咲くが如く乙女っぷりを、乙女言語にのせ、膨れ上がった乙女パワーを敵に放ち、敵を撃沈する紫苑ちゃん七つの大技の一つだ！

ちなみにこの乙女パワーの本質は、敵を欺くための偽者である。

「ろ、露骨すぎるんじゃないやあああああああー！ツッ！」

陸は半ば裏切られると確信しながらも、相手を信じていたのに、やっぱり裏切られてしまった者の悲鳴に酷似した叫びを上げる。

「さすが陸！ この嘘乙女っぷりを暴くとは……！」

戦慄の表情を見せ、口から流した架空の血を右の甲で拭う。

「アホかッ！ あんな原始人でも分かる……いや脳の容量が少ない下等生物にも気がつかれそうな明確な策略の意図をもった色仕掛けが通じると思ってるのかよ!?」

「むっ……ウサぴょんじゃなく、カエル殿にすれば陸すらも騙せたらどうか？」

「そう言う問題じゃないんだろ、だいたいそんな演技で彼を騙せると……」

ブバー……ッ！

陸がアレ公の方を振り向く。

瞬間、アレ公が盛大に両方の鼻孔から、ナイアガラの滝の勢いで鼻血を噴出していた。

「Very pretty——ッ！（マジ 可愛い）」

目から感激の涙。

鼻からは興奮の血。

口からは歓喜のよだれ。

喜悦に歪んだ表情。

今のアレ公は正常な感性を持つ者ならば、体ごと一步後に引きかねないものだった。

「な……下等生物以下なのか!？」

今度は陸が戦慄の表情を見せる。

私は陸の問いかけにしたり顔で、頷いてやる。

あやつはアメーバ以下……いや、ありとあらゆる生命体以下だ。

「もう、仕方ないな。よし、その愚民Boyも出席させてあげよう!」

流血を続けるアレ公の鼻へ、隣に控えていた老執事が嫌な顔一つせず、ティッシュを詰め込むというプロの仕事ぶりを見せ付けてくれる。

「いや、でも俺は……」

再度、言いつのる陸だが、

「ノンノン、No! キミの意見は口から出る前に超絶サンダーボルトティックファイア却下なのさ! ま、パーティーで庶民とボクとの格の差でも知るがいいさ!」

思わず石でも投げたくなる暴言で、アレ公は陸の言葉を遮る。

「パーティーは二日後! ドレスとかはこちらで用意するから待っていたまえ! では二日後、よりグレイトで華麗で優美になっているアレエックスと会おう!」

ほざくとアレ公は、うひゃひゃという例の気色の悪い哄笑を放ちながら船内へと戻って行き、やがてクルーザーは私の視界から遠ざかって行く。

見えなくなるクルーザーを見て、沈んだら良いなと思っていたのは、乙女の秘密でござる。

第十六章 情欲と陰謀に満ちた日常

《天堂陸》

「……いや。あいつは私の……その………《婚約者》だ」

その言葉が耳にまだ残っている。

紫苑はアレックス君のことを毛嫌いしているみたいだったけど――

――それでも二人は婚約を交わす仲だ。

俺はこのままでいいのだろうか？

頭の中がぐるぐるする。

俺はどうすればいいんだろう？

答えは簡単だ。

紫苑と離れるべきだ……頭では冷静に答えに行きつく。
なのにそう考えると心が痛い。

頭と心は正反対のことを言っていて、俺を悩ませる。

どちらの答えが正しいんだろう。

どっちが本当の俺の答えなんだろう。

人は頭で考えるのか？ それとも心で感じるのか？ そして決断を下すのは頭なのか心なのか？

わからない。

ただ頭の言うことを聞くと……………胸が痛んだ。

暗い自室。海から帰ってきて、夕食を食べて、風呂に入った。

疲れていたせいか、いつもより早い就寝。

今夜、紫苑は用意された客間で寝ている。

だから、今、暗い自室でただ独りいる。

紫苑が帰国してから、ずっと俺の周囲は騒がしかった。

穏やかな日常はあつという間に遠のき、激変した日常が騒がしく俺を包む。

「まったく……………」

溜息を吐く。

俺は穏やかな日常をなによりも愛している。

こつこつ劇的な展開は正直なところ苦手だ。

なのに――

「なんで俺は笑っているんだろう……………」

気がつけば、口の端には微笑みを刻んでいる。

苦手だったはずの騒がしい日々……………それを楽しく思ってしまう。

ふと寂しいなと思った。

隣に紫苑がいないだけで……………なんだか隙間風が吹くように寒い。

クーラーの効きすぎなのかな……………クーラーの設定温度を《おやす

み全自動》に合わせる。

呼べば……………紫苑はきつとすぐに来てくれる。

でも頭が呼んじやいけないと、強く囁いていた。

それにそもそも部屋のドアには力ギをかけている。

呼んでも力ギを開かなければ、紫苑は入ることなどできない。

そう……カギを開かなきゃ……

「寝よう……」

湧き上がる寂寥感を抑え、布団の中に潜りこんで、手元の枕を抱き寄せて目を閉じた。

漂うような感覚がさざなみのように繰り返され、その優しい感覚に身を委ねる。

半覚醒状態。

クーラーによる適度な部屋の気温に、布団の心地良さ。

さらに言えば部屋のドアにしっかりとかけたことによる安堵感。

（最高だな……）

心を感じる思いを肯定しながら、手元にある枕を抱き締める。

俺には妙な癖があつて、寝ている時何かを抱き締めていないと落ち着いて眠れない。

だからベッドには頭に敷くのはもう一つ別の抱き締め専用の枕がある。

手探りで枕を自分の方に引き寄せ……その瞬間感じる違和感。

（？）

感じた違和感が、右手を衝き動かす。

さらに枕を引き寄せ、両手で枕の表面を……なぞって——い

く。
（なん……だ？）

頭がだんだんはつきりとしていく。

それについて、手に残る柔らかな感触に不透明な疑念が浮かぶ。

明らかに枕とは違う手触りだ。

軽く驚くほど柔らかい膨らみが二つほどある。それらは手のひらの動きによって形を変える。柔らかいが弾力あり、ほのかに心地良い温かさを掌に伝えてくるそれは……

ピタリと動かしていた手を止める。

酷く嫌な予感がし、破壊的な悪寒が全身を駆け巡る。

（そんな……ッ！？　力、カギをかけていたのに！？　いつの間に！？）

一生瞑っていた目を開けると、やはりというか、なんというか

……！

まるでマンガのお約束のように、獰猛なピンクを纏った――

「ぎゃあああああああああす！？」

――紫苑がいた！

「うわあああああああ！？」

悲鳴を上げてベッドから転げ落ちる。

「ふ、こんばんは陸。《情欲》と《陰謀》渦巻く……いいい、夜だなっ」

処女を目の前にした吸血鬼の表情で紫苑は俺に笑いかけてくる。

Ｙシャツの下は下着だけという……昨日同様のあられもない格好！

それなのに今はＹシャツのボタンは全て外されていて、まともに直に、ストレートに白い下着が俺の視界に入る！

十代後半の男には、あの下着のレースの飾りとかは、視覚的にきつすぎる映像だ！

「なんちゅう格好してるんだよッ！」

顔を真っ赤にした俺は、慌てて紫苑の下着を隠すためにＹシャツに手を伸ばすと、その瞬間！

「だ、駄目だ陸う、いきなりそんな所」

やけに色っぽい紫苑のため息にも似た呟きに、床へとずっこける。

「な、なんでやねん！」

「ふふふ。ウイやつめ」

「な、何言っている！？　つーか、そもそも何でここにいるんだよーッ！？」

質問と言うより、既にパターン化してしまった日常に絶叫する。

「ん？ いや、なに。夜中に便所に行ったら、寝ぼけてたんでまちがえてこの部屋にきてしまったようだ。いやゝ失敗、失敗。テヘでござる」

紫苑は邪気を微塵も見せない笑顔でニツコリする……いや、しゃがるッ。

（か、確信犯だ！ こいつは計画的犯罪者だ！ 微笑む悪魔！ 嘲る天使だ！）

唐突に思い浮かぶ疑問。

「し、紫苑……この部屋にカギをかけていたと思うんだが……？」
俺の問いかけに、紫苑はむっつりとした表情で両眼を閉じて胸の前で腕組み。

それや、やめてください胸の谷間が……！？

俺は首の角度を九十 右へと反らし、正面にいる紫苑から視線を外す。

「フツ。乙女ザムライの恋路を邪魔するやつは切つて、やすつて、Go To Hell!……でござる」
「なっ!？」

とんでもない紫苑の告白に慌てて正面に向き直る。

紫苑は酷薄そうな表情で胸の谷間からこれでもかーってくらいやすられたカギの部品を取り出し、俺の膝の上に投げってくる。

ガラーン……（ごめん、僕……守れなかったよ）

カギの部品は膝の上に跳ね返り、自室の床の上に音を立てぐつたりと床に横たわる。

鋭い戦慄が、電流のように背中を山嵐のように駆け抜けた。

「ほ……本当に間違えたのかよ!？ これだけ冷酷にカギをやすつておいて……！ お前は寝ぼけてたって言うのかよ!？」

立ち上がり絶叫する。

カギの……いや俺を守ってくれた戦友の代わりと言わんばかりに、

喉も枯れよと絶叫する。

「うむ」

「マジですかあああッ!？」

しれっと頷く紫苑に絶望の叫びを上げる。

ななな、なな、な、なんちゅーやつちゃ!？ し、信じられへんわっ!

(→混乱の余り関西弁

な、なんでそんな堂々と嘘つけるの。え、マジなの？ 俺が間違ってるの!？

「何にせよ……今宵の陸は積極的だな」

「え!？ ど、どういうことだ？」

見えない恐怖の手が、心臓をザワリザワリと撫でる。

嫌な汗が滝のように額と背中を流れ、その感触が焦燥を急き立てる。

「いや……昨日はせいぜい私の胸に顔を押し付けるくらいだった

……まさか私の胸を

もみしだくとはな!」

『もみしだくとはな! もみもみもももももももも——もみもみもみもみしだく! もみしだくとはなッ!』

ニコニコ動画のMAD画像のように俺には聞こえた。

紫苑の放つ弾効の声は、戦艦ヤマトの充填率120%の波動砲のように、俺の心臓を特殊効果満載の惑星規模的破壊力で貫いた。

「いや、紫苑ちゃんビツクリでドッキドキだ!」

「ぎゃああああああッ!？」

三味線にされる、断末魔の猫の悲鳴を上げる俺。

手に残るほのかな感触に、思わず自分の掌を見る。

思いあたることが…… あった。ありすぎた！

け、けど、言い訳する気じゃないけれどさあああああー！

追い詰められた犯人の形相で叫ぶ。

「罨だツ！ これは罨だああッ！ お、おかしいじゃないか！

俺は部屋にカギをかけて一人で寝ていたのにッ！ それなのに目が覚めるとカギをやすつて殺し、俺の習性を利用してベッドに忍びこむだなんて！ この状的証拠が罨だという証拠ッ！ 証拠オツ！」

必死で命乞い。絶叫を放つ。今まさに新世界の神ピンチ！

「だが、胸をもみしだいたのは事実だ」

冷然と思い通りという笑顔を浮かべる紫苑。

「ぐっ！？」

言葉に詰まる俺。

ま、負けるな！ まだ逆転のチャンスはあるはずだ！

打ち負けそうになる心を雄雄しく奮い立たせる。

「だいたいでござるがな……」

睨み付ける俺に、紫苑は大袈裟にため息をついて俺の下半身の一部を…… 指差す？

「そんな股間状態で言い訳しても、問答無用だ」

「へ……？」

視線を股間に落とす……

「きゃああああああああああ！？」

自分の股間を見て、乙女的叫びを漏らす。

「ち、違う！ これは朝立ち、男の生理現象なんだ！ 不可抗力！

情状酌量の余地を求めるぞ俺は！」

「よくわからぬが…… 今はまだ夜だ」

「！？」

必死の弁解を砕くと、「ニヤリ」と寧猛な笑顔を見せる！？

「そのある意味雄々しい首を——貫う！」 ↑ 織田信長が桶狭間で今川義元を打ち取る寸前に浮かべた笑み。

ああ、今川義元さん！

俺は今、貴方の気持ちがよくわかる！！ 戒名、天沢寺殿四品前
札部侍郎秀峰哲公大居士天澤寺秀峯哲公どの！ 悔しいス！ マジ
悔しいス！ 勝てる寸前まで来てたのに！ あと一歩ですわ天下統
一だのに！

「ち、ちが！？ 大いなる勘違い！ 絶対無敵大間違いですよ！？」
首を獲られてなるものかー！

「聞く耳持たぬわ！」
「ですよねー！？」

「ござるううううううー！！」
「と、飛んだッ！？」

一際大きい奇声を放ち、紫苑がベッドのスプリングを利用して舞
い上がる。天井に届きそうなくらいの高さだ。飛び跳ねる様はムサ
サビ！ 襲いかかるは虎の如し！ 生きながら獲物を喰らうは飢え
たジャッカル！

紫苑が俺に襲い掛かってくる！
「又ハハハハハハハハハハ！ 紫苑ちゃんのラヴの餌食となれ
！」

紫苑は世紀末覇者のような哄笑を放ちながら、手早く俺を組み伏
せる。早い、手慣れすぎてる、ありえねえ！？

すぐさまマウントポジションをゲットする巧妙さは一流のグラッ
プラーもかくやと言わんばかり！

（ひいひい！？ た、食べられちゃうよあッ！）

その手馴れている一連の動きに、俺の涙腺は洪水状態だ！

「アアアッ！？ だめ、駄目だあああ！ まだ俺には、け、経済力
がッ！ 自分はおるか、相手を養う経済力がない！ そんな男が女
性と安易にこ、こんなああああああああッ！？ か、堪
忍、堪忍やゝ！？ パジャマを返してくれーッ！」

必死で抵抗するが、組み敷いてきた紫苑の膂力は凄まじく、まるで鬼。鬼は貴様の服をよこせと衣類をドンドン剥ぎ取っていく！

「ふーっ、ふーっ、むふーっ、むっふふッ！ ええい、観念せい！ 男らしくな！」

猪のように荒い紫苑の鼻息が、頬を叩く。ど、獰猛すぎる！

ほ、本気で怖いんですけどオ！？ この子、ほんとに乙女ですか！？

「た、助けて！ 助けて母さあああああーんッッ！」

人間恐怖に駆られると、成人男性の三人に一人は母親の名前を呼ぶと言う。

この時の俺もその例通りだった。

「空音ちゃん行っきまーす！」

と、俺の声を聞き届けたかのように、母さんが部屋に入ってきた。

「か、母さん！」

感激の声を上げる俺。

地獄に仏、天の助け、寝所でもつれあうタイミングで母親参入…

……あれ？

そこで……またしても気がつくある事実。

着乱れている衣服。抵抗したため、お互いに荒らげている俺と紫苑の呼吸。

あげくマウントポジション……ッ！？

「まあ………初孫作りね？」

なぜか頬を赤く染めて母さん。

「ぐはっ！？」

なにこのまずいシチュエーション！

オナニーの最中に母親に入られたよりも一段上の羞恥が存在しただなんて……！

「ええ！ 小癪にも抵抗しておりますが、あと一歩です！」

ビシリと親指を立てて母さんに答える紫苑。

凄まじい単語が飛びあう日常に、俺は意識を手放しそうになった。そう……頼むからこの変な日常が夢であってくれという切実な願いを込めながら……

「なんでやねえええええええん!？」

絶叫めいた突っ込みが、今日も響く。

ああ、穏やかな日常よ。どこですか。俺はここにいますよ？

第十七章 ナイトパーティー 前編

天堂 陸

《

アレックス君の予告通りに二日後の夕方、家の前に迎えの車がきた。

黒塗りの外車の名前はわからない。高級外車といえばベンツくらいしか知らない俺は乗るのはもちろん見るのも初めてだ。住宅密集地である狭い道にはとても入れそうにない大きさ……というよりは長い。居住スペースのせいだろう。

その外車から洗練された動作で老執事が出てきた。

（し、執事だ！）

映画でしか見たことないよ、こんな人！

一分の隙もない。オールバックに撫で上げられた銀髪同様、口元の立派な髭といい優雅で気品ある佇まいを前に後退りしそうになる。アレックス君の身の回りの世話をしている執事の方で、彼はエドワード・W・ウォルガーと名乗った。達者な日本語にマジびびる。外人っぽいはずれたイントネーションではなく、流暢なくらい流暢

な日本語だ。

そして、エドワードさんに誘われるまま紫苑と一緒に車に乗り込み、二時間。

紫苑と再会した空港に乗り一時間。

そろそろ日も沈みかけた頃に、ようやくアレックス君の招待された屋敷へと着いた。

まず、門から屋敷までが長い。

車で門をくぐっても、ひたすら延々と林やら庭園やら、あげく池とは言い難い大きさの湖やら続く一方で、建物が見えてこない。

たつぷりと十分ほど車で走って、ようやく屋根が見えてきたと思えば、エドワードさんが、庭園管理の庭師の家だと教えてくれた。

愕然とする。

やがて、こんな状態がずっと続くのかと思った頃、洋式の建物に着いた。

車から降りて、目の前の建物を見上げる。

そのスケールが恐ろしい。凄い。凄すぎる。格の違いをこれ以上ないくらいに感じる。

眼前にそびえる威容に、頭が痺れるくらいの衝撃を感じていた。

「す、凄く…… 大きなところですね……」

一体、この屋敷の中に俺の家が何個入るだろうか？

十や二十くらいは平気で飲み込んでしまうだろう。

だが、

「いえ。こちらは別館でございます」

「え？」

「パーティー会場に使用する本館は、あちらでございます」

エドワードさんの右手が指し示す方向に視線を向けると、目の前にある屋敷よりも、数倍は大きく建造物が目に飛び込んできた。

煌びやかな照明が夜の闇に輝く豪華な屋敷が、大地に根を下ろしたようにそびえている。

「……………」

もはや声も出なかった。

俺の驚きに気を遣ってくれたのか、エドワードさんは暖かな微笑を見せてくれた。

「私も初めてこのお屋敷を拝見させて頂いた時、驚いたものでした」

「そ、そうですよね……？」

顔面神経症のような、とても笑みとはいえない複雑な表情を浮かべる。

と、俺とは違い全くいつもの幼馴染が俺の肩に手を置く。

「フ、案ずるな陸！ 屋敷の一つや二つ、変態の一人や二人に比べれば、どうでもいいぞ。そう……傷が治った時にとれた《かさぶた》くらいどうでもいい！」

「——それは確かにどうでもいいけど……」

けど、これは紫苑は紫苑なりに俺にフォーローを入れてくれたのだろう。

それが分かれば紫苑の気遣いを無駄にするわけにはいかない。

「ん……ま、そうだな」

「うむ。それにどうせ陸は将来この紫苑ちゃんの嫁になるんだから、こんな屋敷なんぞすぐに慣れるでござろうよ」

「よ、嫁えッ！？」

不吉な単語と内容に裏返った声を張り上げる！

「フ、ついでに陸の銅像なんかもプレゼントするぞ。どうだ、嬉しいだろう？」

「た、頼むつ、勘弁してくれ！」

あながち冗談とも言えない本気の眼をした紫苑に顔を引き攣らせる。

紫苑は「やる」と言ったら、本当にやる根性と財力。そして野望を持っている。

だから、紫苑のセリフは妙に現実味を帯びていて——怖い。だって、考えてみてくれッ！

異常殺人鬼のジェイソンが『お前を殺す！』と言ってもそれ冗談

にならないだろう!?

しかし、

「紫苑様、陸様。お洋服を用意していますので、こちらに」

エドワードさんが絶妙なタイミングでそう言い、別館を案内してくれる。

「陸様は、つきあたりを右の部屋にお着替えを用意していますので、それを御召してください。紫苑様はこちらでございます」

「では暫しの別れだな、陸」

「あ、ああ」

「フフ……ドレスアップした紫苑ちゃんを後でこれでもかあー、つてくらい見せてやろう。それこそ鼻血ものの破壊力のある紫苑ちゃんをな! 《色々な意味で》ティシュの用意をしておくことだ!」

「あ、ああ……」

なぜか一部の単語を妙に強調した口調で宣言する紫苑。

なんとなく見たいような見たくないような……そんな相反する気持ちを抱く。

紫苑は意気揚々とエドワードさんに部屋へと案内され、俺は言われた通りにつきあたって右の部屋へと入る。

見渡してみると、その部屋は俺の部屋の軽く五、六倍はある広さだ。

部屋の中には応接セットらしき家具が置いている。

置かれている小物も一目で高価なものだと分かった。

なによりも布団の上を歩いているような柔らかさを伝えてくる赤い絨毯に慄然とする。

壁に飾られている絵画。

その部屋の豪華さに数分呆然と佇む。

(やばい……俺はここにいてもいいのでしょうか?)

内心で問う声すら敬語になってしまう。

と、部屋の真ん中にあるテーブルの上に、幾つか大きさの違う白い箱が置かれているのを見つける。

「あれが、エドワードさんの言っていた着替えかな？」

テーブルに近づき、箱を開ける。

予想通り、それはエドワードさんの言っていた着替えで、ライトブルーの三つボタンスーツに、黒のシャツと赤いネクタイ、靴下から革靴まですべて用意してあった。

おずおずと着替えを始める。

服に触れてみて、その上質さに嫌でも気が付かされる。

着替えを一通り身につけると、ネクタイが曲がっていないか、部屋にある長方形の形をした大鏡を見てチェックする。

なんとというか……こういう服に着慣れていないという動揺の表情が、鏡に映る。

「……馬子にも衣装ってやつかな？」

苦笑する。

そして、部屋から出ようかと思った瞬間、

「陸の生着替えの大チャーンス！」

バアアアンと両開きの扉を限界まで開いて、紫苑が飛び込んでくる！？

頼むから、ノックくらいしてくれよ……無駄とは思ったが、そう思わずにはいられない。

「あ、あのな、もし着替え中だったらどうするんだよ？」

ため息混じりに紫苑に言ってみるが、

「望むところだ！」

「の、望まれてもな……」

尋ねた言葉を返す刀でそう切り返されて言葉に詰まる。そう来たか……つかこの場合どうしたらいいやら。

ゆるく諦念を浮かべながら、紫苑の方を振り向いた俺は瞳を見開いて硬直する。

少し茶色の入ったショートカットの髪は大人っぽい感じに纏められ、可憐の一言に尽きる。薄紫のビロード地のロングドレスは、大きく肩から胸元まで大胆にカットされていて、顔に赤味が走った。あまりの可憐さに心臓が——胸が高鳴り、思わず胸を手で押さえた。

「どうだ？ 私もなかなかの乙女っぷりでござろう？」

「あ……あ、ああつ。その……似合っているよ。凄く良いと思う」
興奮で上擦る声をなんとか抑えて、右頬を左の人差し指で無意味になぞりながらなんとかそうしぼり出す。

そう——俺に微笑をして問いかける少女は、まさしく完璧無欠の財閥の令嬢だった。

一般人とはおよびもつかない雰囲気纏い、佇む紫苑はただ——美しい。

常日頃でも思わず見惚れる容貌が本気で着飾れば、それは恐ろしいほどの吸引力を伴う美貌の化身となる。

「だが、陸もなかなか似合っているぞ。思わず涎がたれるくらいにな」

「……そ、そうか？」

『涎』の部分にぎくりとしながらも、自信なく聞き返す。

「うむ。私が保障するぞ。だがまあ……」

そこで紫苑は考える素振りを見せると、妄想ドリーム爆裂な感じの笑みを浮かべる。それお嬢様が浮かべちゃいけない笑みですよ？
「一撃必殺な裸エプロンの陸や、お色気満点バニースーツな陸、元気花丸体操着姿の陸も捨て難いがな……ッッ！」

「い、いやお願いですから、本気でそんな俺は捨てておいてくれッ！
地球規模的に頼むから！ 血涙流しながら本当に頼むから！
なんなら土下座するからッ！」

「……そうか？」

「そつとも！」

少し不満げな表情を見せる紫苑に、首を縦に何回も振って否定表示する。

「むう……ならば仕方あるまい。結婚初夜まで待つか」

「け、結婚初夜!？」

声の上擦る俺に、紫苑はしたり顔で頷く。

しかし、紫苑の表情が途端にでれつとしたものになり、瞳は妄想の――パノニアに染まる。

「フフフ……いいではないかいではないか! 恥ずかしがるでない。さあ、そんな布きれ……脱いでしまえ……グッフフフ……ザクとは違うのだよ! ザクとは!」

しかもまた紫苑の呟きが恐怖を加速させる! それからあなたガンドム混ざってますよ!

今の隙に鋭くバックステップで紫苑から距離をとる。密室に監禁された乙女のように身体を震わす。そう密室に囚われた乙女のように!

だが、俺は決定的なミスを犯していた。

俺は後ろに飛びずさるべきではなかった。

全力でドアを開けて逃げ出すべきだったのだ!

そして大声で人を呼ぶべきだったのだ!!

ガチャリ!

狂氣的な音を立てて、ドアの鍵が内側から閉められる。

いつの間にか紫苑は俺に背を向け、唯一の出入り口である部屋の扉をがっちりロックをする! why!? なぜに、どうして、何故ですか!?

(な、なぜ鍵をかけるんだ!?)

それは密室に予期なく閉じ込められた者特有の疑問だ。

稲妻を受けたように全身を硬直し、もはや慣れ親しんだ戦慄が秒速で……そう秒で俺の心臓を太鼓を叩くように、やたらめったら激

しく警鐘しているのを感じていた。おいおい16ビートじゃないか、ノリノリだな！

部屋の空気が停滞し、肉体的にも、心理的にも、精神的にも圧迫感を感じていた。

そして今。

いけないピンクに狂った野獣こと紫苑が、三日月の形のような笑みを口に象って、破滅的な勘違いを紡ぐ。

「二人つきりだな、ムフ♪ ムフフツッ！」

関西人に生まれた俺の瞳が、キラリと光る。

「無理矢理、作為的な状況を作つといて、それかああああああー
ーーーーッ!？」

魂の凄愴の悲痛さを塗り込めた悲鳴を喉の奥から絞り出す！

だが、ああ……っ。

だが俺は見てしまった……ッ！ 見てしまったよ！

紫苑の本気の瞳を……！

ロングドレスのスカートの裾を不気味に蠢動させ、小走りだが妙に早い、早すぎる動きで！

ツカツカツカツカツカツカツカツカツ、カカカカカカカカカカッ！

獲物を追い詰めるヘビのように残忍に肉薄してくるう……ッ!？

「い、ざ……いざ——いざあああああああ~~~~ッ!」

紫苑は脅えた小動物を狩る猛獣のように、両手を高く上げる。

それは熊の威嚇を彷彿とさせ、紫苑のドレス姿とギャップがあり

すぎる。

そしてそのとんでもないギャップが凄惨な雰囲気醸し出していた。

その時、少年の俺は初めて理解した。

美女と野獣、ではないッ。

美女は、野獣なのだ、と!!

「あああああああああああ!?!」

叫喚する俺。

たちまち部屋の隅——壁を背負う。

インファ이터に追い詰められたアウトボクサーの気分だ!

「に、逃げ場なし! 打つ手なし! 救いの手もないッ!? しかも状況は最悪飛んで極悪ときた! あげく、相手はいけないうピンクモードアクセル全開で恋する妄想機関車の紫苑だ!? 貞子も伽耶子も跳ね飛ばす! 脱線、踏み切り、衝突、爆撃、蹂躪モードだッ!」

監禁、無理矢理、押し倒される、陰謀、強敵、危険、不可、終焉!

ダークな色合いの単語が頭の中をフラッシュのように駆け巡り、脳と心臓を強停止させようと目まぐるしく襲う!

「大丈夫だ、陸……大丈夫」

俺の眼前には——紫苑が、脅える幼児をあやす母親のように慈愛に満ちた笑みを浮かべ……

「初めは優しくするから、OKでござる」

雄雄しく右手の親指をにゅっ、と立てて宣言した。

原爆投下の笑みだった。その紫苑のウィンクに俺は死兆星を見た!

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア――ス！？」

信じられない紫苑の台詞に怪鳥のような悲鳴を上げる。さながら狩られる寸前のイアンクック！

瞬間、紫苑が俺との間合いをゼロにするべく容赦無用に詰め寄ってくる！

「ムササビ式紫苑ちゃんトルネード・ラヴ・アターック！」

「ん、何だ？ ロックがかかっているじゃないか……」

そして、その時、俺の中で存続の歴史が動いた。

絶体絶命の危機に瀕したと思われた時、アレックス君の救いの声が扉越しに聞こえた！

——お、俺は人間を辞めさせられるぞおおおおおおッ！
！！！！

第十八章 ナイトパーティー 中編 その1

ス バグネット》

《アレック

シオンのドレス姿は後の楽しみにとっておくとして、先に愚鈍で浅薄なイエローモンキーの滑稽なスーツ姿を見て、ボクとの格の違いを思い知らせてやろう。

そう考えたボクはリクの着替え用に宛がってやった部屋へと優雅に……それでいて華麗で高貴にムーンウォークで移動する。

今のボクは歩くだけで、黄金の燐分を撒き散らす《蝶存在》だ。女性を失心させる程の鮮麗さと優美さを持ち合わせて、持ち合わせまくりの状態だ！

それは当然というか、必然だ。

そうこの、ナイスでチョベリグで、繊細かつ大胆で華麗なワニン

ダフォーな白のタキシードを着たボクは、この地球上で最も美しい生命体だ！

「フフ……格の違いを思い知らせてやる！」

ボクは優美を塗り込んだ手つきで扉のノブを回す……回す……ん？とロックがかかっているらしく、開かない。

「ん、何だ？ ロックがかかっているじゃないか……」

このボクの入室を拒むとは！

これがジャパンでウワサの心の障壁。ATフィールドというヤツか！

信じられない駄目態度だ。ペケ、ワン ハンドレットだ。

所詮は庶民だが、礼儀と言う言葉をその少ない脳のしわに、叩き込みやがれ！ っという感じだ。

だが、扉から聞こえてくる声にボクは驚愕する。

あくまで美しく、そう——バラを口にくわえながら……！

両手を腰に当て、九十度の角度で手をピンと伸ばし、脚はガニ股にガッチョーンと驚く。

「むっ、アレ公のヤツか……！」

「た、助け！ 助けてええええええッ！」

防音効果の高い扉なので、何を言っているのか良く分からない。だが、今わかってしていることは——

ロックしている扉 ↓ ドレスアップしたこの世界で最も美しくて気高く、それでいて…… 略 …… 激抱きしめてあげたいプリチーなボクの子猫ちゃんのシオン ↓ 糞汚い万年発情駄犬…… 略 …… お前は死ぬのがふさわしいんだよ、愚民ボーイ・リク ↓ 密室に二人だけにいる。

—— 天才は僅かこれだけの材料で、全てを把握することができ

る。

ナサのスーパーコンピューターにも負けない明晰なボクの頭脳が、マキシマムな回転を生み出し、恐ろしくもハレンチな解答を高速演算する！

「シ、シオンが……ッ！　ボクのシオンがあの最下級ボーイ・リクにレイプされている！？」

（なんと言うことだ！）

恐らくドレスアップして、鼻血ブーなほどお色気たっぷりでセクシー満点のシオンの姿を見て、あの糞ジャップ・リクは辛抱堪らず、いきり立つ下半身の衝動に身を委ねて、嫌がるシオンを無理矢理部屋に引きずり込み、その柔らかな果実を彷彿とさせる妖艶な肢体を欲望の誘いに応じるように、思うがさま貪るように味わおうと……！

「イイイイエロオオオオオオモンキイイイイイイ……
ーッッ……」

溢れんばかりのボクのオーラに白いスーツの上下が内から弾け飛ぶ！

それはさながら一子相伝の暗殺格闘術を極めた世紀末覇者の如し。だがボクのオーラは留まるところを知らない。ケンシロウなどとは違い、ボクの場合、その闘気の凄まじさはズボンまで破くほどだ。

スーツのボタンが弾け飛び、中のシャツを雄雄しく引き裂き、逆立つ金髪にエメラルドグリーンに染まった瞳は憤怒に輝く！

あっという間にボクは白いブリーフ一丁となる。

クールな怒りによって目覚めたゴーギヤス育ちの高貴人の激情が燃え上がる！

「ギルティイイイイッ！」

ロックされた扉を血走った双眸でギラリと睨み、凄絶な笑顔でボクはリクに有罪判決を言い渡す。

ブリーフから愛銃の大口径のグロック19カスタム——《ゴール

デン・ライオン》を取り出す。

特殊改造されたバレットの炸薬は、ボクのその時のオーラに感応し破壊力を増す！

「イエローモンキー！ 貴様に相応しいバレットは決まった！」
まずは一発目。

同じくブリーフから一発目のバレットを左手の親指と人差し指で摘むように取り出す。

取り出したバレットをピンと音を立てて宙に放る。

「秘められし——静かなる欲望の叫び デザイア・ヴァーミリオン
！」

ボクのオリジナルゴールデン・ライオン愛銃に装填できるバレットは三発。

宙に浮いた一発目をアグレッシブに左手で掴み取り、一発目を装填。

続けて二発目を取り出して、ピンと宙に弾く。

「限りなき——エロスへの探究 アルキメデス・バイオレット！」
落ちてきたバレットを掴み、二発目を装填。

最後の三発目を取り出し、ピンと宙に弾く。

「そして——高貴なる魂の叫び ゴージャス・ゴールド！」
流麗な弧を描くラストバレットを掴み、装填。

込められたバレットはさしずめ燃料。

ゴールデン・ライオン
このボクの愛銃のカートリッジの中で高速回転。三発の炸薬が雄しく配合され混ぜ合わされる。

そうさながら科学と魔術が交差する時、物語は始まるのだ！
ゴールデン・ライオン
ドクンドクンドクンドクンと脈打つ愛銃！

「吠える——《ゴールデン・ライオン》！」

特殊内燃機関によって一発に形成されたバレットが扉に突き刺さり、爆破！

粉碎、玉砕、大喝采！

跡形もなく扉を破壊する！

ボクは華麗なステップと前回り爆煙の中を突っ切り、ハリウッドの俳優のように、《ゴールデン・ライオン》をピタリと構える。

あくまで気高く、そう——バラを口にくわえながら華麗に優雅に気高く繊細に——ブリーフ一丁で。

「フリーズ！」

しかし瞳に映った光景は、半裸状態で半泣きのリクと、舌打ちして忌々しげにボクを睨むシオンだった……。

（一体全体どういうことだ？）

謎めく迷宮入りした事態の前に、ブリーフ一丁のボクはエレガントにクシヨンとくしゃみを一つした。

第十九章 ナイトパーティー 中編 その2

《天堂 陸》

とりあえずなんとか紫苑の涎によつて汚れた服を整えた俺は、パーティー会場へと案内された。

スライムに襲われる美女の気分がよくわかった気がした。

本館で催されるパーティーは、一階のホールで行われていた。

ホール全体がタキシードやイブニングドレスで着飾った人で埋まっている。

壮麗でどこか近寄りがたい光景。

「凄いな……」

ホールを見回す。

和・洋・中の様々な種類の料理がコの字型に並べられ、華美な服に身を包んだ人々が談笑している。

耳に入ってくる声は、日本語よりも外国語が多い。実際、招待客

のほとんどは外国人のようだ。

メイド服のお姉さんからアルコール類を断り、オレンジジュースを貰った。

自慢じゃないが俺はアルコール類がからつきし駄目だ。

アルコール度数が低い飲み物でも顔が真っ赤になってしまう。

アルコール度数の高い酒ならば匂いだけで酔っってしまうかもしれない。

ちなみに紫苑は…… ウイスキーのストレートだった。

ウイスキーのようなアルコール度数の高い飲み物にはそれなりの飲み方があるみたいで、

水割り↓ロック↓ストレートとあり、ストレートは水や氷で薄めることなく、そのまま飲むためアルコールを飲み慣れていない者には少し酷なのだが……

グビリと一気に紫苑は100mlくらいのウイスキーを飲み干す。顎を逸らし、喉元がはつとするほど白い。無防備に逸らされた紫苑の胸元から慌てて視線を逸らす。

なんとなく俺も悔しくて…… その…… オレンジジュースを一気飲みしてみる。

「ふう…… うまいな」

「…… そうだな」

紫苑の満足そうな声に比べて、俺の声は複雑だ。

と言うのは、別にオレンジジュースが不味かったわけじゃない。

むしろオレンジジュースがこんな美味しかったのかと驚くほど味は良かった。

白状してしまえば、それは男の面子と言っか、なんと言っか……

紫苑はウイスキーのストレート。

対する俺はオレンジジュース。

性差別する気は毛頭ないが、何か逆じゃないか？

そもそもこういった上流階級のパーティーに紫苑は別段違和感なく馴染んでる。

洗練された雰囲気纏って……。

紫苑の際立った容貌は、周りの雰囲気によく浸透していくのではなく、取り込み圧倒する。

逸脱した他の女性には持ち得ない何かを天然に紫苑は手にしていた。

視線を走らせて見れば、男女問わず紫苑は皆の視線を集めている。俺の元幼馴染みで、手に届かない恋慕の相手と言う欲目もあるが、それを差し引いてもこのパーティーにいる誰よりも綺麗だと断言できる自信があった。

「むう、アルコールも良いのだが、腹がペコリヌスでござるなあ……
… 武士は食わねど高楊枝と言うが、ペコリヌスにはやっぱり勝てないでござるな」

ただ、口を開かなかつたらと言う条件付きだが……。

でも、これも紫苑の魅力のひとつなんだろう。

そして、紫苑のそういうところが困った所でもあるけど、きっとそういう所に自分でもどうしようもなく惹かれていて、目が離せないんだろう。

たとえ紫苑と住む世界が違つとわかっていても……

自分の中で息づいている騙しきれない感情に苦い笑みをこぼす。

「陸……」

そんな俺の気配を察したのか、紫苑が俺の方を振り返る。

「!？」

思わず息を飲む。

信じられないほどの美貌が、信じられないほどの近い距離で、すぐ横に——ある。

息遣いすら聞こえてきそうな——魂すら奪われそうな……そんな切ない距離間。

紫苑のいつもと違う表情で、声で……いつもと違う何か俺の平

静を狂わす。

「陸もペコリヌスじゃないか？」

「けどいつも通りの紫苑のセリフに安堵のため息をもらす。」

「何だよ、ペコリヌスって？」

「ふふ……よくつつこんでくれた！ きつと第三者の皆さんも困り気味のところに現れた救いの問いだ！」

いつも通りの長ったらしくて意味不明の前口上を、とても長い間、聞いていなかったように思い、俺は紫苑に尋ねる。

「で、何なんだ？」

「少し腹が減っている時は『ペコリ』。かなり減っている時は『ペコリヌス』。餓死寸前の時は『ペコリヌス帝』。紫苑ちゃんワードだ！」

「俺は……」

そこで意外にも自分が空腹だったことに気が付いた。

おそらく、緊張のために今まで食欲を感じなかったんだろう。

「俺も、ペコリヌスかな……」

「おお！ ペコリヌスでござるか！」

紫苑は一緒だなと、顔を綻ばせる。

「ムシャingだな、ムシャing！」

確か『ムシャing』の意味は、食いまくる……だったかな？

紫苑と一緒に中華の料理の並んでいるテーブルへ移動する。

お互いに会話を交わしながら食事していると、紫苑の知り合いらしき人たちがやって来て紫苑と話し始める。

知り合いらしきと思ったのは、男女問わず全員紫苑より年上の人たちが多かったからだ。

なんとなく紫苑たちから見えない障壁の存在を感じて、紫苑たちから距離を取る。

適当な飲み物を手にすると、近くの壁に寄りかかった。

紫苑たちは家の話や、彼らの中で有名な誰かの体の調子や近況など、俺のような庶民には会話に入っていけない内容だ。

さつきまでは見惚れるだけだった豪華な周囲の空間が、今は人々の談笑の輪から外されて、疎外感が強く身体に突き刺さった。

紫苑という鎮痛剤のおかげで痛みを忘れていた疎外感という傷が俺を苦しませる。

「さつさと帰りたいな……」

パーティーの明るい談笑の空気に、眩きはかき消されてしまう。

でも、俺の心に思いのほか独白は大きく響いた。

と、ホールの明かりが消え、フツと闇が押し寄せる。

すると俺の位置からちょうど真正面にあるバルコニーに、明るいスポットライトが当てられた。

スポットライトに照らされているのは、紫苑の婚約者のアレックス君だ。

『皆さん、ようこそバグネット家のパーティーにおいで下さいました。今夜はゆつくりと楽しんでいて下さい』

マイクで拡張されたアレックス君の声がホールに響く。

『今夜はボクの婚約者であるアヤサキファミリーのレディを紹介させていただきます……シオン・アヤサキさんです！』

スポットライトが闇の中を彷徨い、やがて一人の少女を探し当てて照らされる。

薄闇から浮かび上がる紫苑は、現実味からかけ離れた幻想的な感覚を受けるほど綺麗だった。

綺麗で……決して手に入らない俺の宝物……苦い想いが突き刺さる。

手元の飲み物を一気に飲み干す。

どうもカクテルだったらしく、失敗したなと心の中で舌打ちする。近くにあったテーブルにグラスを置くと、紫苑が周りを見回しているのに気が付く。

周りを彷徨っていた紫苑の視線が……俺を真っ直ぐ——捉える。捉えて離さない。

（そらせない……！）

そう思った。

紫苑の真摯な眼差しは、俺を完全に拘束する。だから、紫苑がゆっくり俺の方に近づいて来るのを見て、身動き一つできなかった。

紫苑は俺の隣へと移動する。

それと同時にスポットライトの明かりも紫苑を追いかけて移動する。

つまり、俺も紫苑と一緒にスポットライトの明かりを浴びることになる。

つい先程、アレックス君が自分の婚約者だと紫苑を紹介したのに、いくら幼馴染み——しかも頭に元がつく——だとは言え、今、俺と一緒にいるのは不味いのではないだろうか。

それもただ俺の隣に立つというより、その……恋人同士のように寄り添うように——手を繋いで立っている。

『か、彼はボクの婚約者の小さい頃の幼馴染みのリク・テンドウ君です……シット（小声）』

思ったとおり、微妙に引き攣った声音でアレックス君が俺のことを紹介してくれる。

「おい、まずいんじゃないか？」

寄り添う紫苑に、添えられた手を目配せして耳打ちするが、紫苑ははつきりと俺に言った。

「あんな顔をしていた陸をほっておけるはずないだろう」

「……あ、あんな顔？」

動揺する。

一体、俺はどんな顔をしていたんだろう？

「……」

多分、いやきつと俺は情けない顔をしていたんだろう。

自覚はある。

俺は宝物をなくした子供のような顔をしていただろうから。

でもここは事を荒らげないために、紫苑の言ったことを否定する

べきだったんだろう。

それはパーティーに招待された人たちの好奇心に溢れた瞳から察するに、当然の判断だった。

「……………」

だけど。

紫苑の隣にいたかった俺は、否定の言葉を紡げずにいた。

やがて、ホールに明かりが戻り、華やかな談笑が再開される。

俺たちの手は……………ずっと繋がれたままだった……………

《綾崎 紫苑》

陸のいるところに、ああいう形で傍に行っただのは不味かったと思っ
っている。

だがそれ以上に、いつの間にか私の横から離れて、悲しい顔をし
ながらもどこか諦めの表情を浮かべていた陸を見てしまえば、躊躇
する必要はなかった。

あんな顔をする陸を放っておくなど、乙女の風上にも置けぬ。

陸を離さないように、自分の手でしっかりと繋ぎとめる。

どんなことであれ、この手を離すつもりは全くない。

陸のような魅力的な人間は、誰かに取られないようにしっかりと
捕まえておかないといけない！

陸を奪おうとする女子は手当たり次第に吠えて、噛み突いて追
払うことこそ、我が最優先の義務！

いわばこれは――^{ジハード}聖戦なのだッ！

「あの……し、紫苑……」

陸は私のモノだ！

爪の先から足の指、髪の毛一本にいたるまで私のモノだ！

今のテンションならばジャイアンですら《デコピン》一撃で――

――殺せるッ！

ずえーったい、誰のも渡さない！

奪われるならば、ヤンデレモード全開だ！

しかも紫苑ちゃんはただのヤンではないぞ。何せハサミやナイフなどチンケなものではなく、日本刀を持ってヤン全開フルスロットだ！

お前を殺して、私、切腹だ！ 乙女の病んだ生き様をしかとその目に焼き付けろ！

そうこの病んだ想いで——月にすら飛んで見せよう！

（月に飛ぶ ヤン全開の 乙女心……字余り）

まあ、ともかくだ。

なんとしてもこの夏の間に既成事実を作って、むふふでラヴラヴ甘美な一時をゲットしなければな！

「し、紫苑っ……手、痛いんだが！」

「む……すまん」

どうも内的世界で野望を燃え上がらせていた私は、陸の手を必要以上に握り締めていたらしい。

「だがしかし……こうやってしっかりと握っていれば、陸は離れていかないだろう？」

「まあ……確かに」

陸は微笑する。

穏やかで暖かいムードが私たちを包む。

こ、これはいい雰囲気なのではないか？ むしろ勝機？

い、今ならちゅ……ちゅ、ちゅちゅ、チューくらいしてもいいのではないだろうか！？ いやいいはずだ！ いいに決まっている、いいに違いないッ！

頭の中で何人ものクロスケが恥らいながらくるくる回る。

むしろそういう雰囲気なのでは！？

ラヴ チャンスの到来に、鼻息を荒くする。

餓えた狼の目つきで隣の陸をギラギラ ギンギン、むんむんを見

る。

正確には形の良いその口唇を……きたー！ーッ！（ω）

「3 ムッフ〜！」

これは口付けるしかない！

ゴクリ、と喉を鳴らす。

ラヴ・シミュレーション開始ッッ！

陸の左手を掴んでいる右手を引き寄せ、陸の身体の重心を崩す。そしてすかさず左手で陸の胸倉を掴み、後ろへとさらに重心をかけて、完全に陸の体勢を崩す。

すぐさま腰の後ろのベルトを右手でむんずと掴み、左足を雄雄しく踏み出し、振りかぶった右足で陸の右足を刈る！

これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女流ラヴ 大外刈り》！愛しい者の唇を得るためには、時に投げ技でなければならぬのだ！双眸に流星の輝きを宿し、我が小宇宙^{コスモ}の闘気は最早留まるところを知らぬ。

（いざあああああああ——ッ！）

私は乙女。

ここはパーティー会場。

だが、心は柔道家！

脳裏に描く、完璧無敵のラヴ・シミュレーションを、今まさに開始されようとした瞬間！

「ハッハ〜アアン♪ やあ、シオン！」

私の偉大かつ壮大かつ雄大な計画ををぶち壊す男が絶妙のタイミングでやって来た。

アレ公だ……ッ！（怒）

「……失せろ、変態。ペッ！」

語気荒く唾を吐き捨てて、一蹴。

微笑みながら挨拶してくるアレ公に、こちらも顔だけは微笑みながら罵倒を返す。

「し、紫苑!？」

アレ公に影も踏ませない対応に引き攣った声を漏らす陸。

何でだ?? 紫苑ちゃん、さっぱりわからないぞ?

むしろここは陸、喜ぶところだぞ?

他の男にはツンツンとりつく島もないのに、陸にだけはいつでも心の扉を開け放ちまくりなのだぞ?

私なら、もう堪らない。絶頂すら覚える。

土佐弁でいうならば「たまらんばい!」というやつだ。

だが、遠回しな物言いでは腐っている変態脳にはわからないのか、アレ公はきざったらしく髪をかき上げる。

その自慢の金髪、わっしわっしとむしってやるうか?

「シャイだね、シオンは」

「おぬしは、勘違いの馬鹿だな」

ニコニコと私とアレ公は《一方通行》で《絶対零度》な会話を交わす。

そこでアレ公は、陸に剣呑な光を含んだ視線を向ける。

まったく、何てム力つくヤツなんだ!

乙女ザムライの刀の錆びにしてやるうか。

「やあ、ダサダサ超イケてないリク君。セクシーなハイレグ水着で、天から花畑に降り立ったボクのシオンの隣にいるなんておごましいんだよ、このイエロージャップが!」

「あ、その……」

顔を伏せる陸に代わって、私はアレ公を睨みつけてやる。

「仕方がない、僭越ながらこの紫苑ちゃんが、陸の言い分を言うてる」

「え!? な、何を言ってるんだ?」

戸惑いながら私の方を見てくる陸に、大丈夫だと一つ力強く頷いてやる。

おまけに色気を満点に含んだ流し目でのウインクも一つ送っておく。

こういうさりげない地味なセックスアピールの積み重ねがフラグ成立の第一歩なのだ。選択肢でを選んでとても良い印象を与えたぞをゲットなのだ！

いつか伝説の木の下で、君となのだ。

「心配するな、陸。シンクロ率一二〇％。以心伝心しまくりだ。暴走して国家が一つ傾くくらいだ」

「そ、それ駄目なんじゃあ？」

「大丈夫だ！ 何も問題はない！ 正義ならぬ乙女は勝つのだ！」
不安そうな表情を見せるものの、力づくで陸を納得させる。

そう——乙女は腕力なのだ。

「いいか、アレ公？」

「ふむん？」

陸の言い分をキザったらしく噛んで含めるようにアレ公に言うてる。

「つまり陸はだなあ……あゝゴホン。

『うつせーんだよ、このチキン野郎！ 俺と紫苑は体も性格の相性もバッチリのラヴラブの鴛鴦夫婦なんだよ！ テメエみたいな白豚クラッカーの出る幕じゃないんだよ、このボケが！』

……って言うてるんだ。わかったでござるか？」

「ぐはあああああああッ！？」

「イイイイイイイエオオオオオローモンキイイイイー！？」

絶叫と怒号が、この場をヒートアップするように巻き上がる。

「よつくも、このリッチプリンス《カレーの王子様》にも勝るとも劣らない、この高貴で気高く華麗で美しくデンジャラスなこのボクにそんなポイズンを吐くとはッ！ いくら……言いたいことが言えない世の中とはいえ、許さないぞ、この下級貧民が！」

憤怒の表情で口から泡を飛ばしながら、アレ公は陸を嚇怒の眼差しで刺し貫く。

ただならぬ私たちの会話に、いつしか周りの人々が好奇の視線を湛えて私たちを見つめていた。

その好奇の視線に陸は混乱してしまったようだ。

「ば、ばばば、バカーッ！　むしろ、アホオーッ！　紫苑のアホ！　信じた俺もアホだけど、何がシンクロ率一二〇%だよ！？　以心伝心してないじゃないか！？　こ、ここ、この淫乱ッ！　ユニゾン失敗だよ！　第三新東京市壊滅だよ！」

「む……てい」

突っ込みを放つ陸の手を、巧みにアレ公の方に弾いて受け流す。
「というか、気のせいかな？　なんか陸の本音が聞こえたかのような気がしたが？」

ばしっ。

陸の突っ込んだ手は見事にアレ公の額にビシッと命中した。

「あ……！？」

空気も凍るような声を零して陸は絶句。

突っ込んだポーズのまま彫像のように動きを止める陸。

「フ、フフ……やってくれるじゃないか——」

まるで尻尾を気円斬かなにかで切り落とされた三回変身できる異星人の笑みを浮かべるアレ公。

アレ公は胸元からバラを取り出して口に咥えると、自分の手から白いシルクの手袋を外し、陸の胸元に向かって投げつけた。

「決闘だ！　この愚鈍ボーイめ！」

「そ、そんな！？　お、俺は……！」

慌ててアレ公に謝ろうとする陸の後ろに素早く回り込むと、陸の代わりに答えてやる。

「『おおよ！　望むところだこの変態外人め！　国に帰りやがれ！　紫苑はこの陸様の小猫ちゃんなんだよ！　この猫を触って可愛くって、色々な十八禁的な意味でニヤンニヤンしていいのは、この俺

様だけよ！ 身の程を知りやがれ、この豚ッ！ 豚豚ッ 白豚野郎めッ！ ケツにファックするぞ！ ファツキンガイ！』」

ホール全体に響き渡る私の自慢の作り声。

陸を知る者が聞いたら、あまりに陸そっくりの声に驚愕を感じえないだろう。

今日は大奮発だ！

これぞ、敵を撃沈する紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ザムライ七色声変化》だ！

「こ、この下賤で、下等で、愚劣で、糞ッたりやゝの分際で！ このボクによくもそんな口を……！」

「ち、違う！ 今のは俺じゃない！」

アレ公の怒りの形相に、陸は慌てて首を横に振って無実を必死にアピールするが、今更無駄でござる♪

電車内で痴漢と叫ばれ、指さされた瞬間、男は絶対絶望なのだ。家庭崩壊、職場復帰ならずだ。

「勝負だ、リク テンドウ！ パーティーらしく、ダンスでな！」

アレ公の声がパーティー会場に響いた。

それは——デュエルの幕開けの合図だった。

紫苑

《綾崎

アレ公がパチンと指を鳴らす。

瞬間、ホールが中心がゴゴゴゴゴという文字を背負って、少しずつせり上がってくる。

瞬間間に舞踏場のようなものができあがると、円舞曲の演奏が始まった。

「ウヒヤヒヤヒヤ！ 庶民のキミにダンスが踊れるかな？ 踊れるかな？ ヘラヘラヘラリン！」

まあ、このボクのような選ばれし特権階級にはダンスなんて御茶の子さいさい、へそが茶を沸かすさ！ ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

化鳥のような哄笑に眉をしかめる。

アレ公は歪んだ暗い笑みを顔中いっぱいに刻みながら、四方八方にバラを撒き散らしている。

「り、陸……ッ」

不安げに陸の名前を呼ぶ。

私やアレ公のすつとこどっこのように……俗に言う金持ち連中なら、嗜みにダンスを踊れるかもしれない。

だが、陸はこういう宴に出ること自体初めてなのに、まして踊りを踊るなどとは、何をか言わんやだ。

軽率な自分の行動に恥じた。

そう……陸を窮地に追い込んだのは——ただならぬ私なのだ。ど、どうしよう……！

「紫苑、そんな顔するなよ」

思いのほか言葉に力が漲っている陸の声音に、驚いて顔を上げる。迷惑をかけて、淫乱、痴女、アバズレとなじられてもおかしくない状況なのに……

それなのに、顔を上げた先にはいつもの穏やかな陸の微笑があった。

「大丈夫。この曲なら……」

「さあ、未来のボクの花嫁！ 荒廃した大地のひつのボクだけのオアシス！ 天から遣わされたボクだけの天使！ ミラクル・スーパ―・ゴージャス・ガール・シィオオオオンツ！ 今日もキミは綺麗だ可憐だ、嘗め回したいツ！ さあこのボクと踊ってくれ！ どうよ！？」

陸の言葉を遮って意味不明なことをほざくアレ公に、鋭い一瞥をくれてやる。

「断る」

そう簡潔に答える。

「ゲハアアア！？」

盛大にずっこける音が聞こえてきたが、無視無視。

それよりも陸の方を振り向く。

目の前の少年は丁寧にお辞儀をする。

それは別人のようで、暫し瞠目する。

そのお辞儀に見惚れていると、少年は私の右手を取り、その甲に軽く触れるくらいの口づけを落とす。

「……………ツツツ！！！！？？」

瞬間、湯沸し気のように私の両頬が赤く染まる。

お、おおおおおぬしそれはいささか反則でござらんか！？

心の中で《ときめき》の弾丸が私の心臓をズギューン！と射撃する。

そう——私の心の《ときめき》の導火線に火がついた瞬間だった。さながら私の心のBGMでふしぎ遊戯のED《ときめきの導火線》が流れ出す。

私は絶叫した。

（撃たれたツツツツツ！）

——何にだと？ 決まっておろう！

（恋の凶弾にだツツ！）

私はまさに今、目の前の少年に二度惚れた。

「よろしければ、今宵……刹那の間で構いません。俺の——花
となってくれませんか？」

そつと目の前に少年の——陸の手が差し出される。

「よ、喜んで……」

頬を染め、恥ずかしさと嬉しさで顔を伏せながら、緊張を隠しつつ、差し出された陸の左手に、自分の右手を重ねる。

陸は私の右に立つと、突然の変貌に戸惑う私をよそに、手慣れた仕草で舞踏場にエスコートしてくれる。

後ろからアレ公の呪詛めいた叫び声が聞こえてくるが、アウト
オブ 眼中だ。

いつものように穏やかな微笑を湛えてくれる陸もいいのだが、少し強引で強気で、それでいてミステリアスな陸も、なかなかどうして……！ 凄く魅力的だ！

ヤバイ！ 惚れる！

いや、惚れているのだけど、なおいつそくに！ 留まることを知

らず！ 天高く舞い上がる昇竜の如く！

だ、ダメだ！

す、好きになる！ 好きになってしまう！

周囲に人がいなければ、陸に身体を支えられていなければ、赤い顔を両手で隠して、首をいやんいやんとして、座りこんでいたかもしれない。

完全に腰砕けの状態だ。

最終ラウンドのボクサーだ。

テンカウント前。

洗練された陸の動きに《心配》の二文字は消えていた。

そして、私たちは舞台場の上に立った。

今、乙女の時が始まる！

第二十二章 ナイトパーティー 後編 その1 夢の叶った夜

《綾崎 紫苑》

舞踏場の真ん中に立つと、陸と私は音楽に合わせて踊り出す。

今——まさにナイトパーティーが始まった。

穏やかだが、心が湧き立つワルツの曲は、今の私の心情を表しているように弾んで聞こえた。

シャンデリアが放つ煌びやかな光の泡の中、私たちは重なり、少し離れ、また重なる。

手を取り合い、重ねた手のひらにぬくもりが伝わる。

その温かさは掌を通して腕へと登り、心臓に伝わるようだった。それは少女の頃。

つたないただの妄想でしかなかった——お姫様になりたかったという想い。

愛しい陸の腕に抱かれ、ロマンスの階段を登っていく。

私が小さな頃に憧れた夢。

それが今、現実としてここにある。ここに形という輪郭を伴って、

今まさにある。

たとえ、これが今のパーティーの刹那の間だったとしても……待ち望み、焦がれていた時を体験したことによる興奮が総身を包む。

（ああ……っ！）

目の前で陸が私を見て、穏やかに微笑んでいる。

その笑顔は子供の頃と変わらない。幼い頃に魅せられたその笑顔がそこにあつた。

繋がれた掌は暖かくて、重なった視線は確かで、触れ合う心は震えている。

夢が——叶った。

リズムに合わせてターンし、私の腕を引いて、私をリードするように陸は滑らかに踊る。

談笑のざわめきが遠い。霞みがかかった頭の中でワルツの音を頼りに、掻き分けていく。

もうほとんど陸のリードにまかせっきりだった。

白い煌びやかな光が降り注ぐ中、きらきらした光に包まれながら、私たちは踊る。

踊り続ける。

「凄いな……陸。踊れるなんて知らなかったでござる」
感嘆した私の呟きに、陸は微笑する。

「実はさ……種を明かすと、学校のオリエンテーションの催しで習ったんだ」

「そうなのか……」

そこでツキンと湧き上がっていく胸の痛みを感じた。

「なあ、陸……」

「ん？」

俯きながらの小さな私の呟きは、周りの音に消し去られること無く陸の耳に届く。

「学校の催しの……その時——」

よせ、無粋な。とまれ私の唇。

そうは念じながらも、私の口は止まらない。

今更、問うてもしかたないことだというのに……わかっているのに……顔を上げた。

きっと情けない顔を私はしているだろう。

「その時、陸の隣にいた女子おなこは誰だ？」

「あ……クラスメイトだけど……」

「そう、か。ふっ……何故かな。私はその女子が……少し羨ましい顔を横に逸らし、緩く笑みを浮かべる。浮かべようとしたり。

それはひどく脆い笑みの仮面で、そうでもしないと私は……まともにも陸の顔を見れない。

「できれば……できれば私がその時——陸の隣にいたかったな」後悔が胸を衝く。

不意に夜会の煌びやかさがこの身から遠ざかったように感じた。きっとシンデレラも0時の鐘を聞いた瞬間、こんな気持ちだったに違いない。

「なんでやねん」

だが私の王子様は関西人だった。

陸は右の人差し指で、私の額を軽くデコピンする。少し痛かった。叩かれた額に手を添えて、驚いて陸を見上げると、陸は逸らせないくらい真っ直ぐに私を見て言った。

「紫苑は今、俺の隣にいるだろう」

今初めて気が付いたかのように瞳を見開く。

そう今、私の隣にいるのは紛れもなく陸だ。

この瞬間は陸のクラスメイトの女子ではなく、私が陸を独占しているのだ。

「……そう——だったな」

「もう……もう紫苑以外を隣に立たせたりしない」

「……ッッ！」

その真摯な告白に私は喉が干からびたように乾く。

視線をどこに定めて良いかわからなくなる。顔が……凄く赤くなっているのがわかった。

まるで全身を駆け巡る血が一箇所に集まってしまったのではないかと思うほど。

この男はたったそれだけの言葉で私を支配する。

「や、約束だぞ！」

なんとかそれだけを陸に言う。

「ああ、約束だ」

その約束を誓ってくれた陸の確かな声にどれほど私の心が震えたか……どれだけ嬉しいか、それは恋した乙女でなくては、わかるまい♪

《アレッ

クス・バグネット》

（こんなバカなツッ！）

両眼に映るのは愚民リク・テンドウ。そしてその隣にいるシオン！
二人のダンス姿を見て、齒軋りをする。

あんなとろけるような笑顔を浮かべ、涙ぐみながら頬を赤く上気させるシオン。

そんな世紀のプリティガールの隣にいるべき相手は、ボクのはずなのにいッ！

なんという失策だろうか！

そう……さながらアールグレイの香りが嫌いなレディにアールグレイのお茶会に誘ってしまったかのような地雷原でずっとこけることき失策。

髪形を変えても切ってもないのに「髪切った？」とか聞いてしまったようなダメさ加減。
クールだ。

クールになれ、ゴージャス・エクセレント・ハンサムなアレックス・バグネット。

今のボクは執事のエドワードと手を取り合い、悔しさにハンカチを噛み千切らんばかりにリクを睨み付けながら踊っているのが現状。何この現状！ どうしてこうなった！？

お互いを見つめ合う奴隷スレイフと美姫プリンセスの二人。

その唇は、いまにもくっつきそうだ！？ あ、ああああー

ッ！ 危ない危ないよ！ 触れそう！ ちよつと気をつけて！

そのトキ メキ映像が、さながら地球に衝突する巨大隕石――

―アルマゲドン！

（ち、ちくしょおおおおおおおおおおおーッッッ！）

覚醒したバトル民族のように雄叫びを上げる。

あの衝突を止めなければならぬ！

でなければ惑星が綺麗な花火になってしまう！

高貴な血プライムが誇りとともに燃え上がる。

「エドワード！」

「はい、坊ちやま」

手を取り合い、華麗なターンを決めるボクとエドワード。

「これより目標を《木馬》と呼称！ 我々の暗号名は《ガウ》！
ノブレス・オブリージ
作戦名」

「かしこまりました」

ボクとエドワードは回転しながら、シオンたちへとそろりそろりと忍び寄る。そうさながらキャットのように。

それは荒波にさらわれた犠牲者に襲いかかるジョーズの如しだ。

見つめ合うリクとシオンの唇は、さっきよりも近くなっている気がするッ！

奥歯をギリギリと噛み締める。

念じるだけで人が殺せるならばッ！

リクはこの瞬間にも心停止しているだろう。それほど凄まじい眼光をリクの横顔に注ぐ。

（やらせはせん！ やられはせんぞおおッ！ 貴様ごときにやらせはせん！ このボクの栄光、このボクのプライド！ 全てに賭けて貴様の思い通りになどさせるものか！）

だが、ああー……ッ！？

い、今にも、ヤバイ！ あの麗しのセクシャルな唇が、あの愚民に思うがさま貪られようと……ッ！？

背筋に走る戦慄。

もう迷う暇も体裁を気にする余裕はない！ エドワードの名を呼ぶ。

「はい、坊ちやま」

「こうなったら《ガウ》を《木馬》にぶつけてやるッ！」

「しかし、そうなれば我々もただではすみません。坊ちやまの――

――社交界の貴公子と謳われた坊ちやまの経歴に傷がつくことに……」

「経歴を気にしている場合ではないッ！ かのバトル民族の王子も言っていた。たとえ名誉を失ったとしても、誇りだけは思い通りにはならんぞッ！ とかみたいな」

ゴージャスな金髪を振り乱し、エドワードのグレイの瞳を説得する。

「……かしこまりました」

「よしきた！ あらほいさっさーッッ！」

素早くスピン。爪先のエネルギーを前方向に変換。

我が王道を遮る観衆どもを弾き飛ばし、ボクとエドワードは疾る！
すさまじい勢いで外道愚民リクへと接近！

――思い通り！

この速度でぶちあたれば、あのキスを邪魔できる。

策略家が「勝利」を確信した瞬間のように瞳を爛々と輝かし、悪魔的角度でボクの口端が吊り上がる。

リク！ キミはチェスや将棋でいうチェックメイトにはまったんだよ！

—— 思い通り！！

いや、それどころか。

リクを弾き飛ばし、ヤツがいた場所にボクが居座り、ボクがションと踊る！

キミに敗北という名のガムをたっぷり噛ませてあげるよ！

延長10回裏、二死満塁でサヨナラホームランを受けたピッチャーの気分を味あわせてやるよ！

イチローに打たれた韓国のピッチャーの気持ちだ！

—— 思い通りッ！！！！

エドワードがボクの右腕をがつしりと掴む。

そしてジャイアントスイングの要領でボクをグルグルと強回転！
瞳を勝ちの確信に輝かせ、床を踏み締め、肩と尖らせた左肘をリクの横腹に当てるべく、回転の勢いをコントロール！

「はっ、なっ、セッツ！」

ボクの合図にエドワードの腕が離れる。

そ・し・て。

ボクを空を引き裂き、解き放たれた矢となり、わかりやすく言うならば旧ザクのタックルのポーズでリクめがけて走る！

「きい—— エエエエエエエエエエエエエエッ！」

—— リクッ、ボクの勝ちだ！

怪鳥の如く雄叫びと共に突進、邁進、爆進！

今、ボクは壬生の浪である狼新撰組—— 三番隊組長の斎藤一

の牙突を超えた。

刹那、リクがボクを見た。

ボクの凶行に気がつく、リク。

だが、遅いッ！

トンマ、ノロイとしかいいようがないよ！

（ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！）

わずかに上体を逸らすリク。

シオンから手を離し、僅かに腰を落とした構え。

ハッハハアーン、甘い、甘いよ、まるでガムシロップのように

甘い！

「それで避けたつもりか、—BAT^はTU^たTOO^うSO^うAA^あEE^いいッ！」

今のボクは闘牛、猛牛、狂牛！

むしろクレイジーダンプ。

そんなことで、ボクの狂気の突進が受け止めれるものか！

夫に浮気され、包丁逆手に突っ込む妻の気分。

最高の気分だ……最高に「ハイ」ってやつだ。

待ち望んだボクの最高の瞬間が、すぐそこまできている。

「くたばれッッ！」

刹那、リクの両腕が魔法のように動いた。

次の瞬間、ボクは天井を見ていた。

そして、背中が床に激突、激しい呼吸困難に襲われる。

「グハゲホ！？　ば……………バカな！？　な、なぜ、なんだこれは！？」

仰向けに倒れこんだボクの瞳が……………リクを——捉える。

ボクを見下ろしているリクをッ！

奥歯を噛み締める。

ごろりと寝返りをうつように転がり、うつ伏せの姿勢へと体勢を入れ替える。

「ご、ごめんアレックス君。とっさに投げちゃった。実は俺、合気

道の段持っているんだ……」

(ふ、ふふふふ、ふざけるな——ツツツ!!!!)

内心で絶叫する。

こんなことが許されているのか！

こんなことが許されていいのかッ！？

なにそのとってつけたような主人公補正！ ざけんなよ！ 何それチート！？

こ、こんな展開認められるか！

けれどボクは精神力とは裏腹に、肉体に受けた衝撃に、意識が…

…視界が、
□ □ 明滅 □ □ 暗い……
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

第二十四章 ナイトパーティー後編 その3 夜会の終わり

《天堂 陸》

ナイトパーティーは、煌びやかな思い出とハプニングに包まれて幕を閉じようとしていた。

紫苑は用事があると俺に告げ、会場を後にする。

紫苑の白い背中を見送り、しばらく所在なさに立ちつくしていたが、撤収作業の邪魔になると思い、会場から出て外で待つことにした。

上気した頬に、夏の夜風が気持ち良かった。

今夜のダンスは学校のオリエンテーションで踊った時よりも、うまく踊ることが出来たと思う。

去年はペアの相手に凄く迷惑をかけたと言うのに……

「紫苑がペアだったからかな……」

呟いてみて赤面する。

キザすぎるし、ガラじゃない。

俺には似合わないセリフだ。思えば、今夜は似合わないセリフと

行動のオンパレードだったように思う。

今更のように羞恥が頬に登って来た。

パーティーの雰囲気、アルコールの摂取。

そしてなによりも寂しげな笑顔の紫苑がきっかけで、俺の心は抑制が壊れてしまったように思う。

俗に言う弾けてしまったってヤツだ。

不思議と後悔はない。

いや、それどころか——上気した頬が、いつもよりも大きく脈動する心臓が、俺のしたことが間違いないと肯定してくれているような気がした。

と……

「……紫苑？」

夜空を見上げていた俺は、人の気配を感じて振り向く。

そこにはアレックス君がいた。

当然だ。いくらなんでも紫苑が戻ってくるのは早すぎる。

この展開は予想してしかるべきだった。

「庶民とは言えど、ダンスくらいは踊れるようだね」

はつきりとした敵意を瞳に浮かべて、アレックス君は俺に語りかけてきた。

アレックス君が怒っているのは良くわかってるつもりだ。

彼自身が一緒に踊るのを紫苑に断られたのに、自分の婚約者と他の男がダンスを踊ったら、気分が悪いのも当然だろう。

さらに言えば、今回のパーティーに参加していた大勢の前で派手に投げ飛ばしたとくれば、怨まれて当然というものだ。

他の男——つまり俺は凄惨な邪魔者だろう。

「……………」

俺は何も言えずに黙り込む。

口火を切ったのはアレックス君が先だった。

「キミにはシオンを幸せになど出来ないさ。ムダさ、ダメさ、ムリさ！ だいたいキミになんてシオンは相応しくないよ！ 考えても

「ごらんよ、浮浪者に宝石なんて、似合わないだろう？ 不相応つてものさ。そもそも家柄……育った環境が違いすぎるんだ。奴隷のキミに王女のシオンは釣り合わないのさ！」

アレックス君の糾弾が心に突き刺さる。

自分が良くわかつている事実を指摘され、唇を噛み締める。

胸中で渦巻いている思いは、悔しいと言う感情だろう。こんなに悔しいと言う感情を強く感じたのは初めてだった！

「フフン、悔しいかい？ 悔しいかい？ せいぜい悔しがればいいさ。」

アレックス君は傲然と顎を反らし、その端正な容貌に嘲りを刻み、言った。

「キミは無力なボーイさ」

この時に俺を突き動かした要因は何なのか？

アルコールのために大きくなっていた気持ちか？

または、悪口に対する純粹な怒りか？

それとも、俺の欲しいと思っっている立場にいるアレックス君に対する嫉妬か……

「どんなにお金があつたつて、裕福で不自由のない暮らしをしていても！ 縛れないものがあるだろッ！」

気が付けば、俺はアレックス君に言い返していた。

まるで臆する身体を、戦慄く唇を律して、気持ちが飛び出したようだった。

「何……？ そんなものボクにはないね」

傲慢な、自信に彩られた表情を見せるアレックス君。

その傲慢さを削るために、俺は鋭く指摘する。

「人の心は絶対に縛ることなどできない！ 現にアレックス君は紫苑を縛ることができないじゃないか！」

「ッ！？ う、うるさいぞ！ 庶民の、それも低能の分際で……ッ！」

アレックス君は刺し貫かんばかりに俺を睨み付けてくるが、ふと

何かに気が付いたように口の端を吊り上げる。

「そうか……！ キミはボクとシオンとの仲に嫉妬しているんだな？ ムダだぞ、ボクたちは親が決めたフィアンセなんだ！ キミの割り込む余地はゼロさ！ 無さ！ ナツシングさ！」

（そんなことはわかっている！ わかっているさ！ 誰よりもそんなことはわかっている！ けど……ッ！）

熱に浮かれたようにアレックス君が続ける。

「ハハハハハ！ 嫉妬かい？ 全く子供だね。潔く身を引いたらどうなんだい？ だいたい嫉妬なんてチャイルドがすることさ。キミは随分と幼いね、幼稚だね、ガキだね。ベイビーだね」

拳を硬く握り締める。

心を中心に身体中が熱を帯び、いよいよ得意絶頂に激しくなる目の前の男の語調が煩わしかった。

「嫉妬もできないようじゃ——その恋愛は終わりだろッ！」

鋭い踏み込みの音が石畳を叩く。

気がつけば強く硬めた右拳を、アレックス君の左頬へと叩きつけていた。

アレックス君の方が上背もあつたし、体格は当然、俺よりもいいだから、アレックス君が上体を反らしながら堪らず芝生に尻餅をついた時、俺はあまりのあつけなさに驚いてしまった。

ぽかんとしたアレックス君の表情が、瞳を見開いた驚愕の表情へと変化するまで時間はかからなかった。

「な、殴った……？ このボクを……？」

「ああ、殴ったさ」

罪悪感がこみ上げてくるが、それを努めて圧殺する。

アレックス君は俺に殴られた左頬を押さえ、内股に座り込みながらブルブルと小動物のように震えながら、微妙に破綻した精神状態で言葉を紡ぐ。

「せ、世界に多くの企業を持つ巨大複合企業経営者の社長の一人息子にして、せ、世界の財閥の五本に指に数えられるほどの家柄の息

子。じ、実はハプスブルク家の親戚で、高貴な血筋をひくバグネツト家の跡取り主を……せ、政界にまでその実力は及び知れるこのアレックスを……殴った!？」

顔がさーっと青ざめる。

人を殴ってはいけないと言う倫理に外れた行為に青ざめると言うより、殴った相手が超超大物だと今更に気が付いて青ざめた。

「殴ったこのボクを……コノボクヲ!？」

裏返ったアレックス君の語尾がいよいよ怖い。

アレックス君の震えが激しくなり、まるで痙攣しているかのようだ。

そして彼は絶叫した。

「パ、パパにも殴られたことなかったのにイイイッ!？」

「お前はアムロカッ!？」

よせばいいのに、関西人に流れる血がそうさせるのか、つい条件反射で鋭いつつこみを入れてしまう。

「ボクにつつこんだ!？」

「やかましいッ!」

戦慄の表情を見せるアレックス君に、再度つつこみをいれる!とうとうアレックス君は両目に溢れた涙を盛大に零しながら、泣き叫び、滂沱しながら走り去っていく。

俺といえば……なすすべなくアレックス君の走り去る背中を、複雑な心境で見つめていた。

「……やっちゃったな」

随分と時間が経ってからぽつとりと呟く。

アレックス君の言葉が頭の中で反芻される。

今回のいざこざは俺が悪い。

アレックス君に、凶星を指されて……我慢ができなかった。

彼の言っている事は正しい。

だけど……俺は……重たい気持ち、ため息となって漏れる。紫苑が戻ってくるまで、右拳の熱い痺れを抱えて立ちつくす。目

まぐるしい思考の渦に飲み込まれ、そこに佇んでいた……。

第二十五章

Night of Damocles

《天堂 陸》

今、右手の上には、ホームセンターで購入した扉の力ギがある。
店員さんお勧めの、強力な力ギを扉に取り付た。

相手が恋に狂った武将である紫苑とはいえ、おそらくこの関所を
突破できまい。

多分……いやきつと！

布団を頭までかぶり、部屋の明かりを消す。

闇夜が押し寄せてきた部屋の中は心細い。じっとりとした汗を滲
ませ、ただただ部屋のドア——心の障壁——をじっと凝視
していた。

寝付くまでの間、祈りをこめてずっと………

《綾崎 紫苑》

空音殿にあてがわれた部屋に敷いていた布団からムクリと体を起こす。

今は草木も眠る丑三つ時。

「今宵こそは必ず陸を落とす！」

双眸に凄絶を煌かせると、今宵、必要になるかもしれないモノを手に取り、部屋からそっと出た。

陸の部屋までやって来ると、寝巻きがわりに着用している陸のYシャツ（勝手に拝借したでござる、忍々）の胸ポケットから針金をキュピーンと取り出す。

あたかも必殺仕事人の如く。

紫苑ちゃんは瞳を闇の中で、血に餓えた獣のようにギラつかせる。精巧にして緻密な動きで鍵穴に針金を突き刺すと、長年の勘とプロ意識を信頼して、ガチャガチャする。

数秒して、ある感情が私を支配した。

「……飽きたでござる」

やはり、こういうチンケな夜這いは紫苑ちゃんらしくない。

ここは大胆不敵、容赦無用、強大無比に夜這いせねば、ご先祖様に申し訳がたたないというものだ。

必要になると思って持ってきたモノはズバリ、腰にさした日本刀だ。

バリッ。

紫苑ちゃんの気合と情熱、そしてねちっこい欲望がブレンドしたラブは、陸のパジャマを縦横無尽、四面楚歌、絶体絶命の強引恋愛最高と言つ塩梅に引き千切る、乱れ千切る、碎き千切る！

ぬふふ……ラブでござる♪

粉碎、玉碎、大喝采！

どこぞの玩具会社の若社長のように雄叫びを上げ、双眸に星を宿す。↓（ω）

「い——やあああああああッ！？」

体の上半身を覆う邪魔なパジャマを破かれて、陸は私の快樂中枢が刺激されるような色っぽい悲鳴を上げる。

全く……私をこんなに昂らせるなんて、なんて罪なやつだ。許し難い。お仕置きの時間だ。

愛の極刑に値するなこれは♪

が、しかし！

パジャマが破れたせいで、当然の如く、陸の上半身が露になる！海へ行つたせいで程好く日焼けした褐色を帯びた肌。

均等のとれた体格には、綺麗に筋肉がついている。

もし私が吸血鬼ならば噛み付きなくなるような首筋。キスマークの欲求に駆られそうな繊細な鎖骨の輪郭。胸からあばらの流麗なフォルム、引き締まった腹筋に細い腰元。可愛い《おへそ》と来たら、もう堪らないッッ！

「陸うつつうつつッッ！」

むうつつうん！ キタキタ！ 紫苑ちゃん覚醒の波動で霸道、破道でござる！

「私は——乙女をやめるぞおおおッッッ！」

鼻血ものの破壊力を秘めていた恐るべきカリスマボディを前にして私の理性が音速で飛ぶ。

大気圏突入だ！

だが、あまりの興奮を前にして鼻に熱い衝動。

「むう、鼻血が……」

鼻に流れる赤い液体の存在を感じて、慌てて顔を上に向け……

「助けて、神様ッ！」

「ぬ、迂闊ッ!？」

鼻血に気をとられ、陸を拘束していた手を緩めた一瞬の隙につき、陸は脱兎の如く逃げ出し、素早く押入れの中に閉じ籠もる！

「おのれ……！」

夜叉の表情で毒づく。

なんとという失態、何という迂闊！

インフルエンザ蔓延で臨時休校中、自宅待機せずに遊び歩く中高生くらい迂闊だ！

素早く両方の鼻孔にティッシュを突っ込むと、陸が閉じ籠もった押入れにライジングサンの勢いで駆け寄る。

その勢いのまま閉ざされた襖へと疾走。

足裏の床を鋭く蹴り付け、起立の姿勢で斜め四十五度の角度で跳躍――

「ねりゃあああああああッ！」

――押入れの襖へと頭から突っ込む。

これぞ、紫苑ちゃん七つというか、もう七つ超えているいるが、とにかく！

紫苑ちゃん七つの大技の一つ、その名も……

《乙女ザムライ人間テポドン》だ！

どうしようもない貧民国にも関わらず大国と強気な交渉で食糧援助だ！

つまりこの世は先にキレた方が勝ち、ゴネ得ゴネ得と班長も言っている！

破裂音と共に襖の生地が破れ、私の頭は襖を突き破つて押し入れへと、頭のみを侵入を果たす。

暗闇の中で陸と瞳が合う。

「ぎゃおオオオオオん————ッッ！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アーーーーッ!?」

私は咆哮した。陸はとろけそうな悲鳴を上げる。

その勢いで鼻の穴に突っ込んでいたティツシュが抜ける。

ギロリと押入れの隅で震える陸へと双眸を向ける。

「ぎひい
い
い
い
い
い
い
い
ッ
ッ
! ?」

闇夜に車のヘッドライトの勢いで輝く私の眼光を見るや否や、陸は襟図かずおさんの出てくる登場人物風に顔を歪ませて絶叫した。言うならばムンクの叫び。

すぐさま脅えた子羊りくに襲いかかろうと、身体を、身体を……む、む、

むう？

「う、動かない……！」

戦慄に身を震わせる。

（おいおいマジかよ、ジーマー？）
↑ 動揺のあまりチャラ男風

頭は押し入れに侵入を果たしたものの、首から後ろは未だに押し入れの外だ。

めう、巧みに押入れに誘い、私の身動きを封じるとは……！！

なんと狡猾な！

ギリギリと奥歯を噛み締める。押入れの中に、私の歯軋りの音が鳴り響く。

「ひい
い
い
ッ
ッ
！」

眼前の私が、身動きがとれないと悟った陸が、這うようにして押し入れを飛び出す。

「ま、待てー！ー！ 待たぬか！ 私をこのままにしておくつもりか！ これでは痴漢がやってきたら、魅惑の紫苑ちゃんの安産型でたわわな桃尻を触り放題ではないか！ おぬし、それでも《もののふ》かぁーッッ！？」

「そ、そうだな。このままにしないとまずいよな！」

部屋から逃げ出そうとしていた陸が踵を返す気配が伝わってきて、デスノのライトばりの笑顔で笑う。

（クッククク、馬鹿め！ 自由を取り戻し次第、すぐさま組敷いて一晩中、にやんにやん言わしてくれるわッ！ 今夜は眠れると思うなよ、陸ッ！）

陸の馬鹿さ加減を愛しく思いながらも、憎さ百倍。

愛の拒絶の仕返しは、常軌を逸すると思うがいい！

そう—— 今宵の紫苑ちゃんは荒武者と知るがいいわ！

普段は清楚で可憐、でも寢床の上では性欲絶倫が紫苑ちゃんの本性よ！

滾るアドレナリンに心をトキめかせていると……ふと違和感。

「む……なにやら私の身体に布団が何重にも巻かれているような気がするんだが……」

あいにくと頭は押し入れの中なので、外の部屋というか陸の様子は伺い知ることは叶わない。

「ああ、勿論さ！」

にもかからず、どこぞの دونالد のように親指をビシッと立てていい笑顔を浮かべた陸が見えたような気がした。

「……どういふつもりでござる？」

「決まっているじゃないか！ 紫苑の身体を布団巻きの簀巻き状態にして、紐で縛るんだよ！ じゃないと逃げ出した後に追いかけてきそうだからな。万全を期して紫苑を捕縛しとかないと……」

「な……ッ！？」

やはり頭を襖に突っ込んだまま、暗い押入れの中で戦慄する。

敵軍へと突っ込んだ瞬間、背後から奇襲されたときの武将の気持

ちがわかった気がする。

し、しかし、まさか。

そ、そう来たか……これは認識を改めなくてはいけないようだ。坊や坊やと思っていたが、なかなかどうして……！

ゴクリと喉を鳴らし、震える声で陸へと賞賛を投げかける。

「陸、まさか縛る性的趣向があつたなんて……なかなかの鬼畜ぶりに紫苑ちゃんドキドキだぞ？」

両頬を染めて、イヤンイヤンと首を振る。

「な、な、な、な、なんでやねん！？」

「ふふ、隠さなくても良いぞ。それでも紫苑ちゃんはそういったアブノーマルな嗜好にも対応できるぞ。まあ、私が陸を縛るという当初の予想とは違ったが、なかなかどうして……こういうのも悪くはない。そうだ、私の部屋に手錠や首輪、蝋燭に三角木馬があるぞ？」

「ば、ばば、馬鹿たれー！ ツツツ！ そんなの使うかツツ！」

パシン！

「はふん！？」

布団越しに尻へと衝撃を感じて頭が持ち上がる。

「す、スパンキングとは、一体いつの間にそんな高度な性技を……？」

「な、なんでやねん！ このいい加減にいい——ッ」

陸の手が天上高く振り上げられる気配、振り下ろされる陸の手のひらを想像し、振り下ろされるまでの時間——その永遠にも刹那にも似たこの胸に去来する感情は……

「——しろおおおッ！」

そして、陸の手のひらが私の尻へと振り下ろされた。

《天堂 陸》

もう信じられない！

部屋のドアを真つ二つにして強引な夜這いもそうだけど、ここ最近……そうナイトパーティーが終わった後の紫苑の勢いは、はつきり言って異常だ。

いや、前もかなり凄かったけど、今は前を遥かに増して異常だ。そもそも夜這いというか、なんか夜襲の間違いじゃないだろうか？ だいたいこれが初めての襲来ではない。連日連夜毎夜この調子だ。昼も夜も関係なく跳びかかってくる紫苑に真剣に命の危機を感じる。というか、さすがにこれはやりすぎやろッ！

あげくにすぐに脱出できないように布団で簀巻きにすれば、

『ふふ、隠さなくても良いぞ。それでも紫苑ちゃんはそのいったアブノーマルな嗜好にも対応できるぞ。まあ、私が陸を縛るという当初の予想とは違ったが、なかなかどうして……こういうのも悪くはない。そうだ、私の部屋に手錠や首輪、蝋燭に三角木馬があるぞ？』

怒りの余り、俺がドメスティックバイオレンスに走っても仕方ないだろう！？

思わず勢いで紫苑のお尻を叩けば、

『す、スパンキングとは、一体いつの間にそんな高度な性技を……？』

俺の 中で 何かが——キレた。

それも数本まとめてブチブチと、結構太いはずの俺の神経は、ここ最近の紫苑の言動と行動のせいでズタズタにされていたらしい。

そう……これはアレックス君の頬を殴ったときと同じ感覚。

駆け巡る灼熱。

やりきれない現状。

(ああ——まずい……)

どこかで冷静な俺が言った。

「な、なんでやねん！ このいい加減にいい——ッ」

言ったけど、止まらない。

どうにも止められない。

止められるわけがない。

そして止める気もない。

悩ましく、期待している風に、お尻をくねくねと動かす紫苑のお尻を見ていたら……布団簀巻きでミノ虫ダンス踊られちゃあ——

——もう我慢できない！

俺の背後でコーンフレークのゴリラの霊が咆哮&ドラミングした。

「——しろおおおッ！」

そして、俺の手のひらが紫苑のお尻へと振り下ろされると同時に

「ちよっと陸、うるさいよ？」

「まあまあ陸ちゃん、夜は静かにしないと」

――部屋へと海と母さんが入ってきた。

そして、絶妙に一拍遅れて、

「はうううー……ん」

紫苑の快感と快樂の吐息が響く。

まるで狙っているんじゃないかと思うくらい、絶妙な……これ以上ないというくらいの。

部屋が凍りつく。

いや、凍りついているのは俺だ。俺だけだ。

紫苑は布団で簀巻きに丸められているにもかかわらずクネクネしているし、海と母さんは『ああ、なああんだ、なるほどね』というニヤニヤ顔。

クネクネ動く紫苑。

あろうことにか。

「り、陸う……もう少し強くても大丈夫だぞ？ それに布団越しじゃなくて直接でも……」

ダモクレスの剣。

そんな喩えが頭を走り抜けた。

古代ギリシャ神話のとある王が、その繁栄を称えすぎたダモクレスを天井から剣を吊るした王座に座らせたことから、繁栄の中にも常に危険が存在しているという意味にたとえられる。

この紫苑のお尻は……いや、紫苑そのものが、俺にとってダモクレスの剣なのだ、と。

俺はそう思い。

「いやゝゝ今夜は大収穫だ！ 紫苑ちゃん、軽くマゾ開 眼だぞ！」
今夜、紫苑はマゾを開眼し、

「陸……さすがにSMプレイはどうかと思うぞ（ニヤニヤ）」
海には性癖を誤解され、

「まあまあ陸ちゃん、激しいのね。初孫楽しみだわゝ名前考えとか
なきやね♪」

母さんには初孫の名前を考えさせるという破目になった……

「一体全体……なんでやねん……」

未だにクネクネ揺れる紫苑の尻を頭上に、がっくりと頂垂れて膝
をつく。

屈辱に四つん這いになった俺は部屋の床を涙で濡らすしかなかったわけ……orz

第二十六章 貴公子の憂鬱と令嬢の焦燥

ス バグネット』

《アレック

「ふう……」

ボクは小鳥の囀りにも似たセクシーなため息を吐き出す。

そして、ゆつくりとリク・テンドウに殴られた左頬を、自分の左手でさわさわと羽毛のようなタッチで撫でてみる。

頬は……あのパーティーの夜に殴られた痛みと驚きの熱を保っているように思えた。

驚きだった。

腰を抜かさんばかりの巨大な驚愕。マジでリアルでクールにしょんべんチビるかと思ったださ。

今まで、ボクに逆らう者など皆無だった。

しいて言うならNothing.

それも当たり前。

麗しく、華麗で、優美で、コケティッシュで、美しく、この世の美と権力を掌握し、財力も、知性も、品格も、全てを兼ね備えたこのボクに歯向かう者など————いるわけがない。

いや、今は……いるわけがなかったのに、だ。

「このボクを初めて殴った存在……」

全てを兼ね備えた完璧無敵のこのアレックスを殴った男……リク・テンドウ！

取るに足らない矮小な存在だったはずなのに、今やリクはボクの網膜に、そしてハートに鮮烈に焼き付くほど、無視できない大きな存在になっている。

思えばボクはあまりにもリク・テンドウのことを知らなさ過ぎる。ここはリクを念入りに多角的な視線で分析する必要があるだろう。確かシオンの身辺調査したときに、リクのこと調査させたはずだ。

「エドワード……エドワードいないか！」

「はい。坊ちやま、いかがなさいました？」

すぐにエドワードはボクの許に駆けつける。

なぜか……ボクは緊張し震えながら言葉を口に出す。

「……た、確かシオンの身辺調査をした時に……その……リクのことも調べさせたと記憶しているんだが……」

「はい。テンドウ様の調査も仰せ付けかりました」

「そ、それに少し目を通したい」

「畏まりました。只今、お持ちいたします」

「あ、ああ……頼むよ」

用件を伝え終えただけに、なぜか緊張で喉の乾きを覚える。

忠実に、無駄のない動きでエドワードはリクの調査書を保管している部屋へと急ぐ。

エドワードが調査書を持って来たのは、時間にして僅か数分だったはずなのに、不思議と長い時間がかかったように思えてならなかった。

「お待たせいたしましたし申し訳ありません、坊ちやま」

頭を下げるエドワードに、首を横左右に振って調査書を受け取る。

「ありがとう。行っている」

「は、失礼いたします」

慇懃に頭を下げるエドワード。

エドワードが部屋から退室したのを確認してから、ボクは調査書に視線を走らせる。

リク・テンドウ／天堂・陸。

性別・男。身長172?。体重60kg。血液型・O型。

備考に目を通す。

性格は穏和で実直な人柄。成績は優秀で、クラス委員を務めているらしい。

だけど――

「これだけではな……」

ボクは情報の少なさに落胆のため息を吐く。

やはり、ここはリクにもう一度会いに行く必要があるだろう。決意を瞳に込め、窓から見える澄んだ青空を見据えた。

焦っていた。

その焦りを少しでも紛らわせようと、空音殿からあてがわれた部屋
の窓を開ける。

どうして、夕焼けと言うやつはこうも何かに急き立てられるよう
な気分にするのだろうか？

私は陸と私の現状に歯噛みする。

アレ公が催した夜会での踊り……あのときの私は幸福絶頂だった。
しかし、現状は最悪とまではいかないが、漠然と好まない方向に
徐々に向かっていると思う。

（あそこで畳み掛けるべきだったのだ！）

ほぞを噛むが、いまさら後の祭りだ。

と、夏の終わりを感じさせる夕風が私の頬を撫でる。

それが私の焦燥を一層かきたてた。

陸の夏休みは残り少ない。

それは即ち、私の時間が少ないということに繋がる。

「いや……」

私の居所がもう完全にお爺様にはれてしまっている。

本家から迎えがくるまで——もう時間がないだろう。

私だって、手をこまねいて見ていたわけでない。

毎日、てやんでいな感じで『ラヴ アタック』を、昼夜を問わず
繰り返した。

けれど、いつも焦って陸を怖がらせてしまい、失敗してしまう。
「どうすればいいんだ……」

私にしては稀なくらい泣き言を吐いて、唇を噛みしめる。

実際にどうすればいいのか………答えがみえない。
わからないんだ……

視線を足元の畳に向けて、私は頭を振る。

「……………」

いや——本当はわかっている。

答えは陸の所にしかない。

そして、私の今後の答えを出すのは、陸だけだ。

陸の部屋へと行く。

陸の部屋の入り口には、真っ二つにされたドアがバリケードのように配置されている。

おそらく、私の侵入を拒むための障害なのだろう。

胸が痛かった。

寂しくて、苦しかった。

いつもの紫苑ちゃんならば、昨夜のように扉を平気で真っ二つにするくらいの行動力とラヴパワーを遺憾なく発揮して、余裕綽綽に目の前にある扉のバリケードを排除する。

でも今の私には——

——今の私には、目の前のバリケードが陸の明確な拒絶にしか見えない。

陸の拒絶を認識してしまうと、体の中で力が萎むのがわかる。

強い脱力感が全身を襲い、指先まで力が伝わらないような、鋭い無気力感が私を苛む。

私は拒絶されているのだろうか？

迷惑だと思われているのだろうか？

好きだとは思われていないのだろうか？

何よりも、

（私は陸に嫌われているのか……………？）

頭を横切る答えに恐怖する。

そんなことはない……………はずだッ。ないに……………ないに決まっている！

それなら——それなら、なぜ？

そして、

「どうして……涙が出てくるんだ？」

何なのだ、この胸の痛みは？

どうして……この感情の波はこんなに苦しいんだ？

まるで心臓を握り締められているようだ。

呼吸困難のように息が苦しくなって、背中を壁に寄りかかる。

（苦しくて……それよりも、もっと悲しい）

そんな、軟弱極まりない感情が私を支配する。

いや、支配しかけた。

そんな時だ。

私の左肩に手が置かれたのは。

「ッッッ！？」

ポンという響きが聞こえてきそうな気軽さと優しさが同居したような接触。

でも、余裕のない私は、そんな気軽さにさえ身を竦ませて、身体を震わせた。

驚いた私が振り返った先には——

「やあ、紫苑ちゃん」

——海殿がいた。

第二十七章 もどかしい関係

綾崎紫苑》

《

「海殿……」

振り返った先には、海殿が微笑んでいた。

こうして見ると、陸と海殿の容貌は双子のせいかととても似ている。けれども纏う空気が……雰囲気が違う。

同じ顔をしているのに、違う人なのだ。

それでも陸を思わせる微笑に胸が高鳴り、陸本人の笑顔と錯覚する。

けれど、胸を貫くのは痛みだ。

一体、最後に陸の笑顔を見たのはいつのことだろうか？

焦って、陸を怖がらせていた私は、陸の笑顔を曇らせてばかりだったのではないのか。

高まる恋慕を押し付けて、ただ陸を困らせていたのではないのか。私は陸に迷惑な女子だと思われているのではないだろうか……

込み上げてくるものを堪えきれない。

溢れてくるものを零してしまう。

「紫苑ちゃん……」

目尻から溢れて零れた悲しみの残滓——海殿の指先が拭うように私の目尻をなぞり、涙をすくい取ってくれる。

「うつつ、ひつく……か、かたじけないでござりゅ……」

優しくされれば、されるほど。

陸に似た顔で優しくされればされるほど。切なくて悲しくて、どんどん私は泣けてくる。

「紫苑ちゃん、今は泣くべきときじゃないよ」

悲しみの底なし沼に沈みこんでいた私は、海殿のその言葉に俯いていた顔を上げる。

「紫苑ちゃんの今までのやり方が全部間違っていたとは俺には思えない」

ゆっくりと。

噛んで含めるように海殿は静かな口調で続ける。

「でも、陸の声は聞いていた？ 想いをぶつけるだけじゃ進展しないんじゃないかな」

「陸の声………」

それはとても不思議な抑揚で私の胸に問いかけるように響いた。まるで何か、とても重要な核心にようやく手を触れたときのような。

目の前を覆っていた霧が晴れたときのような。

世界が広がり、透明感を増したような気がした。

「陸は奥手だからついつい迫っていく気持ちにはわかるけど……想いをただぶつけるだけじゃなくて、相手のことを気遣って陸の声を聞いてみたらどうか」

「私に陸の声を聞くことができるだろうか………」

自信も余裕も喪失していた私は、ついそんな弱音が突いて出る。

口にして後悔。

眉の形を困難に寄せて、顔を伏せる。

「できるよ」

海殿の強い断言に、私は縋るように海殿へと視線を向けた。
強い……でも優しい。

陸によく似た眼差しが私を見ていた。

「紫苑ちゃんならできるよ」

ひょうひょうとした表情で海殿は笑う。

「俺の知っている綾崎紫苑って女の子は、それができる子だよ」
胸が熱くなった。

両手の拳をぎゅっと握り締める。

私は……こんなところでメソメソするためだけにアメリカから帰国してきたのか？

否！

断じて否ッ！

泣くなんて、みつともない。強い者は、決して泣きはしない！
そして諦めないはずだ。

お爺様に逆らい、運命に抗い、私は未来掴み取るために陸に逢いにきたんじゃないか！

掌で乱暴に両方の瞳を擦ると、寄りかかっていた壁から体を離して、ちゃんと立ち上がる。

「ありがとう、海殿。おかげで勇氣百倍、常勝無敗、天下無双だ。
しいて言うなら顔を取り替えたアンパンマンの如し」

「はは、惚れ直した？」

「ふふ……陸の次にならな」

海殿の冗談めかした問いに、私もいつもの調子を取り戻してにやりと笑いかける。

「……………頑張れそう？」

「無論ッ！」

海殿の問いかけに答えるように背を向け、陸の部屋へと向き直る。
今の決意の気持ちが消えないうちに、扉のバリケードをどけて、

陸の部屋に入っていく。

「頑張れよ……紫苑ちゃん」

海殿の応援を背中で受け止めながら……

電灯が消え、闇夜に染まった部屋は当然ながら暗かった。それでも月明かりに照らされたベッドは、仄かに明るい。

陸はベッドにいた。

連日の襲撃で泥のように陸は眠っている。

耳を澄ませば、規則正しく安らかな陸の寝息が聞こえてくる。

夜から深夜へと変わる時間は、部屋を静寂に満たしていた。

窓へ視線を走らせると、風に運ばれた夏の匂いが鼻孔をくすぐる。

切り取られたような空間。

そんな穏やかな静寂が部屋にはあった。

陸のベッドへと近づくと、陸の顔を見つめる。……とてもかっこ

よかった。

少し躊躇すると、マナー知らずとは百も承知だが、陸の寢床に邪魔させてもらう。

陸の顔のアップと体温。

そして陸が私のすぐ隣にいるという認識が、心臓を一際大きく跳ね上がらせる。

動悸を激しくさせる。頬が熱くなるのがわかった。

そこで駄目押しのように、陸の無意識の癖が出た。

つまり……その……私は抱き締められることになった。

承知の事実とはいえ、この一瞬は頭が真っ白になり、まともに思考ができなくなる。

私はあたふたした。

そして、暫くしてようやく落ち着くと、勝手な行動の罪悪感のためか、視線を逸らしながら、けれどしっかりと陸の頭の後ろに両手を回す。

陸が起きないのを確認すると、大胆にも自らの身体を陸の体へと密着するように抱きつく。

いつもなら………いつもの私なら、抑えきれない笑みが顔に広がるはずなのに………今は………

私は泣きたくなるような幸せと、乾いた笑いを出したくなるような虚無感に囚われた。

（もう………嫌だ）

唇を強く噛みしめる。

このやるせない想いを振り払うように、陸に強く抱きついた。

「無意識の抱擁では………もう嫌だ、ッ」

初めは無意識でも私を抱きしめてくれれば、それだけで満足できた。

でも今は違う。

意識している陸に私を——綾崎紫苑という女を抱きしめてもらえなければ、意味がないんだッ！

「わかつ………て、いるの………か？」

涙腺が決壊。

涙で滲む視界。内心の激しい想いを吐露^{とろ}する。

「私はお主が、好きなのだぞ………っ！」

世界中の誰よりも私は陸が好きだ。

それは愛と呼べる感情で、陸と逢った時からずっと私の中にあつた想いだ。

誰にも譲る気はないし、誰にも負ける気はない。

私は陸が好きだ。

大好きだ。

でも、陸はどうなのだろう？

「教えてくれ……………陸は私のことが好きなのか？」

第二十八章 告白、そして……

《天堂 陸》

（な、何だ！？）

体が揺らされたり、誰かの声が近くで聞こえたような気がした。目を覚ましてみれば、腕の中には泣いている紫苑がいた。

紫苑の瞳は涙で溢れ、零れ落ちる涙が両頬を濡らしている。

紫苑の泣いた顔を今まで見たことがない。

だって紫苑は、いつも向日葵ひまわりのように笑っていたから……

泣きそうな顔は一度小さい頃にあっただけ、こんなふうに泣く紫苑は初めてのことだった。

と、またもや紫苑が俺のベッドに入り、身体が密着する……と言っ
うより抱きついていてる姿勢になっていることに気が付く。

（これは何と言うか………非常にヤバイッツッ！）

理性の警告に従い、慌てて紫苑から距離をとるために体を捻るが、
頭の後ろに回されていた紫苑の両手が、俺の体を縫いとめる。

「し、紫苑……っ」

「……嫌か？」

説得しようとした俺の言葉は、途中で紫苑の声に遮られる。

「え……………その嫌とかそう言うことじゃなくてだな」

その時、俺は気がつかなかった。
紫苑がどういう表情で、どういう想いで聞いていたのかわかんて気がつけないでいた。

ただ触れ合う身体と伝わる体温に、高鳴る鼓動を聞かれないように願うのが精一杯で…………

「私は陸に抱きしめてもらいたいし、陸を抱きしめたい」

いつもと違う紫苑の雰囲気飲まれてしまい、何も言えなくなる。
視線を外せなくなる。

そして、震えた。

これからの俺と紫苑との——二人の関係の変化に、心が波紋を惹き起こした。

それは未知に対する恐怖なのかもしれない。

決断するべき時の慄きなのかもしれない。

「私は陸が好きだ」

「…………ツッ！」

直球が来た。

迂回もなにもない。間も置かずに、ただ真っ直ぐな紫苑の一言。
今まで感じたことのないほど強烈で、鋭い熱をもった衝撃が心臓を突き抜ける。

頭の中が痺れたようにまともに思考できなくなって混乱する。

「陸はどうなのだ？」

震えた声で紫苑に尋ねられて、俺は……………

「俺は……………その……………」

言葉が出てこなかった。

肯定の言葉も否定の言葉も俺には出てこない。

パーティーでのアレックス君の言葉が重圧になっているのか。

それとも恋愛沙汰について、どうしようもないほど俺は臆病なのか…………。

いずれにせよ俺は何も言えないでいた。

「……………陸は——」

長い沈黙の後、掠れた声で紫苑は恐る恐る言葉を紡いだ。

「陸は私のことが……嫌いか？」

その質問は俺の心を激しくえぐった。

その質問をさせてしまったことに、情けなさを感じた。

「そんなわけないだろう！」

嫌いなわけがない！

紫苑は正直に言えば、少し変わっている女の子だ。

言葉づかひも、行動も、思考も、俺が会ったどの女の子よりも、変わっている。

だけど、他の誰よりも魅力的で俺を捕らえて離さないのは、お前だけじゃないか！

（嫌いなわけないじゃないか……！）

胸中で強く念じる。

そう……念じればこの思いが少しでも紫苑に届けばいいと願いながら！

「なら……私のことは好きか？」

「それは……」

だけど、俺はこの質問には答えられなかった。

いや答えたいけど、好きだと言いたいけど、言うことができなかった。

理由は——俺が臆病なのと無力だからだ。

結局、俺は……

「好きだけど……」

そんな曖昧なことを言ってしまう。

いや、曖昧なんてものじゃない……最低の答え方だ。

本気で告白してきた人に、適当な答えを返すのは非難されて当然の行為だ。

「……………じゃ……んだッ」

「え……？」

「だけどじゃ、駄目なんだ……」

「紫苑……」

俯いて、眦を震わす紫苑に俺は……名前を呼ぶことくらいしかできない。

混乱してきた頭。何か言わなければいけないという強迫観念にも似た思い。

焦って、真っ白になっていた。

「あ、その幼馴染みじゃないか、だから……」

何とか出てきた言葉は――

「もう、幼馴染みでは嫌なんだ！」

――悲痛な紫苑の叫びに俺は何が言えるのだろうか？

本気で想いを口にする女性の前で、曖昧な事しか返す事ができない俺に何ができただろう？

「幼馴染じゃ駄目なのだ！ 私は幼馴染でいることに我慢できない。幼馴染も友達も親友もそんなポジションはもう嫌なんだ！」

「な、なんで……？」

いつもとは違う紫苑の激しさに目を奪われる。

愚にもつかない答えに、紫苑のきつい眼差しが突き刺さる。

「おぬしは酷い」

「酷い？ 俺が？」

その言葉の意味を理解するまでに数瞬が必要だった。

「私に幼馴染でいると陸は言う。なら私は、陸に恋人が出来たときに《幼馴染》としてそのことを祝わなければいけない！ 私は陸が

好きなのに！ 《幼馴染》として「おめでとう」と祝福しなければいけない！ 非難することはできない！ 泣くことは許されない！ 私にそんな嘘の笑顔で笑えと、そう言うのかッ！」

紫苑は、きつい眼差しだけれども、涙の零れる瞳で言った。

「……………」

何も言えない俺を、紫苑は酷く苦しそうな表情で見つめる。

「私にはもう《百》か《無》しかないんだっ！」

翻り、紫苑の背中――

部屋から走り去る背中に伸ばした俺の右手は、しかし紫苑を掴むことはできなかった。

伸ばした右手は、虚しくベッドの上に落ちた。

やるせなさが胸の中に暗雲のように広がる。ひどく鬱陶しい、焦燥に似た思いだと思う。罪悪感と言うのは……まるで鉄板で炙られるように心を苛むように訴えてくる。

（どうして俺は……………好きだと言ってやれないんだ）

やるせない表情で俺は右拳を握り締める。

そして重く長い静寂が部屋を支配する……………が、

「……………何でコクンないわけ？」

「うわっ！？」

呆れた海の声がベッドの下から聞こえて、俺は体を飛び上がらせる。

「な、な、何でお前……………？」

「あのさ……………我が兄貴ながらマジで呆れるんだけど……………何であそこまで紫苑ちゃんに迫られて、押し倒してニヤンニヤンしちゃわないわけ？」

俺の疑問はすっかり無視して、ベッドに顎をのせた状態で海は非難の眼差しを送ってくる。

「よつと」

海は小さな掛け声を一つ上げてベッドの下から這い出ると、布団の上に仰向けになる。

チラリと海が視線を向けてくる。

その目つきを直視できない俺は顔を伏せる。

「今回の紫苑ちゃん……本気だったじゃん」

「……ああ」

「陸さー、ちよつと悩みすぎ」

やれやれというのを表現したようなため息を海は吐き出す。

「しゃーないな……あらよつと」

腹筋と脚の動きを利用して、ベッドの上に器用に立ち上がる海。

そして――

「俺たち男の子ー！ チャラチャッチャ ♪ イエイエイエイー！
私たち女の子ー！ チャラチャッチャ ♪ イエイエイエイー！

（セリフ）『あなたの瞳を見た瞬間、ビビビときたの、感じたの』

チャラチャッチャ ♪ イエイエイエイー！

（セリフ）『俺もだぜ。ビビビだぜ』

チャラチャッチャ ♪ イエイエイエイー！

告白したい、君に ♪

つ・ま・り――君に興味い津々 ♪ だけと言えずに、悶々」

「な、ななな、何言ってるんだ、お前？」

突然奇妙な歌――しかもなぜか異常にうまい――を歌い

だした海に訝しげな視線を向ける。

「だからさあー……つまり女の子に興味を持つのは正常な男子高校生なら当然じゃん。別にそれは悪いことじゃないと思うよ」

ウインクを俺に送って、のんきに笑いかける海。

海の意見を聞いていた俺は言いようのないむかつきに襲われた。したり顔で俺のことを知らないくせに、そう言う海に腹が立った。ただのやつあたりだと理解していたが、俺は言葉を止めることができなかった。

「何だよ……海に俺の何がわかるんだよ！」

胸から出た激情は口から出るとつらくて止めようがなかった。

「お前はいいよ！ 不器用で要領の悪い俺と違って、何でも器用にこなして要領のいいお前と一緒にしないでくれ！」

俺の怒りの声はどう言う訳か、悲鳴のように聞こえた。

ずっと胸のうちでわだかまっていた弟への嫉妬は、叩きつけた想いは――

「だったら、兄さんも俺の気持ちがわかるのかよ！」

それ以上の咆哮となつて俺に返ってきた。

戸惑い、目を瞬かせる。

「な、何？」

「小さい頃から好きな相手がずっと兄さんの方しか見ていない俺の気持ちができるのか！？ 同じ顔をしているのに、なんで俺の方を見てくれないんだ！？ 好きな相手に恋愛の相談された、俺の気持ちに兄さんにわかるのかよッ！」

「な……………」

震える。

どうしようもないほど震える。

紫苑に告白されたときよりも頭は真っ白で、思考停止しそうになる。

「何一つだって俺は兄さんに勝てない！ 勉強だって恋愛だって！ 陸は真面目でいい子だって言われている、優等生だってさ！ どうせ俺は兄さんに比べたら不真面目で劣等生さ！ 俺はいつも出来そこないみたいな目で見られていた！」

そこにはいつもおどけていた弟の姿はない。

「でも、紫苑ちゃんだけは……紫苑ちゃんだけは俺をちゃんと陸の

付属品じゃない、一人の俺として見てくれたんだ！」

けれど、思考停止は許されない。

目の前にいるもう一人の《俺》の苛烈な視線がそれを許さない。知らない。

こんな海は……俺は知らない。

「俺だって紫苑ちゃんの幼馴染なんだ。兄さん……兄さんが紫苑ちゃんのことをいらないって言うなら……俺が貰う！」

その宣戦布告は、ずしんと。

苦痛すら伴った衝撃となって胸に響いた。

初めて知った事実にも関わらず、どこか知っていたような、無意識に気がつかない振りをしていただけだったのだと気がつかされる（ああ、やっぱりお前も……そうだったのか）

俺たち兄弟は、紫苑を合わせて三人で遊んでいた。

けれど、いつの頃か海は仲間に加わらないようになり、ずっと不思議に思っていた。

そして、どこかでほっとしていた。

紫苑と二人でいられることに……

「呆れるくらい真っ直ぐに兄さんしか見ていないよ。俺の恋は自覚したときに、とつくの昔に終わっていたから」

きつと海はそうと気がついてしまったから……だから俺たちに近寄らなかつたのだ。

「玉碎覚悟で告白したいとも思った。でもそうしたら紫苑ちゃんは優しいからきつと遠慮するようになる。それで彼女の恋を、瞳を曇らすのは嫌だった」

海の右手が伸びて俺の胸倉を掴んで引き寄せる。

額同士がぶちかりそうな近距離。睨みつけるように海が叫んだ。

「道化になるさ、彼女のためなら！喜んで道化てやる。チャライ男を演じて、なんでもない振りを装って、好きなあの子の恋愛の助言だってクールこなしてみせる！俺は彼女の笑っている顔以外見たくはない！それが天堂海の生き様だ！」

数年の時を重ね、海は誰よりも強力なライバルとなって俺の前に立ち塞がってくれた。

——なぜか？

真剣な眼差しで、海の覚悟と決意を聞かされて、心が熱くなった。情けない自分が許せないと怒りすら抱いた。

「だけど俺じゃ駄目なんだよ！ 紫苑ちゃんを笑わせれるのは兄さんだけなんだ！ この世界で兄さん一人だけなんだ！」

拳を強く握り締める。

「だから走ってくれよ！ 追いかけて掴まえて、紫苑ちゃんを幸せにしてやってくれよ！」

「ありがとう、海……」

一言、最高の弟へとすれ違い様に礼を言う。

後は部屋を飛び出し、夏の夜の大气へと飛び出した。

海が俺のライバルとして、立ち塞がってきた理由。それは——

——俺を奮い立たせるためだ！

間幕 振り向かない向日葵

《天堂 陸》

ババババババババババババババババババババババババ—— ツッ！

鼓膜を叩く音はどこか機関銃を思わせた。

その正体は、上空で唸りを上げるヘリコプターのプロペラが産みだす爆音。

夏の夜空に浮かぶ鋼鉄の船は、冷酷な現実を突きつけるように大気を切り裂いて咆声を上げる。

引き裂かれた大気は、乱気流を生み出し、暴風と化して地面に鋭い勢いで叩きつけられる。

まともに立っていられないほどの烈風と爆音が、身体を強かに打ちつける。

それでも、拘束されていなければ立っていたら——はずだ。

「紫オオオ苑————ッッッッ！」

喉も枯れよ、と。

ヘリの爆音に負けじとばかりに紫苑の名前を叫ぶ。

だが、紫苑は振り向かない。

振り返ってくれない……ッ。

いつものように、俺が思わず仰け反ってしまうくらいの明るい笑顔を見せてくれない……！

「くそッ！ 離してください、お願いだ！ 離して！」

どんなに身をよじっても、両脇に立つ二人の黒服が掴む腕を緩めてくれない。

紫苑の家の護衛の黒服は、誰もが屈強な身体つきと体格で、とてもではないが振りほどけそうにない。

二人の黒服から両腕と肩を掴まれた俺にできることは、身をよじらせて「やめてくれ」「離してくれ」と懇願することしかできないのか！

そして、そんな俺の懇願は決して聞き入れられることはない。

「くそッ！ 離してくれッッ！ 離せ！」

だが、抗う俺をよそに、紫苑は地面に着陸したヘリに向かう足を止めない。止めようとしない。

いくらヘリが爆音を立てていっても、俺の叫びが聞こえないわけがない。

聞こえているはずなのに……聞こえているのに、紫苑は振り返らない。

回転するヘリのプロペラが叩きつける突風は、きつと目もまともに開けていられないほど激しいはずなのに……その風の勢いは、翻るスカートや紫苑の髪の乱れ具合から、簡単に察することができる。それなのに、全くひるむことなくヘリに歩み寄る紫苑の背中からは、嫌が応にも断固たる決意を感じてしまう。

ただ——紫苑の背中が俺のことを拒絶していた。

声が届かない。

届いても、離れてしまった心の距離が遠すぎて、紫苑には聞こえない。

「ッッッッ！」

どんなに叫んでも、紫苑には届かない。

きつとどこかで、まだ何とかなると……そう——思っていた。
きつとどこかで、謝れば何とかなると……そう樂觀していた。
きつとどこかで、会えば許してくれると……そう胡坐をかいていた。

紫苑があまりにも臆面なく堂々と、向日葵のような笑顔で、いつも《好き》だと言ってくれるから……

いつの間にか、俺はそれに甘えて、高をくくって……好きでいてくれるからと、紫苑を蔑ろに、天狗になっていた……ッッ。

掌から零れ落ちて……喪失の寸前でようやく気がついた。

自らの愚かさ、を……。

第三十章 ライトニングボルト（前書き）

最近、所属店舗のリニューアルなどで、睡眠時間三時間前後、即出勤、長時間労働、サー残と続いていてなかなか更新できず、すみません。

中盤から年末にかけてペースをあげて、年内完結予定です。

第三十章 ライトニングボルト

堂陸

《天

海の激励を受け、俺は夜の街中を走った。

紫苑の影を追い求め、駆け回った。

時間はすでに深夜。その遅い時刻と暗い街並みは、絶望感を胸に投げかけてくる。

不安は間隙なく胸を襲うが、全身は疲労に見舞われても、紫苑を求めて止まない。

紫苑を見つけると強く主張する。

けれど、一向に紫苑を見つけることはできなかった。

そんな時——黒塗りの高級外車が正面からやってきて、大通りの向かい側でゆっくりと滑るようにして停車した。

運転席から執事姿の老紳士——エドワードさんが降りて、後部座席の扉を開ける。

車の外装の色とは正反対の白いスーツ。闇の中でも燦然と輝く金色の髪。

黄金を纏った青年——

「……やあ、リク。いい夜だね」

——アレックス君だった。

人通りも失せ、大通りにも関わらずに他の車の影すら消えて寝静まった道路を、臆することなくアレックス君は歩いてくる。

自信に満ち溢れ、非常識を塗り替えるその行動力。

それは紫苑にも通じる——我が道を行く強い信念。

俺に欠けていて、絶対にないもの……

王者さながらの行進で、堂々と道路を横切りアレックス君が目の前に立つ。

「……情けない顔だね、リク」

「ツツ！」

傲然と笑うアレックス君を目の前にして、唇を噛み締める。

「キミに愛想をつかして逃げ出したプリンスは見つけられたのかな？」

「くっ……！」

「キミは愚かだよ。一時とはいえ、先のナイトパーティーではこのアレックスを差し置いて、自らの胸の中に抱き締めたというのに……何をやっているのか、理解に苦しむね」

欧米人らしい大げさなりアクションでやれやれというジェスチャー。

そんな態度を取られて、悔しくても……情けなくても……何も言い返すことができない。

なぜなら、アレックス君の言っていることは的を得ているから。

正しくて……痛いくらいに正しくて反論できないから。

拳を握り締めて、身体を震わせる。

本当に俺は今まで何をやっていたのだろう。

紫苑の求めを毎日拒絶しておきながら……あんなに好きと言ってくれた女の子を拒絶しておきながら、俺は一体何をしているのだろう。

ただ紫苑を傷つけてしまった。

なのに、傷心の紫苑を独りにさせたまま、見つけることもできない。

自責。

紫苑を泣かせてしまったことによる罪悪感。

さっきの告白に最低な返事をする事ができなかった後悔。

どうして喪失ってしまってから、かけがえのないものだった気がつくんだろう。

目の前の景色が、アレックス君の顔が歪む。

（情け……ない……ッ、俺は、なんて……ッ！）

胸を穿つ喪失感が、罪悪感と後悔を引き寄せる。

その直撃に耐え切れずに、涙腺が決壊した。

「つく、……うつ、くッ、……ッッ」

軋んだ声が、食い縛った歯の隙間から漏れる。

涙はとめどなく……頬を濡らした。

ネット》

《アレックス・バグ

今宵、人生最大のライティングが、ボクの胸を直撃した。

我がバグネット家が誇る情報網は、シオンが目の前でみっともな

く泣きべそをかいている愚民ボーイの家を飛び出したことを、当然ながらキャッチしている。

勿論、リアルタイムでシオンの現在地がどこかも知っている。

この街の高台にある噴水公園だ。

シオンと愚民。

二人の仲が実ることなどありえない。

そして当然の結果の如く、今夜をもって二人の仲はThe endだ。

アヤサキ家には連絡し、もうまもなく迎えのヘリが公園へと着陸するだろう。

そして、逃げ出した小鳥はボクというカゴの中に戻ってくる。

めでたしめでたし。ブラボーハラショーガンホー万歳ボク。

そして、めくるめくる桃色の日々の到来……………のはずだ。

なのに、ボクの胸はライトニングボルトに撃ち抜かれている。

十代も後半にもなつて泣き出す少年を見て。

なんて情けない。

もう数年もすれば成人するというのに、大の男が、大粒の涙をぼろぼろと零しながら、必死で泣き声を堪えている様子は、とても見られない。

このジャパンという国はおかしい。

とりわけこの国の、目の前の少年は……

いつになつても変らない綺麗なベビーフェイス。

とつくに変声期を迎えているはずなのに、女性よりは低いくせに、でも男にしては高い声。

男とは思えない華奢な骨格に欧米人のボクから見れば子供のような低身長。

目の前の少年はクレイジーだ。

大きな瞳からは透明な雫が後から後から零れ落ちて、なんだか気

になる。

マスカラで整えたわけでもないのに、黒くて長い睫。こいつはほんとに誇り高い男^{メン}なのか！？

整った鼻筋と薄い唇のバランスは絶妙すぎて、不思議な引力に満ちている。

柔らかい髪質の、男にしては長めの髪型も非常に女々しくてよろしくない。

男のくせに繊細な髪型なのが悪いのだ。

目の前の少年は、なんだかちょっとboyishな**のように思えて、ボクの、だから、ライトニングが、胸に……くくくくくくくくくくッッッ、シット！！

「泣くんじゃない！」

胸に湧きあがった戸惑いを隠すように、鋭く叫ぶ。

そうでもしなければ、目の前の小さく華奢な存在に飲み込まれてしまいそうだから。

「うつく、ごめ……うつく、ごめん、アレッ……クス、君っ」

けれど、胸の次には、脳天にライトニングが落ちてきたんだ。

リクがボクを上目づかいに見つめている。

両眉を八の字に垂れて、大きな瞳は涙を溢れさせ、両頬は透明な川で彩られている。

嗚咽の漏れる声も、何もかもがみつともない……はずだ。

胸の内に溢れてくるのは、侮蔑と嘲笑の……はずだ。

爽快な、してやったりの気分の……はずなのに。

どうして、マイハートはこんなにも苦しいのか。

左手で胸をかきむしるように押さえれば、鼓動と熱がオーバーヒートしそう。

気がつけば制御を離れた右手が……リクの両目の縁の涙を払っていた。

「——アレックス君……？」
スネークに見つめられたフロッグの気分が——わかった気がする。

涙で濡れた両目で、リクが不思議そうにボクを見上げてくる。
み、み、みみみ、見てんじゃねえええよ、ドントルックミー！
見るんじやないよ、そんな目で！

一体ボクをどうするつもりだ！
どこに連れて行っちゃうつもりだ！

知らない感情についていっちゃ駄目なんだぞ！？
エモーション

扉が、開いちゃうだろうが！！

あてもなく想い人を探す少年に、皮肉を言う余裕など、もうどこにもない。

ボクはリクの視線から逃れるように顔を背ける。

それと同時に言うべき皮肉を必死で手繰り寄せる。

ボクはこの場に、リクを慰めに来たんじゃない！

圧倒的な格の違いを教えにきたのだ！

そうこやつを泣かしにきたのだ！……もう泣いてるけどさ。

「……しょ、庶民の自分と財閥のお嬢様。身分のギャップがよつやくわかったかい？」

「！？」

リクが驚きに身を強張らせる気配を感じる。

「なん、で……？」

リクの疑問の呟きを最後まで言わせずに、軽快な笑い声で遮る。

「ボクが高貴で美しく天才だからさ！」

よ、よおおおし、いい感じだ。

いつものボクラしさを取り戻すんだ。

「それくらいわかるさ」

キラんと白い歯を輝かせて、ボクはリクへと笑いかける。

正面からリクの顔を見据え——意識が……容易く、飛んだ。
そりやもうマツハで。

なのに口だけが、言葉だけが乖離したように動く。

「……キミのような学のない愚民でもシンデレラのストーリーくらいは知っているだろう？」

あれ……ボクは何を言おうとしているのだろうか？

「有名なシンデレラで出てくるプリンスは、シンデレラの身分を気にしたかい？」

「……………」

侮蔑を言っんだ。

冷酷な現実を、目の前の甘ちゃん叩きつけてやれ！

クールにそれでいてスタイリッシュに！

「惚れた先に身分など関係あるのかい？ 身分より先に、プリンスは一人の女性を好きになった。ただそれだけのことじゃないのかい？」

何を言っているんだ、ボクは……？

「シンデレラが涙と言うガラスの靴を落として逃げたのに……リク・テンドウ！ キミは身分にこだわって、プリンセス・シオンを追いかけないのかい！？」

叩きつけるような熱い、必死な口調。

「ためらって、苦悩して歩いていく。見失ってしまうこと、色あせてしまうこともあると思う。でも最後はハッピーエンドでいたい……それがジャップの思想なのだろう？」

ボクは馬鹿だ……一体、どうして。

なにを好んでアドバイスなど、意味がわからない。

「うん……」

ボクの身体は、ボクのハートを裏切って、高台を指し示す。

「高台の噴水公園だ。そこにシオンはいる」

「どうして……………」

信じられないとばかりに見開かれるリクの瞳。

だが一番ビリーブじゃないのはこのボクだつてのツツ!!

「ふ、フン! 勘違いしてもらっては困るな! もちろん、ボクもその場に行くさ。そして、シオンを連れて帰る! なにせボクは彼女のフィアンセなのだからね!」

なにこのジャパニーズツンデレっぷりは! 自分自身に茫然自失だ。

必死でボクは傲慢な仮面を取り繕う。

自信に満ち溢れている時は、いくらでも溢れてきた単語を、今は必死にかき寄せ組み立てて、いつものボクを装う。

「キミの目の前でシオンを連れ帰る! ただ、まあ、最後にお別れくらいは言わせてあげようかなと思ってね!」

「そんな……黙って連れ帰れば、俺は紫苑がどこにいるかもわからなかったのに……」

~~~~ツツツ、痛いところをつくな~~~~ツツ、このboyはツ!

そんなのボクが一番わかってるっつーの!

シムラ、後ろ後ろつてくらい自分自身に教えてやりたいっての!

「ええい、シャラップ! 男が細かいことをグダグダと! キミは必ずキャベツを微塵切りにするタイプだね! まあ、しいていうならば、慈悲だよ。ボクは慈悲深いのさ!」

「慈悲つて……どうして……嫌っている俺に慈悲なんて……?」

すぐにシオンの許に走り出そうとしたリクはしかし、ボクにそう尋ねる。

全くもってその通りだ。

恋敵に、わざわざ応援するような真似。正気の沙汰とは思えない。  
「……………」

けれど、「どうして?」と聞かれてもボクの方がどうしてなのか、それを知りたいんだ。

当初の予定では、シオンを探し回っているリクを散々馬鹿にして、シオンの居場所を教えずに、このアレックスが寂しげに佇んでいる

シオンの許に馳せ参じようと思っていたのに、一体どうしてこうなつたんだろう？

「……フン。かの有名な戦国武将ケンシン・ウエスギは、ライヴァルであつたシンゲン・タケダに塩を送つたという。まあ……そのよ  
うなものだよ」

苦しい言いわけ。

そんなことは誰よりもボクがわかっている。

「け、けど……」

「早く行つた方がいいんじゃないかい？」

「あ、ああ……」

強い口調で言うボクに気圧されて、高台に続く道に立ち塞がるように立つていたボクをリクは追い越して……

と、追い越す刹那、リクは夏に吹く涼風のように、すれ違い様小さく告げた。

「ありがとう」

そして殴つてごめん、と。

その瞬間、なぜかボクはハートが締め付けられるような甘い痛み  
に襲われた。

けれども、その呼吸困難は不快ではなかった……

「よろしいので？」

待たせていた車に乗り込むと、エドワードが静かに尋ねてきた。

「……ハンデだよ。これくらいのハンデがなければ、庶民と上流階級に生きるボクとの差が埋まらないからね」

明晰な頭脳の持ち主であるボクが生み出したにしては、にわかには信じられない幼稚な虚言をエドワードは一体どう受け取ったろうか？

「さようですか」

エドワードは短く言葉を発すると、躊躇いの気配を匂わせた後、静かに続けた。

「老婆心ながら……坊ちやまが悔いの残らないご選択をすればよろしいと思います」

「……………ああ。ありがとう、エドワード」

加速して流れる車窓の夜景を瞳に映して、ボクはエドワードの言葉とリクの顔を、熱に侵されたように何度も反芻させた。

### 第三十一章 彼女の宣告

#### 《天堂陸》

分厚い壁のように夏夜の大気が身体にからみつく。その中を無我夢中に走る。

獣みたいに荒い自分の息遣いとアスファルトを叩く足音が残響のように響く真夜中。

「はぁッ、はぁッ、はぁぁッ……！」

脈打つ鼓動は激しく、汗で額に貼りついた前髪がうっとおしい。背中もジーンズも、噴き出た汗で気持ち悪い。

それでも疲労した身体に鞭打って、噴水公園に続く長い石造りの階段を二段、三段飛ばしで駆け上っていく。

いや、むしろ疲労など気にならない。

心臓を握り潰してくる焦燥感に比べれば、疲労などなんだというのだろう……ッ！

砂漠を歩く旅人がオアシスを求めるのと同じくらい強い想いで、紫苑を想う。

噛み締めた歯と歯の間から、紫苑を求める声が漏れる。

だから――

噴水に到着した俺は切羽詰まった表情で紫苑の姿を探す。

噴水には街灯も人気もなかった。

噴水のせせらぎだけが周りの音を支配している。

「くそッ……」

不気味すぎる静寂の前に、恐怖にも似た焦燥の舌打ち。

それは迫り来る夜の暗さなのか、人気の消えた公園の様子なのか、夏の陽炎を掴むことができないように、紫苑の姿を見つけることが叶わない。

「紫苑……どこに……っ」

抑圧しきれない不安が、言葉と表情を伴って溢れ出す。

見つけれないもどかしさ。

見つけることのできない恐怖。

見つけれられるのだろうかと思う不安。

「紫苑……ッ」

呼びかけは懇願を超えて、どうしようもないくらいに震えている。本当に逢いたいと思う人に逢えないとき、人はこんなにも切なく胸が痛い。

心の悲鳴が止まらない。

（まさか――もう……帰ってしまったのか……？）

不安の重圧に耐え切れず、聞こえない振りをしていた心の囁きが耳に木霊する。

神様にはとつくの昔に祈っていて、悪魔にだって交わしてはいけない契約でも結んでもかまわなくらい自暴自棄が胸の裡で暴れている。

認めたくない事実。

けれどそういう冷徹な現実こそが、認めなくてはいけないものののだろうか……。

亡霊のような足取りで公園を歩く。

全身を包み込む絶望を辛うじて拒否するかのように……俺は頭を巡らせ――

――忙しく動いていた俺の首が止まる。

前を見上げる。

「紫苑……」

紫苑は、小高い丘に作られた噴水の前に静かに佇んでいた。

そこに姿が見えるのに、今にも溶けてしまいそうな希薄な存在感。昼なら水飛沫を上げ、虹のアーチを描いたであろう噴水の水は止められていてモノを言わないオブジェと化している。

人の失せた公園は、どこか触れざる領域のよう。切り取られた夏夜空間。

小高い噴水公園、

紫苑は静かな夜を背負い、

黒い空を見上げ、

月の淡い輝きの中、

独り佇んでいた。

悪い予感が身体を大きく震わし、戦慄が奏でる調べが幻聴のように聞こえる。

駆け寄りたくて、風が吹いて、綺麗すぎて、近寄れなくて、俺は動きを止めて、鼓動が熱く、叫びたいように、ただ見つめ続けたいように――動けなかった。

「――紫、苑……っ」

喘ぐように。

吐き出すように、口から漏れた紫苑の名。その声のなんと小さいことか。

紫苑がゆっくり振り返る。

全ての表情を無くした紫苑は恐ろしく整った精巧な人形を思わせた。

見慣れた顔のはずなのに——どこか遠い。

それは消え失せた感情のせいだろうか。

「紫苑ツツッ！」

それでも、まだこのときの俺は……

安堵の余り、喝采と共に彼女の名前を叫んだ。

だから——俺はそのときの、紫苑の表情の意味を知らなかった。

「お別れだ、陸」

だから……静かに宣告された別離に、凍りついた。



### 第三十一章 彼女の宣告（後書き）

物語は終盤を迎えました。

どうぞ最後までお付き合い頂ければ幸いです。

## 第三十二章 夏の別離

《天堂陸》

会って言うべきことがあった。

言いたいことがあった。

なのに、紫苑の一言でその決意は凍りついた。

喉のつ、そこまで、出ているのに……ッ！

紫苑の見つめる静謐な双眸が、俺の発言を許さない。

視線に物理的な力があるかのように、言葉が奪われる。

それでも。

両足の裏に力を込め、前を見据え、俺は紫苑に向き直る。

ここで引くわけにはいかない。

海が、アレックス君が、何よりも俺がッ！

紫苑を求めているから！

「紫苑、俺はッ——！」

ババババババババババババババババババ——ッッ！

告げようとした想いは、ヘリの爆音に遮られた。

「なっ!？」

高台の下から、紫苑の背後へと一気に急上昇してきたヘリが夜を背負い、その姿を露にする。

強烈なライトが降り注ぎ、まともに網膜を白く焼かれた俺は咄嗟に右手でライトの光を遮ろうとする。

『ふ、フン! 勘違いしてもらっては困るな! もちろん、ボクもその場に行くさ。そして、シオンを連れて帰る! なにせボクは彼女のフィアンセなのだからね!』

『キミの目の前でシオンを連れ帰る! ただ、まあ、最後にお別れくらいは言わせてあげようかなと思ってね!』

アレックス君の言葉が胸の中で木霊する。

このままじゃ紫苑は連れ去られてしまう。

「紫苑! 聞いてくれ、俺は……!？」

紫苑の許に駆け寄ろうとした。いや、彼女を抱き締めようとした。そんな時だった。

がっちりと両脇を掴まれたのは。

「な!？」

いつの間に背後から忍び寄っていたのか。

それとも、目の前の紫苑の存在に気を取られていたせいなのか、全く接近に気がつかずに、いとも容易く二人の男に拘束されてしまう。

黒服と襟の所に鈍く光るバッジ。

幼い頃にも見たことがある。綾崎の護衛の人だ。

「申し訳ありません。天堂様、お引取りを……」

護衛の人の低い声が耳朶を打つ。

瞬間、全てを悟った俺は顔が青ざめた。

まさかと思いつつも、見ない振りをしていた現実には、もう逃げられないところまで追いかけて来ていて……嘲笑していたことに。

「い、いやだ……嫌だッ！」

身体をよじる。

けれども、屈強な護衛二人の拘束は緩むことはない。

たじろぎもしない二人の両手の強さは、抵抗を冷たく跳ね返される。

それがいつその恐怖を煽る。

目の前で紫苑は俺の前からいなくなろうとしていた。

\*\*\*\*\*<<<●>

紫苑は俺から遠ざかって行く。

（このままじゃまずいッ！）

焦燥が焼けるように脳を責め、打開策をひねり出せと叫ぶ。

呼びかけた声は届かず、身体は拘束されて、自らの傲慢に打ちのめされた。

状況は限りなくらい最悪。

それでも俺は護衛の手を振り払い、紫苑を捕まえてはいけな

い。  
まともに抵抗しても体力と時間を無駄に浪費するだけ。  
隙をつかないといけない。

地面に倒れこむふりをする。

前へ行こうと力を振り絞り、足がもつれて地面に無様に叩きつけられる……寸前で上着をセミの脱皮のように身代わりに脱ぎ捨てて、低い姿勢で疾駆する。

（掴まえる！）

隙をつき、自由になったほんの僅かな時間の間に捕まえる。

なんとしてでも紫苑を捕まえる。

だが、紫苑に触れる寸前で、後ろから追いつがってきた黒服二人に体当たりをくらい、もつれるように硬い大地へと無情にも叩きつけられる。

「ぐッ!？」

それでも這ってでも逃げようとしたところを、腕を捻られ手首を取られる。

その上、とどめとばかりに持ち上げた頭を後手に鷲掴みにされ、地べたを舐めるとばかりに、地面に叩きつけられる。

「あぐッ!」

ふりほどこうともがく。

だが体格が優に二回りは大きい。こうもがっちりと関節をきめられてしまつては、合気も使い用がない。

絶望を加速させるように黒服たちが、俺の前に幾人も立ち塞がる。紫苑と俺との間に人垣のように壁をつくられる。

その数、十人近い。

強烈なスポットライトと、黒服の人垣の狭間から、たなびく紫苑の服の袖が見える。

「ま、待ってくれ、紫苑ツッ!」

瞬間、人垣が割れる。

目を見開いた先には、傲然と立つアレックス君がいた。

アレックス君が紫苑の身元で何事か囁く。

それに紫苑が小さく頷き——ただの一度も振り返ることなく、へりに吸い込まれていく。

「待つ——！」

何か言い終わるよりも早く、素早く黒服によってへりの扉が重い響きとともに閉められる。

がむしゃらだった。

獣めいた声を上げて暴れる。

肘を、拳を振り上げ、取り囲む黒服に容赦なく振るう。

暴力の躊躇など消えていた。

いなくなる。

失う。失う？

「あ——あああああああああッ！？ どけ！ どけつて言ってるだろッ！ どけええッ！！」

鼓動に突き刺さる焦燥に衝き動かされて暴れ狂う。

それでも黒服たちは、微動だにしなかった。嘲笑も上げなければ、声も荒らげない。

ただ静かに。

へりが浮き上がり、見えなくなるまで俺を拘束し続けた……

…

……

……

夜の公園とは虚しいものだ。

とりわけ人のいない公園は。

その場には大の字で打ち捨てられた俺しかない。

いや……

ただ一人、白いスーツ姿の彼だけはいた。

仰向けの身体を捻り、起き上がろうとした先で、蒼い視線と絡み合う。

「ぐッ、ゝゝッッ！」

だが何を言えればいい。

何を吠え立てればいい。

もう紫苑はいない。

ここにはいない。

俺の隣にはいないんだッ！

どこに行ったかすら……わからない。

振り上げた拳は力なく地面に落ちた。

また爆音が聞こえる。

俺の好きな子を連れ去った忌々しい音。

きつと目の前で俺を見下ろしているアレックス君を運ぶために来たんだろう。

もう何もする気が起きなかった。

突風が叩きつけられ、服と髪が無茶苦茶にをかき回される。

叩きつけられる烈風に顔すら庇うのを忘れて、虚ろな視線を向ける。

ガラリと、ヘリの扉が開く。

悠然と背を向け、アレックス君がヘリに近付き、扉に手をかける。

「追って来い、リク・テンドウ！」

瞬間、ヘリのプロペラ音を圧倒する轟音が聞こえてきた。

「な……？」

沈んでいた意識が浮かび上がる。

「彼女が大切なら、彼女が心配なら、彼女が欲しいなら！」

背を向けたままアレックス君が叫ぶ。

その表情は見えない。

「ボクを追って、アメリカの屋敷に来るがいいッ！」

叩きつけられた言葉は、どんな声よりも強く響いた。

「振られ、捨てられ、碎かれても。それでもシオンが愛しいなら！  
それでもなお諦めないなら！

Boyではなく、manとなって追ってこい、リクッツ！」

全てを貫くような言葉の弾丸で、完膚なきまでに俺は撃ち殺された。

どれだけ経ったのか。

公園には今度こそ自分独りで、他には誰もいない。

握り締める。拳を。

[illegible]

膝について、咆哮を上げる。

いや、それは咆哮なのか。慟哭の叫びなのだろうか。

失った。

もう掌には何もない。腕の中には誰もいない。胸の中には何も残っていない。

ほんの数時間前まで、俺の腕の中には紫苑がいたというのに……ッ！

握り締めた両拳を、石畳の地面へと叩きつける。  
何度も何度も何度もツ。

「……さッ」

彼は言った。

「追うさッ！」

追ってこいと。

灼熱が衝き上げてくる。

まだだ。

まだ終わりじゃない。

終わりと思った瞬間、負けたと思ったときが、駄目だと諦めたときがッ！

始まりなんだ！

何度も押し折られる。

常識に、恋に、人生に、現実、受験に、毎日に、押し折られて、打ちのめされて！

そこから立ち上がるのが、始まりなんだ！

終わりにするか。終わりにしてたまるかッ！

アメリカ？

ハッ！ 上等じゃないか。どこにでも行つてやるさ。顔を上げれば、そこには月。

今度は俺の番だ。

紫苑は俺に会いに、アメリカから日本に帰ってくれた。

なら次は俺が追いかける番だ。

もし、仮に紫苑が月に行くと言つならば、俺は――

「月にだって言つてみせるッ！」



### 第三十三章 勝利者の余韻

バグネット』

《アレックス・

「……いいのかい？」

これでいいはずなのに、なぜかボクはシオンにそう問わずにはいられなかった。

柔らかいソファに身を沈めながら、対面に座るシオンへと問いかけた言葉は返ってこなかった。

まあ期待はしていなかったけどね。

窓から夜の街を見下ろすシオンの顔は、息を呑むほどに美しい。だけでも眉をひそめるほどに痛々しかった。

本当に目の前に佇む少女は、シオン・アヤサキなのだろうか。

人形のように表情の消えた少女は美しかったが、同時にあまりに

も儚い。

ボクは返事を聞くのを諦めて肩を竦める。

だからきつと聞こえない。

「全く……何をしているんだろうね、ボクらは。そろいもそろって気持ちと裏腹のアクションばかりする。ボくらには金も物も欲しいものはなんだってある。何だってできる。何だって成功してきて、手に入れてきた。退屈なくらいに」

「——っ……」

シオンは答えない。

ボクは気にしない。

「なのにどうしてかな。ボクらはそろって“恋”がヘタだ」

シオンの肩が震えている。

でもボクは気にしない。

「こんなヘタな恋、きつと子供でもしない。ボクたちは子供以下だね」

パン、と。

乾いた音がボクの左頬で弾けた。

まるでそれは銃声みたいだった。

目の前では、ボロボロと両頬を透明な涙で濡らして、唇を噛み締めるシオンがいた。

シオンは美しい。

でも痛々しくて見ていられないとも思った。

だってシオンはさっきまで涙を流さずに泣いていたから。

だから、とても見ていられない。

「うるさい！ 私は頑張った！ 陸に好いてもらおうと……私は、っ！ 努力したッ、したんだ！ でも駄目だった！ 駄目だったんだ！ 陸は私を女として見てくれない！ どうしたって、どうあっても思い知らされたんだ！

私は――私はただの幼馴染だったんだッ！」

両胸をシオンの固めた両拳が叩きつけられて息が詰まったのは痛み  
のせいかな。

込み上げてくる切なさのせいかな。

明晰な頭脳を持つボクでもわからない。

「だいたいお前は構わないだろうが!? なぜそんな問いを放つのだ! お前は私を連れ帰れるのだから満足だろう!?!」

「……当たり前さ。もちろんだとも」

きつと以前のボクなら、コサツクダンスを踊っていた。

きつと以前のボクなら、モンキーベイビーでケチャ踊りを炸裂させていた。

きつと以前のボクなら、胸に飛び込んできたシオンをこれでもかというくらい抱き締めていた。キスだつてしちゃうね!

なのにボクの両腕は、拒否したように動かない。

まるでメデューサの瞳を見たかのように硬く石化してしまっている。

きつと以前のボクなら………ボクがボクでなくなったのはいつ  
なんだろうかな。

答えなんてわかっている。

とうの前から。

――リクに会ってからだ。

空港につくまで、ボクらには何も起こらなかった。

年頃の男と女がいるのに、何も起きなかった。

抱き締めることもなかった。キスもなかった。

シオンの身体はやがて離れ、やっぱり虚ろな視線で窓の風景を見ていた。

いや、きつと見ていない。

彼女の瞳は何も見えていない。見えていない。

ただ過去の残影だけを追っているに違いない。

夏の思い出を、ずっと。

これからも、ずっと追い続けるに違いない。

（ボクの欲しかったのは、この目の前の彼女なんだろうか？）

そのはずだ。

そのためにジャパンに来た。

そして、今、勝利者としてアメリカの帰路へと着く。

用意されている自家用のジェット機に乗り込み、ヘリの椅子とは

段違いの座り心地の椅子に座り、隣にはシオン。

この上ない勝利者としての凱旋じゃないか。

ワインを片手に乾杯していいはずだ。

なのにこの空っぽな玉座は何なのだろうか。この味気なさは何？

身体を包む倦怠感にも似た失望感は何に対して抱いているのだ？

窓に映るボクの冴えない表情は何なのか。

そして何かを待ち望むこの気持ちは何だ。

ナウンスは給油のために、離陸までに一時間余りの時間がかかる

ことをボクに告げた。

その一時間は——あまりにも長くてボクがハッピーではない

ことを教えてくれるには充分だった。

## 第三十四章 ハリウッド

天堂陸

《

空港のロビーへと走り込んだ俺は狂おしい目で紫苑を探す。

（いない！ くそっ当然か！ もう飛行機の中なのか！？）

電光掲示板のアメリカ行き便を見る。どの飛行機に乗っているかわからない。

いや、そもそも民間の飛行機に乗って帰るのか？

アレックス君は海ではクルーザー、陸では高級外車、先ほどはへりまで調達するような資産家なんだ。

なら専用のジェット機を持っているんじゃないか？

そんな情報は掲示板を見上げてもどこにも表示されていない。されるわけがない。

（なら直接、滑走路に出るしかない！）

今更だがパスポートを持っていないことに気がつく。もちろんお金もない。

こんな状態で飛行機には乗れるわけがない。そんな当たり前の出来事ですら失念している。

それくらい俺は焦っている！

「くそ！」

ロビーの外、闇に浮かぶ飛行機。

その視界の端に普通の飛行機とは違う影が見えた。

（あれだ！）

確信などない。

ただ直感的に“あれ”だと思った。

よくも調べてないし、この距離だ。間違えている可能性は当然高い。

すぐに走り出す。目的地は滑走路！そしてそこに至る道だ！  
悩む時間はない。許されてすらいない。

今まで紫苑のことを悩んで悩んで、それで良い結果は出たのか？  
用意も準備も万端に揃えて、ことを成せばどんなにいいだろう  
か。

だけど人生においてそんな都合のいい展開はありえない。

いつだって唐突に。突然、準備をする間もなく人生は展開と選択  
を人に突きつけてくる。

そのとき今ある手持ちの材料でどれだけやりくりして成し得たか  
……どんな状態だろうと行動できたか。成功と失敗はそこだと学ん  
だ。

深い喪失と最後の望みさえも断たれようとした今、ようやく気が  
つけたんだ！

もう迷うくらいなら、俺は走る！

間違いだと気がついてすぐ行動するなら、これより遅いことなん  
かない。

引き摺られて想いを燻って、後悔をする生き方はもう嫌なんだ！  
俺の心を今ほど本気に連れ去ったあの子を——紫苑を追うん  
だ！

温かい笑顔を、愛しい感情を手放したくない！

好きということ諦めたくない。

だから神様、もしいるなら僅かな奇跡を俺にくれ！

迷いはない。

アメリカでもどこまでも追って行く覚悟だった。

ただどここうして逃げ去る前に追いついけるなら、飛び立たせるものかと凶暴に思った。

鳥の羽根を引き裂くほどに獐猛に思う。あれを飛び立たせたくない、あの機械の鳥を！

（逃がさない！）

性格が変わったと思うくらい、自己中心的で向こう見ずな考えが頭に浮かぶ。

作業員専用、関係者以外立ち入り禁止の扉を開ける。

そこに躊躇などない。後がどうなるかと、常識や道德などの単語が虚しく頭の中で消え去る。しちゃいけないことを行ったことで頭の中は沸騰しそうだ。

だけどそれすらも強い興奮と想いに掻き消されていく。

通路を走り、案内掲示板に従い、貨物倉庫へと辿り着く。

夜なお動く貨物倉庫。

機械の音に混じって、人の声が聞こえた。

空港の荷物を運び入れる大型のウォークリフト。

これだ、と。

見た瞬間、天啓のように思った。

それを操る係委員へと駆け寄る。

「すみません！」

「えっ？」

驚いて声のある方向——俺を見る男の職員。三十代半ばくらいだろうか。驚きに目を見開いて困惑を表している。

そりゃそうだ。

従業員でもない俺がいきなりこんなところにいるのだから。

「おい君、ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！ 一体どこから入ったんだ？」

「大変なんです！」

ありきたりな注意をする職員に叫び返す。

「え、どうしたんだ？」

困惑は変わらず、むしろ強くなって聞き返す職員になお続ける。

「降りてください！ 向こうで大変なんです！」

「え！ ちょ、ちょっと待ってろ」

俺の様子からただ事ではないと悟ったのか、無防備に背中を見せてフォークリフトから降りようとする職員。

瞬時に野生の獣さながらの俊敏さで飛びかかる。

職員の首根っこを掴んで床へと引きずり倒す。

「うわっ！？ な、何を！」

立ち上がろうとした所を、即行で鳩尾、胸へと当身をくらわす。

呻いて体勢を崩した職員の襟首と右袖を掴んで、腰を跳ね上げるように職員を背負い、地面へと叩きつける。

「がはっ！？」

背中から硬い床に強かに叩きつけられ、職員が激しく咳き込む。

畳ならともかく、この硬い床に受身も取れずに叩きつけられたらそれも当然で、これで痺れにも似た痛みで暫くは立ち上がれないだろう。

素早くウォークリフトへと駆け上がる。

ちなみに俺は原付の免許すら持っていない。

ただどアクセルを踏めば進むだろうし、ブレーキを踏めば止まるだろう？

というか止まる気なんかさらさらないから、アクセルだけで充分だ。

ハンドル横にあるレバーでアームの上下を動かすのを確認。ならこれが方向指示のレバーで、椅子の左横にあるレバーがギア？

Pがパーキングだろう。止まるんだよね？

じゃDがなんだ。D1？ Rてのは……わからない。とりあえずDに合わせて――

「わっ!？」

止まっていたウォークリフトが動き出す。

ブレーキがどれかわからず近くのペダルを慌てて踏むとエンジンが吼えて急加速、目の前の壁にぶつかり車体が揺れる。

ハンドルを思いっきり左に回す。

車体の右側面を壁に擦りつけるように無茶な前進の後、壁から外れつつんのめるように左へと旋回。

慌てて今度は右にハンドルを切る。

今度は左後ろの辺りを壁にぶつけ、体勢を取り戻そうとまた左。

まるで打ち出されたパチンコの玉のように、あちらこちらに勢いよくぶつけながらもウォークリフトは倉庫から外の滑走路を目指して前進。

「くそ!」

予想以上に運転が難しい。

思ったように動いてくれない。俺は産まれて初めて車を運転できる人を尊敬した。

右に左にハンドルを切る、アクセルらしきペダルを踏む。

壁にぶつかり、扉にぶつかりながらも滑走路へととうとう躍り出る。

なら後は加速するだけだ。

アクセルを強く踏み込む。

障害物がなくなり、広々とした滑走路の上は、みるみるウォークリフトの速度を上昇させてくれた。

吹き晒しの車体は風の勢いと唸り声を直接身体に叩きつけてくる。見通しの悪い暗い滑走路を猛スピードで走る。

奇妙な浮遊感と不安がない混ぜになった恐れにも似た心を掻き消すようにアクセルをなお強く踏む。

やがて、一台の小型ジェット機が見えた。

ジェット機は滑走路から今、離陸せんとばかりに目の前を横切ろうとしていた。

止める手段は一つだけしかない。

奥歯を噛み締める。ハンドルを強く握り締めた。

（このままぶつける！）

加速するために動き出しつつあったジェット機が、横合いから突っ込んできた俺のウォークリフトを見て、直線の軌道を右へと避けるように変わる。

ジェット機が放つ圧倒的な光の渦へと突っ込む。

「うおおおおおおお——！」

雄叫びを上げて、その長い胴体へぶち当てる——

「—— おおおおおおおお！ 止まれえええええッ——」

—— より早く、軌道を変えたジェット機の左翼が右方向から迫ってきた。

「—— ツツ！？」

こちらの体当たりがジェット機の長い胴体に当たるより早く、右方向へと進行方向を変えたジェット機。その左翼がまるで薙ぎ払いの一撃のように俺の乗るウォークリフトを襲う。

本能的な予感。

（ヤバイ！）

咄嗟に身を屈める。

瞬間、バキヤとかいう恐怖音。

破壊音と共に頭上の天井とそれを支えていた四本の支柱がまとめて—— 根こそぎ吹き飛ばされる。

まるで断頭台から落ちてくるギロチンに似て、上部を切り取られたウォークリフト。

拳句、その勢いで弾き飛ばされた車体が時計回りに猛烈にスピニングながら弾き飛ばされていく。

「うわあああああああ——！」

この体験をなんて表現すればいいのか。

遊園地の遊具である暴走するコーヒーカップ？ シートベルトを  
していないことに弾き飛ばされそうになって気がついた。遅すぎる！  
前方にスピンする車体から半ば振り落とされそうになる。必死で  
運転席から落ちそうになるのをハンドルを握り締めて耐える。

ハンドルはとても忠実で、右に全開に切られたことで狂ったよう  
な特攻をジェット機にかまそうと、戻ってきたブーメランのような  
軌道を描き、真正面からジェット機の鼻面へと激突。

「うあああああああああああああ！？」

甘かった。

俺は馬鹿でした。

考えて見ればすぐにわかる話だ。

たとえば幼い子供が大人に向かって頭から突撃して行ったらどう  
なるだろうか。

当然——体重と体格差に軽々と跳ね飛ばされる。

弾き飛ばされ、尻を強かに打ち、泣きを見ることになるだろう。  
その規模を変えて、試したのが俺だ。

「……………！！！！！！」

声なき絶叫を上げる。流した涙が叩きつけられる風圧で、瞬時に  
後ろへと流れていく。

泣く暇すら与えられず、ふざけるほどの無重力と浮遊感。

ウォークリフトは空中に弾き飛ばされていた。

夜空が、灰色の雲が、瞬く星と輝く荘厳な月が見えた。

飛ばされ、上下に回転する車体。すぐ手を伸ばせば届きそうな至  
近距離で長い胴体が横にグオオオオと駆け抜けて行く——次  
の瞬間。

衝撃！ 激震！ 超衝突！

ギロチンのもう片翼。右翼がウォークリフトを直撃。

どこか形を成す重要な場所が剥ぎ取られる破砕音。

（死んだ！）

グシャグシャにした紙の中に包まれて投げ捨てられた小虫は、おそらくこんな気分を抱くんじやないだろうか。

回転する身体。回転する思考。回転する悲鳴。

そして俺は運転席から放り捨てられた。

滑走路の横の芝生に投げ出され、縦横無尽にその上を転がり、転がされ、わけもわからずにされるがままに吹き飛ばされる。

遅れて腹に響く爆発音。

起き上がった数十メートル後方で煙を上げ、盛大に燃え上がるウォークリフト。それを他人事のように眺めて呟いた。

「え？ ハリウッド？」

振り返れば遙か視界の先——滑走路で斜めに止まったジェット機に気がつき、生きていることがわかった。

## 第三十五章 告白

綾崎紫苑》

《

飛び出す。

誰かが制止しようとするが振りほどいてジェット機の扉を開き、補助階段もなしに一気に跳躍、飛び降りる！

着地した瞬間、足裏に強い痺れ。

気にならぬ！

とにかく炎上した現場へと走り出す。

（馬鹿が、馬鹿が、馬鹿者がッ！）

何をしているんだ！

あんな危ないことをどうしてするのだ！ 理解できんぞ！ 四〇〇字詰め原稿用紙で一〇文字以内に説明してみせろ！ 書き終えて持ってきたら、その場で引き裂いてやり直しを命じてやる！

「はぁはぁ……ッ！」

闇の中、抗うように明るく周辺を照らすウォークリフトらしき残

骸を目の前に視界が真っ暗になる。

こんなはずじゃなかった……こんなはずじゃなかった！

「——いやだ……りく……」

返事がない。

そんな——嘘だ。

こんなのは間違いで、嘘っぱちだ！

「陸——ッ！ いるのだろう！？ 返事をしろ！」

暗闇の中、燃える残骸を光源に、視線を周囲の闇へと彷徨わせる。

「陸ッ！」

半狂乱になって陸の名前を呼びながら周囲を探す。

頭の中の正常を保つ紐が凄い勢いで引っ張られ、捻れキレソウになる。

「嫌……嫌だ、こんな……！ 陸ッ！ 私の前に姿を見せろ！ 私

は——私はここにいるぞッ！！」

返事はなく。ただ燃える音。

膝から崩れ落ちそうになる、その瞬間——

「紫苑……」

——大馬鹿者の愛しい声が背後から聞こえた。

「おぬしは馬鹿か！？ 阿呆なのか！？ このうつけ！」

なんだか久しぶりに紫苑の顔を見た気がする。

「こんなことをして死んだらどうするつもりだ！ このたわけもの！」

まあ…… かけられる言葉は、ほとんど罵倒なんだけど。

「うん、俺は馬鹿だよ。アホでうつけでたわけで、それと鈍感だった」

だけど綺麗な顔を泣き顔で濡らしている顔を見たら怒りなんて湧いてこない。

むしろ、本当にごめんと思う。

「どうしてだ。どうしておぬしは……」

つつかえ、涙を飲み下し、紫苑は乱暴な仕草で濡れた目を擦る。

「……………」

「……………」

沈黙が俺と紫苑を包む。

長い沈黙が続き、紫苑に声をかけようと俺が口を開いた瞬間、

「……してだ？」

「え？」

俯き、掠れた紫苑の声を聞き逃してしまい、俺は声を漏らす。

膨れすぎた風船が割れるように、紫苑は破裂するほど膨らんだ内心の想いを吐露する。

「どうしてだ！？ どうしてあの時—— 小学校のあの時と同じように陸は私を追いかけてくれるのだ！」

紫苑は近付き、身体を投げ出すように胸の中に飛び込んでくる。

握り締めた拳をドンドンと胸に叩きつけてくる。強すぎるノックだ。でもそれも当然かもしれない。

俺はずっと紫苑の《好き》という気持ちを気がつかない振りをして、部屋のドア同様に、扉を閉めたままだったんだから。

これくらい強くノックされても仕方ない。

紫苑の嗚咽は続く。

「金持ちのお嬢様と皆が私を敬遠するなかで、陸は私に声をかけてくれて……一緒に遊んでくれて！一緒にいてくれたじゃないかッ！優しく笑ってくれたじゃないか！あんなことをされたら、私はおぬしに惚れてしまっじゃないかッ！」

若武者のような男っぽい言葉遣いや、男女の立場が逆だとか、そんな言葉は全く出てこない。

そこにいたのは……脆く誰よりも純粹で綺麗な想いを崩れてしまわないように、抱きかかえて震えている少女だけだった。

「紫苑……」

彼女はそんなに前から、会えなかったずっと今まで俺のことを好きでいてくれたんだ。

ずっと好きでいてくれたんだ。

不意に幼い頃のことを脳裏に思い浮かぶ。

近所の公園で、学校で、どこでも紫苑は一人だった。

本当は寂しいのに、みんなを《愚民》とか呼んで一人でも平気だと強がっていた。

一人砂場で山を築く紫苑が寂しげで……引き結ばれた口元を笑わせてあげたかった。

だから人の輪から、離れて一人いる紫苑を追いかけて声をかけた。けれど紫苑はちつとも笑わなくて、でも帰る間際、紫苑はこう問うたのだ。

『おぬし、明日はくるのか？』

彼女独りで作った砂の山。その山の周辺に黙々と穴を掘りながら、こちらを見ずに放たれた無造作な問いかけ。

『私は一人でかまわない。私はつよいからな。だからべつに……こなくてもいい』

それは一匹の孤高な捨て猫を思わせた。

『紫苑ちゃんがいいならまた来るよ』

『ほ、本当か？』

疑い深そうな瞳で俺を見る幼い紫苑。

だから安心させたくて……笑って欲しくて俺は頷いた。

『うん』

『そ、そうか。待っているぞ……』

その時、ようやく紫苑は笑ったんだ。

思い出の中とは違い、目の前の紫苑の表情は涙で濡れている。

キツと柳眉を立てて、紫苑は俺を涙目で見据える。

「私は諦めなくなかったんだ！」

抱き締めてくる。抱きつく両手の強さは、紫苑の気持ちを代弁していた。

「陸が誰を好きになっても、付き合っても、結婚したって、私は絶対諦めるつもりはなかった！」

紫苑は俺を見上げる。

そこで……たとえ涙を流しても泣き声を上げるのを拒絶していた紫苑の顔がくしゃりと歪む。

「だが……陸に嫌がられたら……私——私は何もできないじゃないか……」

溢れ出す嗚咽をそれでも紫苑は強く自制すると、縋るような瞳で俺を見つめる。

「私は何だってするぞ！ 陸が望めば何だってできるぞ！ 辛い事だって、悲しい事だって歯を食いしばってでも耐えてみせる！」

だからと、震える声で紫苑は俺に言った。

「嫌いにならないでくれ……。陸に嫌われたら私には何も残らない。私は……嫌われるのが怖くて、嫌で……だから帰ろうと——陸の前からいなくなるうと思っ——ッ!？」

最後まで言わずに俺は紫苑を抱きしめた。

だって、放っておけるはずがなかった！ 涙を流しながら想いを告げる紫苑を放っておけるはずないじゃないか！

何でこんな簡単で当たり前のことすら、わからなかったんだ。

馬鹿だ。俺は。ここまで言わせてしまっただけで紫苑を追いつめてから気がつくなんて、本当に馬鹿。救いようのない大馬鹿者だ。

紫苑と言う存在をもっと貪欲に傍に感じたくて力の限り紫苑を抱き締める。

その時、俺は紫苑のことを涙が出るくらい本当に好きなことに、改めて気が付いた。

だからこれ以上、馬鹿にならないために口を開く。

「紫苑……」

世界中で誰よりも好きな女の子の名を呼びながら、右手で紫苑の頬に優しく触れる。

「り……く……?」

拙い言葉遣いで俺の名前を紡ぐ紫苑の唇に、そっと自分の唇を静かに重ねる。

紫苑が息を飲む気配がする。

だが、意識があつたのはここまでだ。

口付けと言う初めての行為に、俺の頭は痺れたように真っ白になる。

自分の感覚が唇に集中しているのがわかった。

思考は明確な形にまとめられず、ただ俺は紫苑が好きだと思った。

「何で……?」

驚きに何度も瞬きをして尋ねる紫苑に、俺は彼女の瞳から目を逸らさずに言った。

「紫苑に甘えていた。君がずっと俺を好きでいてくれるから、それに胡坐をかいていた」

かつての傲慢な俺にさようならをする。

「紫苑がいなくなるとわかった瞬間、耐えられなかった。あの日、幼い頃に君と別れたときも本当は寂しかった。声を大にして嫌だと言いたかった」

臆病な自分とケリをつける。

「紫苑がいなくなって退屈だった。つまらなかった。でもそれを平穩と思うことで、寂しくない振りをしていた」

嘘つきで強がりな俺を閉め出す。

「君は俺の向日葵だ。ずっと憧れていた。紫苑が好きだ！」

言った。

なおかつ、いつも彼女が俺に言ってくれたように、ありったけの愛を叫ぶ。

「紫苑、君を超電磁・愛しているッッ！」

「ズギユウウウーン!?」

電撃を受けたように妙な効果音を口にしながら、紫苑の身体が震える。

「ちょ、超電磁……愛していると……そ、それは真<sup>まこと</sup>か？」

「うん、本当だよ」

暫く呆然とした表情をしていた紫苑は、突然力ツと瞳を見開き、俺の両肩をガシツと掴み、聞き返す。それはクマが獲物を捕食するのを彷彿とさせた。

「つか——い、痛いよ? ……多分、そこアザができてる。」

「ほ、本当なのだな!？」

「ああ」

でも、紫苑の気持ちも全部と言えないけど分かるから躊躇せずに頷く。

それだけ優柔不断な態度をとっていた自覚あるから、歯を食い縛って笑顔を浮かべる。

「本当に本当か!？」

「あ、ああ」

前後に激しく身体を振らされる。

全身に激痛が走るが、が、我慢だ。男だろ天堂陸ツ。

「絶対か!？　嘘を言っていないか!？　騙していないか!？　じつは謀反ですとばかりに本能寺に攻め込む明智光秀的ドッキリじゃないだろうな!？」

「絶対だし、嘘も言っていない。騙すわけないだろ？　あと下剋上しないから安心してください」

俺は紫苑を安心させるように笑いかける。

照れくさそうに、だけど確実に幸せに俺と紫苑は微笑みあった。  
「では——最終確認するが、それはLikeじゃなくてLoveなんだろうな!？」

「ああ、ラブだ。ウに濁点つけてヴなくらいだよ」

「じゃあ……」

そして紫苑の口にした言葉に笑みを——

「私をベッドに引きずり込んで、『今夜は寝かさないぞ』と言いなから、一晩中ニヤンニヤンしちゃうくらいのラブなのだな!？」

——凍りつかせる。

狂気がそこにあつた。いや狂喜？

どちらにしても荒い鼻息と期待にギラギラ満ちた紫苑の瞳が、俺にイエスの言葉を急ぎ立てる。

「言っておくが、ここでノーなど言ってみよ。すぐさま、紫苑ちゃんは今、流行りの『ヤンデレ』開眼するからな。すぐさま拉致監禁だ(ω) b」

半眼で若干瞳に《ヤン》が入った双眸でひたと見据える紫苑。

「あ、ああ……」

俺は躊躇……『泣く』、

「もちろんイエスだ。決まっているヨ」

答えた……。

「ござる……」

紫苑はとても嬉しそうだった……。周りを駆け回る。俺も嬉しいよ……うん……。

奇声を上げながら紫苑はウォークリフトの周りを童女のようにしゃぎ回る。

「フフフフ、フハハハハハハハハ！　こオれで陸は私のモノだ！　これで陸は私の淫乱肉奴隷だ！　これからは今まで我慢して実行できなかったことを残らず思いつく限りやるぞお！　さすが押し駄目なら引いてみよ！　面白いくらいに食いついてきおったわ！」

（え……？）

「さああんなコトやこんなコト、あまつさえグフフなコトもやってやるぞ、フフフフ……！　アッハハハハハハ！　これが桶狭間で今川義元を打ち取ったときの織田信長の気分か！　もしくは皇帝を裏切ったブルータスの気分！　まさに地獄から天国の階段をジェツト噴射で昇竜の如し！」

炎に照らされる彼女の顔は美しく——同時にこの世のものは思えぬほど恐ろしかった。

（……………滝汗）

ワキワキと不気味に蠢動する紫苑の両手の指。

童女が口にするには一度アブノーマルな旅に出かけて、危険と邪悪と無敵と言う名の三つの薬物ドラッグを常時注射。そして脳まで薬物が回った状態でなければ、とても考えられない恐ろしい内容を紫苑は口にした。

あと時代が風雲轟き、ほら貝が鳴り響く戦国時代になっています。そこにはさっきまでの純情可憐な紫苑はいなく……代わりにはいたのは、危険志向を至高と嗜好し、ノーヘルメットに制限スピードオ

バー、デッドヒート寸前で、しかも飲酒運転をし、あまつさえ老人を二体ほど撥ねて早すぎるお迎えを実行した凄惨な光景を彷彿とさせることを可能とさせる紫苑が――恋に狂ったサムライガールが哄笑をしていた。

ごめん。

凄い動揺で上手く言葉が纏まらない。今の気持ちを混乱と焦燥で表現しきれない。

「おっと、忘れる所だった！」

すると紫苑は突然、少年が美少女に憧れる幻想を打ち砕く言葉を放つのを止めると、周囲の暗闇に向ってピースサインを突き出して、言った。

「ものども、勝ち鬨を上げよ！」

その瞬間、

『おめでとうございます紫苑お嬢様！』

見事にシンクロした成人男性達の声が月の綺麗な滑走路に響き渡る。

体格の良い黒服、黒のサングラスという装いの男たちが一斉に姿を現す。その数二十近く。

「な、何なんだ!？」

黒服姿の男の人たちの中で、唯一口ひげを蓄えた一人の男の人が胸元からトランシーバーを取り出すと、スイッチをオンにして言った。

「紫苑お嬢様は“恋の策略”を持って無事、陸様に告白を受けました」

『ラジャー。TV局に連絡を入れてくれ。こちらは降下体勢に入る』  
雑音の入った声が口ひげの男の人の言葉に答える。

嫌な予感がした。いや……嫌なことが起こる確信がした。

口ひげの男の人は携帯電話を取り出すと、ワンボタンでコール。

「サンライトTV局ですか？ 事前に連絡があつたように綾崎家の末娘であらせられる綾崎紫苑お嬢様と天堂陸様の婚約宣言を本日発表いたします」

「TV局！？ 婚約宣言！？」

危険を知らせる稲妻が俺の背中に大量に駆け抜ける！

驚く俺を尻目に数台のヘリコプターの翼の音が、機関銃の勢いで空から聞こえてくる！

ヘリコプターは目を塞ぐほどのスポットライトを降り注ぐ。

うわ、眩しッ。や、やめてください。

「な、ななな……？」

「万歳だな、陸！」

手錠のように腕を組んでくる紫苑。

てーか、あなた“すでに”ヤン開眼してませんか？

割れんばかりの拍手と賛辞の言葉を連呼する黒服の男たち。

てーか、この人たち少し前に噴水公園であつた人たち？

「今晚は、サンライトTV局から生中継でお伝えしています！ 只今、某国際空港である有名な巨大複合企業経営者の社長である綾崎秀土さんの孫娘の一人であらせられる綾崎紫苑さん（十六歳）が今、電撃婚約宣言を発表する事となりました！ 気になるお相手は天堂陸さんと言つ綾崎紫苑さんの幼馴染でして……」

興奮気味にいつの間にか陣取っているカメラに向つて捲くし立てるTV局の女性レポーター。ヘリコプターから舞い落ちるピンク色の花びら。

そしてヘリから次々に人が降りてくる。

口ひげの男が呼んだ合唱団。もう指揮者が凄い勢いでタクト振るまくつてる。

演奏は、序盤からいきなりクライマックスという具合。

あまりの急展開。用意周到すぎる出来事。紫苑が漏らした食いついてきたという言葉。

俺は絶望的な笑みを浮かべた。

「一体全体——なんでやねん……」

夜の静寂を掻き消さんばかりの喧騒の中、俺のつつこみの声を聞いた人が果たしていたかどうか……

きつと頭上で輝く月だけが知っている。

だから月の女神よ……無言で嘲笑するのだけはやめてください……

…orz

（ああ……幸せすぎて心が折れそうだよ……）

### 第三十六章 結婚式、そして……

#### 《天堂陸》

「綾崎紫苑、汝病める時も健やかなる時も、この者を愛することを誓いますか」

重々しく。だが慈愛に満ちた声で神父さんは紫苑に尋ねる。

「誓いまくる！」

教会に響き渡る声量できっぱりと紫苑は高々に宣言した。

それはもう初な乙女なら両頬を赤く染めてしまいそうなくらいに、実に堂々と力強く、おまけに雄々しく圧倒的な雄度だった。

ここは教会。

穢れない純白のウェディングドレスに身を包んでいた紫苑は見とれてしまうくらい綺麗だ。

ただし、これには仁王立ちしながら誓いの言葉を口にしないと言う条件がつく。

なににせよ俺は今、教会にいる。

いや教会に無理矢理連れて来られた。新郎のスーツ姿で……

あの夜——紫苑に好きだと告げた瞬間、俺の周りの世界が急

速に加速した。

紫苑に好きだと想いを告げたことに後悔は……ない……と思う。  
俺は確かに好きだと紫苑に言った。超電磁愛している。それは認める。

だが！

（どうして、いきなり結婚しなくちゃならないんだ！？）

いや、別に紫苑と結婚するのが嫌とかそう言うわけではないんだけど、そのいくらなんでも早すぎないか？

（俺はまだ高校生なんだぞ！？）

頭を抱えて俺は蹲りたくなった。

そして、蘇る光景……。

紫苑に告白した夏休みあの夜、黒服の男たちが現れ、ＴＶ局とヘリコプターを召喚した。

紫苑のお爺さんの経営している事業の知名度の高さと、彼の事業のＣＭや雑誌などにイメージアップの一環で出てくる孫娘の紫苑の婚約相手飛んで結婚相手と言うことで、俺の顔や名前は一躍有名になってしまった……。

勘弁して欲しい。俺は平穏な日常を好んでいる。確かに紫苑がいなくなつて退屈だというのを覆い隠そうとしていたある種の逃避だと思う。

だけどころな大勢人の目の前でこんなのは無理だ……一体どうしてこうなるんだろう？

さらに、ヘリコプターから紫苑のお爺さんもやって来た。

お爺さんは、俺と紫苑の姿を見るなりため息混じりに言った。

『おぬしの行動力は、婆さん譲りじやの……仕方あるまい』

どこか懐かしげに目を細めて続けた。

『孫娘をヤンデレにするわけにはいかんからの。天堂陸くんとの際を許可しよう』

紫苑のお爺さんの鶴の一声と紫苑の強気な押しで、あつと言つ間に結婚式の段取りは決まってしまう。

そこに俺の意見が入り込む余地はなかった……。

「で、では」

紫苑の気風のよさと言うか、花嫁らしくない態度に神父さんは戸惑いながらも言葉を続ける。

「――天堂陸………汝、死が二人を分かつまでこの者を愛しますか？」

「え……ッ！？ あ、あの……」

今更だが言葉に詰まる。

ちよつと疑問なんだが、何で紫苑はあんなにも照れもせず、臆することなく誓いの言葉を口にできるのだろう？

そう思い紫苑の方に視線を移した瞬間、

「……ひッッ！？」

鼓動が妖しく跳ね上がった。

俺は息を飲んだ！

紫苑は凄まじく熱を帯びた瞳で俺を見つめていた！

下から俺を見上げる双眸は照れよりも、その仕草による萌えよりも恐怖を俺に感じさす。

まさに鬼嫁！

まだ嫁でもないのに！

双眸は声なき声で俺に語りかけた。

『誓わなきゃ殺す！』

と。

紫苑の内心で膨れ上がる鬼気は大の大人でも背筋を凍らすほどで、俺も例外ではない。

「は、はい！　ち、誓いますッ！」

俺は軍人が上官に服従の意を示す勢いで誓いの言葉を叫ぶ。

（逃げられへん）

そう思った。

そう確信に足りる眼をしていた。

「で、では指輪の交換を」

神父さんは言った。

彼の額にも汗が浮かんでいる。

錆びた機械人形のようにぎくしゃくした動作で俺は指輪交換を終える。一応、バイトで貯めていた全財産をつぎ込んだ自前で用意した結婚指輪だ。

「では、誓いの口付けを」

神父さんは……言った。

俺は救いを求めるように母さんを見た。

母さんは息子の心情を知らずにっこりにつっこりにつっこりにつっこりにつっこりにつっこりにつっこりにつっこりと笑っていた。

俺は海を見た。海はPSPに夢中だった。くるくる変わる表情が俺の事が眼中にないことを、俺に教えてくれる。

単身赴任で海外から戻ってきた父さんは疲れているのか居眠りをしていた。

お、俺は紫苑を……見た……

紫苑はにっこりとはにかむように笑った。

それは美しい笑顔だったが、紫苑の考えに反することをすれば、すぐさま険悪の二文字に変貌する威圧感を秘めていた。

（逃げられへん！）

クマの凶暴な顎に捕まった鮭の気持ちさが心底胸に染み渡りながら、俺は諦めた……。

（さようなら平穏な日常……）

恋しかった。切なかった。

けれども穏やかな日常に別れを告げて、紫苑に口付けをしようと歩み寄る。

「陸……」

小さく俺の名前を呟く紫苑に、不意に胸の高鳴りを覚えた。

（何だかんだ言っても、俺は紫苑のことがやっぱり好きなんだな……）

内心で苦笑する。

そして俺は紫苑の唇に自分のそれを重ねるため、紫苑へ顔を寄せていく。

「フリーズ！」

あと僅か数センチで、唇で永遠を誓い合う寸前、

「待て待て、待ちたまえ！」

教会の扉が開く凄まじい音と、アレックス君の制止の声が教会中に響いた。

紫苑に告白した夜、アレックス君は妨害することも嫌味を言うわけでもなく、なぜかすぐにジェット機で帰国して行った。

それが今、どうして？

いつもの白いスーツに身を包んだアレックス君の右手には、赤いバラの花束が握られている。

人々の視線を集め、引き連れながら、つかつかとアレックス君は俺たちの目の前までやって来る。

一波乱の予感を覚悟した。

なにせアレックス君は紫苑の婚約者だったのだから、俺に文句の一つも言いたくなるものだと思う。

「何のようだアレ公？ 貴様との婚約破棄の連絡はしたはずだが？」  
鋭い舌打ちを隠すわけでもなく、半眼でアレックス君を見つめる紫苑の瞳は、雪山のブリザードを思わすほど凍てついている。

「確かにその連絡は受けた。そしてその事に異議を申し立てる気はない」

素直にアレックス君は婚約破棄の事実を認め、宣言する。

「だがここでボクは新たに宣言する！」

教会中の人々がアレックス君の言動に注視する中、彼は大きく息を吸い込み……

「リクはボクのモノだ！」

胸を張って俺に求愛宣言をかました！？

「な——！？」

「何ッ！？」

驚く俺と紫苑を余所に、

「それにだ……」

アレックス君は金髪の髪を気障にかき上げて続けた。嫌み極まりない仕草だが、美形が行えばそれは見事の一言に尽きる。

「ジャパンの法律では男は十八歳にならなければ、結婚はできないはずだ！」

「ぬかった——ッ！？」

歯を悔しげに噛みしめる紫苑を、アレックス君は得意気な顔で笑う。

そして、アレックス君はかつて紫苑を見つめていた時のように愛情溢れる瞳で俺を……見る！？

「さあこの愛の証であるバラを受け取ってくれ、マイスイート！」

姫に傳く騎士のようにアレックス君は俺にバラの花束を差し出す。その目はマジだ。

「こ、こら！ 人の愛の下僕……じゃなかった、人の結婚相手に手を出すな！ このエセ外人め！ だいたい何だお前の言葉遣いは！

恥を知れ！」

慌てて紫苑はアレックス君に抗議の言葉を投げつける。  
だが、そんなことで怯むアレックス君ではなかった。

「黙れこのメス豚が！ 毒婦が！ あばずれが！ 言葉遣いでキミに非難される覚えはナッシングだね！ 時代錯誤も甚だしいんだよ、この色ボケサムライガールめ！」

くわつと獲物を狩る猛禽のように鋭い侮蔑の視線と辛辣な言葉でアレックス君は反撃する。

「むう、愛くるしい紫苑ちゃんに何と言う暴言を……！」

アレックス君はかつて俺を見つめていた時のように憎悪溢れる瞳で紫苑を見る！？

その180度違う反応に戸惑うものの果敢に応戦する紫苑！

「ふん、しかしおぬし残念ながらは男だ！ 男同士では結婚できない！」

嘲りたつぷりに紫苑はアレックス君を見下すが、  
「ドント ウォーリ！ ヘソでティーを沸かすね！ ボクはバイセクシャルさ！」

上着のボタンを外し、ウィンク一つ。

「ヤラないか？」

アレックス君は手品のようにすらりと俺を優しく抱き締めると、拒否行動を起こす前に、多くの人の前で深いキスを——する！？

「？ んんツ！？ はむっ、ちゅっ、ふああ、ああっ、うむうううううーん！？」

な、なんですか。どうして おれと あれつくすくんの くちびるが ふれあっているのですか。ふれあいまくっているのですか？  
なんですかこのぬるつとしたのは—— ま、まさか舌！？

「ん——ツ！？」

俺の心臓が鼓動を止めた瞬間だった。

「ぎゃああああ！ な、なんてことを……なんてことをするのだ貴様は！？ この不潔、汚物、ケダモノ、歩くエロスが！」

「ハハハ」男はウルフなのさ！ さあリク今日は寝かさないよ」  
ポンと瓶の蓋を開けるような音をたてて、アレックス君は俺の唇から、自分のそれを離す……支えを失い、前のめりに倒れそうになる俺をアレックス君がすぐさま支える。

（ば、馬鹿な、腰にキテいる！？）

こ、これがアメリカの本物のキスなのか……！

正直、凄く気持ちいい……って……！！！！

「うあ……ああ……ああ……！？」

目の前が暗くなる。

衝撃と認めたくない快樂のせいで脚にきているのか、糸の切れた操り人形のように地面に座り込みそうになる。いや、もう心は折れている。折れている？ そんな生易しいもんじゃない！

（俺の心はボロボロだあああああああああーッ！）

男の人と、同姓と、ヤングマンとキスした事実が、俺を谷底よりもなお深き深淵に突き落としていた。

「ふふ、思った通りだ。リク、キミは『才能』があるよ」

「！？」

そんな才能は全力でいらないッ！

「馬鹿を言うな、この変態が！ だいたい寝かさないのは、それはこつちのセリフだ！ 私たちはこれからハネムーンに行つて、媚薬と精力剤を飲ませて結婚初夜でむふふのふなんだ！ 貴様の入り込む余地はない！ 貴様、陸を返さんかッ！」

男性とキスした衝撃が俺を闇に静めているのに、紫苑の過激な発言が俺の生き残った精神を破綻させてくる。

「そんなことをボクが許すと思つたのかい？ 我がバグネットコーポレーションの財力でハネムーンなんてクラッシュさ！ ウヒヤヒヤヒヤ！ しかも一部のマスコミにはボクとリクがラヴラヴと言う情報を流しておいたから、お前に勝ち目はないよ、小娘が！ だいたいリクは今のキスで腰砕け、ボクにメロメロさ！ グウエヘヘヘ！」

も、もうやめてえええ！

これ以上。俺を辱めないでええええ！！！！

とつくに俺のHPはゼロよ！

「おのれええ……もはや許さん！ 乙女ザムライの刀の錆びにしてくれる！」

どこからか紫苑は日本刀を取り出し抜き放つと、身の毛のよだつ鬼気を放出しながら、日本刀を振りかぶり灼熱の殺気を放つ！

「乙女の恋路を邪魔するやつは切り刻んで養豚所の豚のエサにしてくれるぞ！ よもや生きて帰れると思うなよ、鬼畜米兵が！」

「ハハン」平成のガンマンと呼ばれたこのボクとファイトしようというのかい？ 淫乱メスキャットめ！」

アレックス君は特注製造した銃身の長さの黒い拳銃をどこからか取り出すと、十三mm爆裂鉄鋼弾を餓狼の瞳で取り出し、拳銃に込める！

「おいおい凄いスクープだぜ！ カメラ回せ！ 新郎を取り合つて、世界に名高い綾先崎家のご令嬢とバグネットコーポレーションの御曹司が決闘するぞ！」

お願いも、もうやめてえええ！

これ以上俺のために争わないでええええ！！！！

どうしてこんな目に遭うんだ！？ 俺が一体何をした！？ 今年  
は吉だったのに、嘘つき馬鹿馬鹿！

「くらえ白豚、ラヴ微塵切りーッ！！！」

ズババババババババババババババババ！

「ユーの顔は見飽きたぜ！ 必殺『愛の弾丸、秘められしリクへの想い』を、しこたま喰らいな！」

ドゴドガドガガガッガガッガウーン！

閃く剣閃。咆哮する鉄の獣が吐き出す硝煙。



第三十六章 結婚式、そして……（後書き）

次回、最終回です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9105x/>

---

なんでやねん！

2011年12月22日12時53分発行